

先生方とともに
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉
高校版
2021
Volume 6

2月

VIEW21



今号の表紙の
絵の制作者

熊本県立第二高校
矢野世^{せれな}怜那さん

表紙裏に矢野さんへの
インタビュー記事を掲載

特集

シリーズ 教育の「これから」を考える ③

真価が問われる 特別活動

新課程に向けて描く「学校教育デザイン」

群馬県立吉井高校

主体的・対話的で深い学びへ
実践 アクティブ・ラーニング

工業 石川県立工業高校 ^{ながた ひでふみ}長田英史

現代文 兵庫県・私立百合学院中学校・高校 ^{ともこ}内橋朋子

指導変革の軌跡

北海道札幌北高校

表紙制作者

熊本県立第二高校
3年生
矢野世怜那さん



高校生との対話で描く

私たちの学校
これからの学校



聞き手

VIEW21 編集部
統括責任者
柏木 崇

1998年4月号から生徒と教師の写真で飾られてきた本誌表紙。2020年6月号からは、臨時休業という想定外の状況下で、学校での学びの価値を捉え直した生徒のアート作品の力を借りて、引き続き、生徒と教師の関係を描きます。

矢野さんは、今回の表紙に掲載した作品以外にも、写真と絵を融合させたものなど、様々な手法で作品を制作してくれた。下は、矢野さんが第二高校の教師に意見をもらうために提出した制作途中のもの。



矢野さんが通う熊本県立第二高校の取り組みを、今号の特集 (P.16 ~ 20) で紹介しています。

学校で他者のよさを見つけながら、人と人がつながっていく

柏木 今回の絵を描いた時の状況を教えてください。

矢野 この絵を描いたのは5月下旬の臨時休業中で、参加する予定だった美術コンクールが開催されず、新たな目標を探していた時でした。さらに、運動会も中止になり、応援団席に掲げる巨大な団画を制作する機会もなくなりました。美術科の3年生として悔しい思いをしていたところだったので、自分の力を外部に発信できるチャンスをいただけてうれしかったです。

柏木 表紙の絵として選んだ作品以外にも、候補として何点か描いてくれたんですね。

矢野 はい。どの作品でも、先生と生徒の関係の近さを表現しました。私が第二高校に入学して驚いたのは、職員室にいつもたくさんの生徒がいて、先生と話をしていることでした。臨時休業期間を通じて、先生とのコミュニケーションの大切さを改めて感じたので、先生と生徒のつながりを絵で表現したいと思ったんです。

柏木 先生はとても身近な存在なんですね。

矢野 勉強のことも進路のことも相談しやすいです。この絵についても、先生方からいろいろな意見をいただきました。校長先生にもアドバイスをいただいたんですよ。

柏木 美術科の先生だけではなく、校長先生にもですか！いろいろな人から意見をもらうことで、混乱することはないのでですか。

矢野 美術では、意外な部分が評価されたり、指摘を受けたりすることがよくあります。そして、試行錯誤を重ねた作品が「強い作品」として評価されるんです。確かに、以前は指摘を受ける中で、自分を否定されているような気持ちになったこともありました。でも今は、他者の意見に対して、「自分の知らない魅力を引き出そうとしてくれる」と思えるようになりました。

柏木 自分では気づいていない魅力を他者が見つけてくれる……それってまさに、人間関係の礎として必要なものかもしれません。

矢野 作品に対する批評をそのように受け止められるようになってからは、人間関係でも相手のよいところにまず目が向くようになったんです。よいところをたくさん見つけて、すぐにそれを相手に伝えてあげようという気持ちで、他者と向き合えるようになりました。

柏木 そうした他者のよいところを見つけようという気持ちは、矢野さんが絵で伝えようとした、第二高校における先生と生徒のコミュニケーションにも通じるものかもしれませんね。第二高校の職員室の様子を、矢野さんと一緒に鑑賞してみたいなと思いました！ありがとうございました。

先生方とともに歩んだ『VIEW21』の「これまで」

1974年に創刊した本誌は、今号で通巻386号を数えます。日本の教育の変革の軌跡と、2021年4月より『VIEW next』に名称を変更する本誌の、先生方とともに歩んだ「これまで」を振り返ります。

2000年

主な出来事

- ◎ 共通第1次学力試験の初実施 (1979年)
- ◎ 共通第1次学力試験に代わる大学入試センター試験の初実施 (1990年)
- ◎ 中央教育審議会の答申「子供に『生きる力』と『ゆとり』を」 (1996年)

1974年

「進学指導」から「進路指導」へ 現場の課題に対応

『VIEW21』のルーツである『進研ニュース』は、進研模試のデータを盛り込みながら、大学入試情報を中心に、教育に関する情報を先生方にお届けしてきました。90年代に入ると、社会環境や生徒の気質の変化などによって、学校現場が「進学指導」から「進路指導」にシフトしたことに合わせ、「進路指導」中心の情報提供に編集方針を転換しました。

1995



21世紀を見つめ、教育の「これから」を考える情報誌として、『進研ニュース VIEW21』に名称を変更。

1983



より豊富な内容の大学入試情報をお届けするために、創刊10年を機にB5判の情報誌に。

1974



共通一次試験案が衆目を集めていた大学入試の激動期。本誌は、4ページのタブロイド紙として創刊。

『VIEW21』を一言で表すと「囲炉裏」です。そこは暖かい場であり、様々な「出会い」と「気づき」が生まれます。『VIEW21』との初めてのかかわりは、1997年Vol.1で、当時の勤務校での3年間の進路指導ストーリーを報告させていた時です。その号の特集は「2010年の教育環境を予測する」で、様々な調査データを基に、全国の経験豊かな先生方が、それぞれの立場から議論していたその記事から、私は多くの「気づき」をいただきました。その後も幾度となく『VIEW21』にかかわらせていただきました。直面する教育課題について、半歩先の教育に対する



寺島 求
東京都立新宿高校 非常勤教員

「出会い」と「気づき」をもたらず高校教師の「囲炉裏」

先見性とデータに基づきながら、多様な視点で議論するというスタンスは、変わることなく受け継がれていると思います。『VIEW21』の企画を通じて、全国の先生方との意見交換も経験しました。時に耳の痛い議論になっても、「生徒を第一に」という共通認識があれば、大きな「気づき」となる。自分の成長の糧とするだけでなく、想いを同じくする全国の先生方に元気を届けることもできたのではないかと振り返っています。『VIEW21』がつないでくれた先生方とのご縁は、私の一生の宝です。今も高校現場は、様々な教育課題への対応を求められています。『VIEW next』を中心に、全国の先生方が集まり、語り合い、知恵を出し合い、よりよい解を見つけていってください。『VIEW next』が、高い志を持った先生方にとっての「囲炉裏」となることを期待しています。

私と『VIEW21』

本誌に彩りを添えた高校教師や識者が、『VIEW21』の思いと『VIEW next』への期待を語りました。

1998



表紙を、「教師と生徒のコミュニケーション」をコンセプトにした写真に変更。以来、臨時増刊号を含め、140組を超える「教師と生徒」が表紙を飾ってきた。

2004年4月号からは、図版を大きく掲載するなど、より見やすい誌面を目指して、A4判に変更。



2001年

- 主な出来事
- 公立高校に完全学校週5日制導入 (2002年)
 - 高校で「総合的な学習の時間」の導入 (2003年)
 - 大学進学率が50%を突破 (2009年)

教育の「これから」を考える視点が增える

21世紀を迎えると、学力の多層化や進路観の多様化など、高校現場の状況はさらに変化し続けました。それに対応するように、本誌の特集のテーマも、「国際化を視野に入れた進路観の養成」「学力多層化への対応」「保護者と『共有』する学校づくり」「『自立する高校生』をどう育てるのか」「SIを土台に新課程カリキュラムをつくる」など、多彩に。グローバル化への対応や科学技術系人材育成のための研究事業も始まり、教育の「これから」を考える視点も増えていきました。

2010



2006



2005



スーパーサイエンスハイスクール (SSH)、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (SELHI) といった新潮流は、臨時増刊号で詳説した。



福岡県立城南高校の『ドリカムプラン』などの先駆的な取り組みは、継続的に誌面に取り上げ、時代の中での進化を追いかけた。

『VIEW21』が新しく生まれ変わること、おめでとうございます。30年以上を拝読する中で、多くの情報を得ることができました。私は、『VIEW21』の最大の魅力は、常に現場に寄り添い、みんなで未来の教育を育てていこうとする「志」だと思っています。自分も何度か誌面に登場させていただき、全国の先進的な先生方と交流する中で視野を広げることができたと感謝しています。

特に印象に残っているのが、2010年10月号での牧島勝利先生（栃木県・私立文）



ユマニテック短期大学 学監
ユマニテック教育研究所 副所長
鈴木達哉

未来の教育を育てる「志」と現場に寄り添う姿勢に感謝

「せんせーい、決まりましたよおー」ベネッセの学校担当者が、進路室のある3階まで大声で叫びながら階段を駆け上がってきた。1994年10月に開始した「福岡県立城南高校ドリカムプラン」が、『VIEW21』に取り上げられることが決まったのだ。入社2、3年目の若手社員の企画が通ったとあって、企画を売り込んだ私たち（城南高校職員3人組）も大喜び。まだ当時のものとも山のものとも分からないドリカムプランについて、私たちはこう言っています。

「せんせーい、決まりましたよおー」ベネッセの学校担当者が、進路室のある3階まで大声で叫びながら階段を駆け上がってきた。1994年10月に開始した「福岡県立城南高校ドリカムプラン」が、『VIEW21』に取り上げられることが決まったのだ。入社2、3年目の若手社員の企画が通ったとあって、企画を売り込んだ私たち（城南高校職員3人組）も大喜び。まだ当時のものとも山のものとも分からないドリカムプランについて、私たちはこう言っています。



福岡県・福岡市立福岡西陵高校 校長
和田美千代

未来の創り手の教科書であり、同志との出会いの場だった



2017年

主な出来事

- ◎東日本大震災発生 (2011年)
- ◎高大接続改革に関する中央教育審議会の答申 (2014年)
- ◎新学習指導要領に関する中央教育審議会の答申 (2016年)

生徒が自らの人生を 切り拓くための 資質・能力の育成に 焦点をあてる

AIを始めとする技術革新やグローバル化の進展などを背景に、「主体性の育成」「変化を生き抜く『軸』と『修正力』の育成」「多面的評価」など、生徒が自らの人生を切り拓くための資質・能力の育成に焦点をあてた特集が多くなりました。アクティブ・ラーニングの先駆的な実践者や、育成を目指す資質・能力を設定し、その実現を目指す学校改革の営みである「学校教育デザイン」を描く取り組みを取り上げる企画もスタートしました。

2017



「学校教育デザイン」を描く取り組みの先進校、山梨県立吉田高校の実践は、シリーズ特集として継続して紹介した。

2015



探究学習やアクティブ・ラーニングにおける、各校・各教師ならではの様々な実践を掘り下げた。

私は、進んで情報を収集して、それを自校に取り入れていくタイプではなく、直感で動くタイプの校長でした。そんな私でも、『VIEW21』だけは目を通していました。山梨県立吉田高校に校長として赴任した際、従来からの教育目標に疑問を持っていた私は、「吉田高校グラデュエーションポリシー（吉高GP）」の導入を決めました。学校のウェブサイトにアップして間もなく、編集部から取材依頼があった時は、「すべての高校のウェブサイトをチェックしているのか」と驚きました。継続取材



山梨県立吉田高校 前校長
高保 裕樹

次代の行方を照らし、 挑戦者に喜びと誇りを与えた

の打診に、「記事に合わせた取り組みをする気はないが、それでよければ」と、横柄な回答をしたにもかかわらず、その後も取り上げていただき、大変感謝しています。『VIEW21』の発信力は凄まじく、視察校が後を絶ちませんでした。一番うれしかったのは、記事を読んだ生徒や保護者、先生方が、今まで以上に学校に誇りを感じてくれたことでした。創立80周年の節目の年だっただけに、これ以上ない喜びでした。社会が大きく変わっていく中、むしろ、学校教育が社会の変化をリードするぐらいの気概が必要なのではないでしょうか。『VIEWnext』が次代の学校教育の行方を照らし、先進的な取り組みに寄り添い、応援する情報誌になられることを心から祈り、期待しています。



静岡県立御殿場高校
美那川 雄一

人と人をつなぐ場であり、 ともに悩み、挑戦させてくれた

高校2年生、9月。真っ黒に日焼けして夏休みも部活動に打ち込んだ生徒たち。何やらそわそわして落ち着かない。中間審査も近いのに、勉強に身が入っていないようだ。青春真つただ中の彼らに、担任としてどんな声をかければよいのだろうか？ 今の彼らに、響く言葉は何だろうか？ 職員室に戻ると、机の上に『VIEW21』があった。ページをめくると、部活動と勉強の両立を通して生徒の人間性を高めている実践事例が載っていた。人を育てることの価値を熱く語る言葉が、そこにはあった。巻末には

「夏休み前後の指導」という企画。全国の先生方も、2学期の指導に悩んでいた。読み進めると、私は肩の力が抜けていくのを感じた。「生徒一人ひとりと話をしてみよう」。ネクタイを外し、空色のサッカーシャツに着替えて、私はグラウンドに向かった。15年前に、私は『VIEW21』と出会いました。誌面に登場する先生方を尊敬し、目標としました。ですから、前任校で当時新たな試みだったパフォーマンス課題・評価やルーブリックを用いた授業を取材してもらった時はうれしかったですし、全国の先生方から「意見をいただいたことでもっといろいろなことに挑戦しようと思いました。『VIEW21』によって、「1人で挑戦しているのではない。全国の先生方と一緒になのだ」と考えるようになったのです。

2020年6月号からは、臨時休業という想定外の状況下で、学校での学びの価値を捉え直した生徒の絵が表紙を飾った。



- 主な出来事
- ◎高校の新学習指導要領の告示 (2018年)
 - ◎新型コロナウイルスの感染拡大と臨時休業 (2020年)
 - ◎大学入試センター試験に代わる大学入学共通テストの初実施 (2021年)

2018年

学校における「対話」の文化の創出と教育の「これから」を提言

答えが1つではない問いに向き合うことが求められる時代となり、互いの考えや思いを共有する重要性が高まる中、学校に「対話」の文化を創出することを目的に、誌面での情報発信にとどまらず、ワークショップの形によるリアルな対話の場づくりにも挑戦しました。2020年4月号からは、新型コロナウイルスの感染拡大、そして臨時休業という、まさに予測困難な状況下での各校の取り組み、さらには生徒や教師の姿を取材し、教育の「これから」を考え続けました。

VIEWnextへ

予測困難な時代だからこそ、先生方とともに、教育の今を見つめ、未来を描いてきたい

半歩未来を見据えて、生徒たちと本気で向き合い、ご指導される先生方の熱量を取材を通して感じ、そこから多くを学ばせていただきました。「手を放すために手をかける」。取材した先生から教えていただいた言葉です。子どもの自立に何が必要なのかを捉える、素晴らしい言葉だと思えます。先生方に負けないように、未来を見据え、今何が必要なのかを考え続けていきます。

ベネッセ教育総合研究所(VIEW21 高校版 前編集長) 小泉和義

『VIEW21』の前身である『進研ニュース』創刊から47年、通巻386号……その歴史と、誌面を通じて先生方からいただいた数々の言葉の重みを、今回の特別企画を通して改めて感じました。『VIEW21』の取材や記事をきっかけに多くの先生方が出会い、そのつながりが広がっていく。それは本誌が追求し続ける、ありたい姿の1つです。そしてこれからも、先生方の今に寄り添うことを大切に、先生方とともに教育の未来を見つめてまいります。

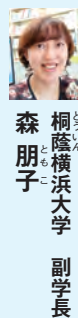
VIEW21編集部 統括責任者 柏木崇

2019



2019年3月、カリキュラム・マネジメントの推進を目的としたワークショップを開催。全国から集まった高校教師が、課題や展望について存分に語り合った。

ピンチをチャンスに変える
パートナーとして期待したい



桐蔭横浜大学 副学長
森 朋子

私の仕事は高校や大学の「学びのデザイン」なので、高校の先生方の興味・関心や挑戦が満載の『VIEW21』に目を通すことは必須です。それは、高大接続や高大連携の観点から大学をよくすることにもつながります。学びにおいて高校と大学がつながることが、人材育成の重要なポイントです。『VIEW21』はその活動のパートナーとして私を支えてくれました。

『VIEW21』との縁で印象深いのは、2019年3月のカリキュラム・マネジメントのワークショップです。準備段階から、参加者の学びをどのようにデザインするの

か、編集部の方々と議論を重ねたことが懐かしいです。結果、全体会や分科会、そして後日のフォローアップなど、その構造やプロセスそのものが学びの理論に沿った、よいワークショップになりました。全国から集まった、多様な経験を持つ参加者と、日常的な課題や優れた教育実践を共有できたことも、私の大きな財産になりました。

コロナ禍で従来の授業観・教育観の転換が余儀なくされましたが、私は硬直気味の授業、カリキュラム、そして学校全体を見直すよい機会と位置付けています。ピンチはチャンス。予測困難な世の中だからこそ、生徒・学生一人ひとりの資質・能力を精いっぱい伸ばす教育活動を、高校と大学がタッグを組んで実現させましょう。『VIEWnext』は、そのパートナーとして、私たちに知見を与えてくれるはずですよ。

VIEWnext
創刊記念セミナー開催

3月27日(土)
13時30分~15時40分
(オンラインにて)

講演者 将棋棋士 羽生善治 九段
國學院大學 田村 学 教授 ほか

詳しくは裏表紙をご覧ください

1 特別企画

先生方とともに歩んだ『VIEW21』の「これまで」

6 特集

シリーズ 教育の「これから」を考える ③
真価が問われる特別活動

- 8 **事例** ホームルーム活動
生徒主体のホームルーム活動で、集団への参画意識や協働性を育む
●安心・安全な場づくりと、寄り添う指導で、生徒を自走へと導く
北海道・市立札幌藻岩高校 1学年副主任・担任 石山智也
- クラスへの帰属意識を持たせる生徒主体のHR活動で、自立した「人財」を育む
兵庫県立網干高校 2学年担任 石原 孟
- 12 **事例** 生徒会活動
自主自律の校是を体現しながら、想定外の時代を生きる力を身につける
宮崎県立宮崎大宮高校
- 16 **事例** 学校行事
鑑賞と対話を通して、他者と自己を深く理解し、社会で求められる普遍的な力を身につける
熊本県立第二高校
- 21 **座談会**
より質の高い学びの場となるために、これからの学校に求められていること
國學院大学 人間開発学部初等教育学科 教授 田村 学／長野県蘇南高校 校長 小川幸司
愛知県立豊野高校 進路指導主事 谷口明正／宮崎県立宮崎大宮高校 生徒指導主事・主幹教諭 渡部祐一
- 26 生徒の・教師の・自校の・社会のNEXTを語り合うワークシート

今号の刊行にあたって

『VIEW21』最終号
— 21のnextへ

◎新型コロナウイルスの感染拡大による全国一斉の臨時休業という前例のない状況でスタートした2020年度も、あと1か月余りとなりました。高校教育においては、大学入試センター試験に代わる大学入学共通テストの初実施年度であり、節目の年とされていましたが、大学入試にとどまらない、教育全体に大きな変化がもたらされた1年でした。そうした時代の大きな転換点となった今年度、本誌も新たなステージに進むことを表明しました。前号でお伝えしました通り、2021年4月より、本誌は名称を『VIEW next』に変更いたします。これまで『VIEW21』をお読みいただき、ありがとうございました。引き続き、『VIEW next』を、よろしく願います。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木崇

28 新課程に向けて描く「学校教育デザイン」

群馬県立吉井高校
育成を目指す資質・能力を精選し、学年団の裁量を担保することで、運用されるグランドデザインを実現

32 主体的・対話的で深い学びへ 実践 アクティブ・ラーニング

- 32 **工業** 石川県立工業高校 長田英史
考える手がかりとなる知識を提示した上で生徒に問いかけ、思考の深化を促す
- 36 **現代文** 兵庫県・私立百合学院中学校・高校 内橋朋子
「内化→外化→内化」のプロセスと、他者との協働で理解を深め、主体的に文章に向かう態度を養う

40 指導変革の軌跡

北海道札幌北高校
探究学習
探究学習の手法を採り入れて教育活動を充実させ、自立した学習者を育成

44 改良! 指導ツール ビフォーアフター

2年生 インターンシップ報告書
改良会議実施校 秋田県立能代松陽高校

48 これからの進路指導のための 世の中トレンド解説

グローバル化
解説者 早稲田大学 政治経済学術院 教授
トランスナショナルHRM研究所 所長 白木三秀

52 SDGsの視点で見る大学の学び

- 52 解説 目標 2・8
- 54 大学の学び 目標 2 飢餓をゼロに
東京農業大学 国際食料情報学部
国際農業開発学科 熱帯作物学研究室
実学主義の下、国際農業を学び、飢餓や食料問題の解決を目指す
- 56 大学の学び 目標 8 働きがいも経済成長も
同志社大学 政策学部 政策学科 岡本ゼミ
グローバルな視点でのフィールドワークで、問題発見・解決能力を身につける

58 NEXTリーダーがオンライン&オフラインで集まり、語り合う 若手教師・教育創造 MTG

第5回オンラインミーティング・リポート
「自由に語り合える場」の力を生かし、新しい時代の指導をともに模索する

60 一疑問や課題を解決! 実践につながる! 新課程レポート

テーマ 新教育課程における教科「情報」のポイント

64 Reader's VIEW

巻末 教師を育てた言葉たち

「プアなイノベーションより
優れたイミテーションを」
神奈川県立神奈川総合高校 杉山崇裕

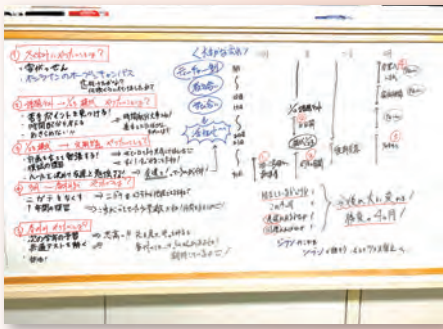
<https://berd.benesse.jp>

本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます。

印刷製本 / (株) 協同プレス 編集協力 / (有) ベンダコ 執筆協力 / 長谷川敦、中丸 満、二宮良太 撮影協力 / 荒川 潤、岸 隆子、谷口 哲、鍋坂樹伸
*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。
*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。
©Benesse Corporation 2021

真価が問われる 特別活動

ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事から成る特別活動は今年度、コロナ禍によって多くの学校で延期や中止となったり、実施形式や内容の変更を余儀なくされたりした。そうした中で、これまであまり意識することがなかった特別活動の意義を考えたり、感じたりした教師、そして生徒は少なくなかったのではないだろうか。新学習指導要領において、ますます重要視されることになる特別活動。各校において、育成を目指す資質・能力に基づき、発揮されるべき特別活動の真価とは何か。実践事例などを通じて、考えていく。



生徒会活動

「異年齢の生徒同士で協力し、学校生活の充実と向上を図るための諸問題の解決に向けて、計画を立て役割を分担し、協力して運営することに自主的、実践的に取り組むことを通して」(*) 特別活動が目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。



*文部科学省「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」より。

事例 **ホームルーム活動** ▶ P.8-11

北海道・市立札幌藻岩高校
1学年副主任・担任

石山智也

兵庫県立網干高校 2学年担任

石原 孟

事例 **生徒会活動** ▶ P.12-15

宮崎県立宮崎大宮高校

事例 **学校行事** ▶ P.16-20

熊本県立第二高校

座談会 ▶ P.21-25

シリーズ特集「教育の『これから』を考える」に
登場した教師、識者が語る

「より質の高い学びの場となるために、
これからの学校に求められていること」



國學院大學
人間開発学部初等教育学科 教授

田村 学



長野県蘇南高校
校長

小川幸司



愛知県立豊野高校
進路指導主事

谷口明正



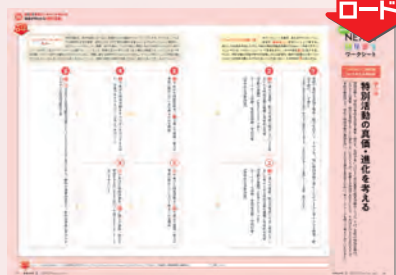
宮崎県立宮崎大宮高校
生徒指導主事・主幹教諭

渡部祐一

生徒の・教師の・自校の・社会の
NEXTを語り合うワークシート

今号の特集のテーマを
自校の教師同士で深める
ツールとして、ご活用ください

▶ P.26-27



ホームルーム活動

「ホームルームや学校での生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成し、役割を分担して協力して実践したり、ホームルームでの話し合いを生かして自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意思決定して実践したりすることに、自主的、実践的に取り組むことを通して」(*) 特別活動が目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。



学校行事

「全校若しくは学年又はそれらに準ずる集団で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養いながら」(*) 特別活動が目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。



このマークのある図版は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。
「HOME → 教育情報 → 高校向け」をご覧ください。

ホームルーム活動

生徒主体のホームルーム活動で、 集団への参画意識や協働性を育む

「生徒の学校における基礎的な生活単位とも言つべきホームルーム集団を基盤として行われる」ホームルーム（以下、HR）活動。学校生活の全般にかかわる事柄を扱う、特別活動の中心となる教育活動であり、それらを通じて築いたHRの文化や生徒間の人間関係は、教育活動全般の土台となる。2020年度、1学年担任、2学年担任をそれぞれ務める教師に、どのようなねらいでHR活動を行い、活動を工夫しているのかを聞いた。

安心・安全な場づくりと、 寄り添う指導で、生徒を自走へと導く

北海道・市立札幌藻岩高校 1学年副主任・担任 石山智也

他者の多様な考えを伝え、 自身の考えを相対化させる

2019年度に、高校教師になって初めて卒業生を送り出した石山智也先生は、20年度、1学年の担任となった。4月の学級開きでは、自身が担当を務める「総合的な探究の時間」で重点を置く、①挑戦の連鎖を生む安心・安全の土壌、②協働を生む多様な土壌、③問う・問われる

の対話の土壌、④地域や社会に開かれた土壌の4点を、HR活動においても大切にしようと生徒に伝えた。好みも価値観も異なる生徒で構成されるHRで、各自が持つ個性を發揮し、学び合ってほしいという思いが石山先生にはある。

「昨年度送り出した卒業生は3年間担任を務めました、その時も学び合ひのできるクラスを目指していました。しかし、私が指導して、生

徒に学び合ひをさせていたというのが実際のところでした。そこで、今年度は、生徒が自ら学び合うような場づくりに徹し、活動自体は生徒に任せるようにしました」（石山先生）

コロナ禍の影響による臨時休業が明けた6月、担任裁量で活動できるLHRで、石山先生は、生徒からクラスの仲が深まる活動を募集。すると、「人狼ゲーム」（*1）が挙がり、初めてやる人も経験者も全員が楽



いしやま・ともや
教職歴5年。同校に赴任して5年目。1学年副主任・担任。「総合的な探究の時間」1学年担当。数学科。

北海道・市立札幌藻岩高校

- ◎卒業までに目指す資質・能力として、「ことばの力、考える力、想い浮かべる力、試そうとする力、やり抜く力」から成る「MOWASBS」を設定。「学び方の徹底指導」を行うことで、適切な学び方の土台の上に、「MOWASBS」を身につけ、社会の多様な場面で活躍できる人材の育成を図っている。
- ◎設立 1973（昭和48）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約320人（*2）
- ◎2020年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、小樽商科大、北海道教育大、北海道大、弘前大、岩手大、山形大などに76人が合格。私立大は、北星学園大、北海学園大、北海道科学大、東京理科大、明治大、同志社大などに延べ417人が合格。
- ◎URL <https://www.moiwa-h.sapporo-ed.jp>

*1 村人チームと人狼チームに分かれて戦うゲーム。発言や態度を手がかりに、村人に紛れた人狼を推理していくため、自然とコミュニケーションが発生する。その特徴から、親睦を深めるツールとしても利用されている。 *2 2021年度新入生から1学年240人となる。



写真1 教室の掲示板上には、生徒が講演会を振り返って、考えを深められるように、石山先生が書いた講演会のメモなどを掲示している。

しめるチーム分けをして、生徒だけで活動を進めた。

「臨時休業を経験した生徒たちは、人と会って話せる大切さを強く感じていたのでしょう。全員が協力してゲームを盛り上げ、『クラスの一人になれた気がした』といった声が多数上がりました」（石山先生）

石山先生は、進路講演会などが行われると、生徒が書いた講演会の振り返りの中から、クラスで共有したい内容や先生自身の気づきをSHRで話している。まずは自分の考えを持ち、その上で他者の多様な考えを知れば、生徒はそれと比較して自身の考えをメタ認知することができ、思考の深まりや視野の広がりにつながる。さらに、それによって、自分

とは違う考えでも受け止められるようになり、安心・安全な場がつけられていくと考えるからだ。

「教室の掲示板（写真1）を利用して、日頃から私の考えを発信し、それを聞いた生徒が自分の考えをアウトプットする場づくりを心がけています。教師側から生徒が発言しやすい雰囲気をつくれれば、生徒も『自分も発言していいんだ』と思え、HR活動において生徒同士の対話が生まれやすくなります」（石山先生）

「分からない」と言い合える 関係が学力向上の土台に

生活習慣の定着では、新たな取り組みを始めた。遅刻の多い生徒と面談をして遅刻の理由を探り、帰宅後から翌朝家を出るまでの行動をリスト化して、できたかどうかを生徒自身がチェック表に記入するというものだ。「何時に起きたの?」「何時です」「何時に寝たの?」「何時です」といった対話を通じて行動を自覚させ、遅刻しないためにはどうすればよいかを考えさせている。

「反省文を書かせても、生徒の心が

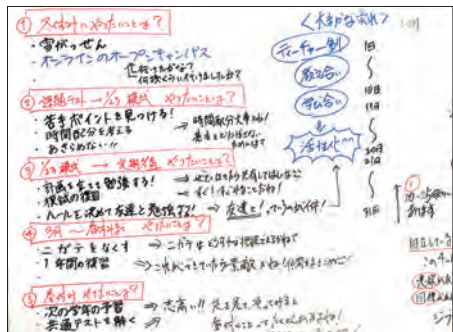


写真2 教室のホワイトボードには、今後の定期考査などの日程が書かれてあり、それに向けた生徒の意気込みや取り組みの内容が書き込まれている。

動いた気がしませんでした。そこで、生徒が行動を可視化する支援に徹したところ、生徒は起床時刻や家を出る時刻の遅さに気づき、遅刻しないための行動を自ら決めて実行し、遅刻をしなくなりました」（石山先生）

朝のチェック表の記入は、周りの生徒も見ている。すると、自分も生活習慣を正したいという生徒が出てきて、取り組みが広がっている。そうしたHR活動での安心・安全な場づくりは、教科学習の土台となると、石山先生は言う。

「学び合いを通じて『分からない』『教えてほしい』と言合える関係が築かれると、分からないことは恥ずかしいことではないといったマイルドセットができます。それは、授

業で理解できない点を放っておかずに質問する姿勢にもつながります」

そうした生徒の意識が顕著に表れたのが、冬季休業明けの課題テストを返却した日のSHRだった。テストの平均点が他クラスに比べて下がっていたため、石山先生は「どうして、こういう結果になったのだろう」と問いかけた。すると生徒から「学級閉鎖で学校に来られなかったからだ」といった意見が挙がった。

「実は12月に、2週間の学級閉鎖がありました。『各教科のプリントや解説動画があったよね?』と聞くと、『疑問点があっても、教室での授業とは違って、すぐには周りに質問できないので、勉強がしにくかった』といった回答が生徒から返ってきました。学び合いや疑問点を放っておかないことの大切さを、改めて実感したのでしよう。SHRの後、教室のホワイトボードに『ルールを決めて友達と勉強する』と書き込まれていました（写真2）」（石山先生）

2年生進級時には、クラス替えがある。石山先生は、「このクラスでの体験を基に、自らが次のクラスの核になり、新しい仲間と学び合うクラスを築こう」と生徒に呼びかけている。

クラスへの帰属意識を持たせる 生徒主体のHR活動で、自立した「人財」を育む

兵庫県立網干高校 2学年担任 石原 孟

学級開きから始まる生徒の 集団の一員としての自覚

HR活動の方針に「自他共に最幸にできる自立型人間の育成」を掲げる兵庫県立網干高校の石原孟先生は、生徒たちに、自分1人の幸せではなく、周りの幸せも願い、実現しようとする志を抱いてほしいと語る。

「学校教育の目的は、一人ひとりが替えの利かない『人財』の育成です。生きる力を高め、自ら人生を切り拓いていける勇気と実行力を生徒に育むことを目指しています」

同校の生徒は、穏やかで素直であり、人の話をよく聞く半面、受け身でおとなしい傾向がある。そうした生徒を自立型人間に導くようなHR活動を、石原先生は意識している。

「HR活動の年間35時間の授業時間として割りあてられているうち、担任裁量で活用できる6〜7時間で、協働する集団づくりを行う」と

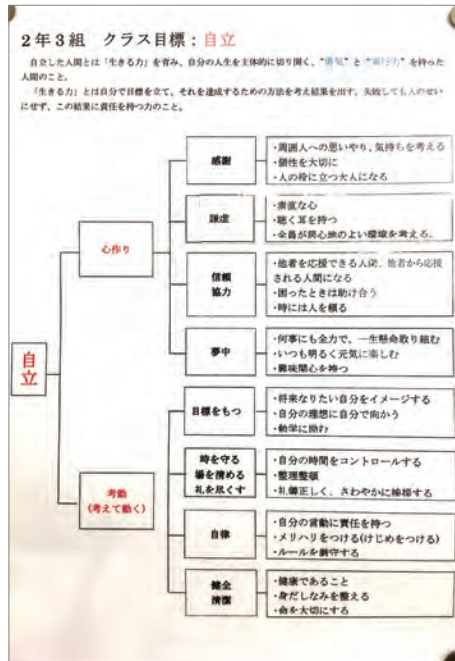


写真1 今年度受け持っている2学年のクラスでは、生徒たちが話し合い、「感謝」「謙虚」「信頼・協力」「夢中」「目標をもつ」「時を守る・場を清める・礼を尽くす」「自律」「健全・清潔」の8つをキーワードとしたクラス目標を設定した。目標が書かれたシートは教室に掲示し、さらにラミネート加工したシートを、生徒は各自の机の上に貼っている。

もに、普段から生徒主導によるクラス運営を進めています」

例えば、毎日のSHRでは、クラス委員長が進行役となり、副委員長や日直の生徒とともに連絡事項の伝達やプリントの配布などを行う。週1回のLHRも、クラス委員長が司会を務めて生徒のみで話し合う。

そのように、生徒が主体的に動くよう、学級開きでは、石原先生が冒頭紹介したHR活動の方針を伝え、毎週発行する学級通信において

も石原先生がクラスにかける期待を表明し、「自分たちがクラスをつくる」といった意識を生徒に浸透させている。また、クラスを主導できそうな生徒に、「クラス委員にならなにか」と個別に声をかけている。

「クラス委員が頑張る姿を見て、周りの生徒は自然と協力するようになります。学級開きから1か月も経てば、生徒だけでHR活動を行えるようになります」(石原先生)

クラス委員が決まると、クラス目



いしはら・たけし
教職歴10年。同校に赴任して2年目。2学年担任。理科(生物)。

兵庫県立網干高校

- ◎ 姉妹校との交流を軸としたオーストラリア研修、看護・保育の就業体験、地域行事への参加など、国際理解教育やキャリア教育などを活発に展開。2020年度の探究学習では、1・2年生が味噌の製造から販売までを体験し、働くことの意義を考えた。
- ◎ 設立 1979(昭和54)年
- ◎ 形態 全日制/普通科/共学
- ◎ 生徒数 1学年約160人
- ◎ 2020年度入試合格実績(現浪計) 国立立大は、秋田大、山口大、徳島大、愛媛大、神戸市外国語大、兵庫県立大、下関市立大に7人が合格。私立大は、京都産業大、近畿大、関西学院大、神戸学院大などに延べ2328人が合格。
- ◎ URL <https://dmzcms.hyogo-c.ed.jp/abo-sh-hs/>

標をクラス全員で話し合っ立てる。今年度担任を務めている2学年のクラスでは、コロナ禍による臨時休業が明けた6月のHR活動で、目指すクラス像などを話し合うグループワークを行い、「感謝」「謙虚」など、8つの目標を掲げた(写真1)。そして、学期末や学校行事後には、8つの目標の到達度を10点満点で生徒各自が自己評価し、クラス全体の平均をリーダーチャートで示した。

「自己評価は、クラスを俯瞰して



写真2 週3回朝行われる国語・数学・英語の小テストで合格すると、それぞれ赤・青・黄のシールを、3教科すべてに合格すると、金色のシールを貼ることができる。自分たちの努力の軌跡をキラキラしたシールで表すことで、生徒の学習姿勢が前向きになる。

1つ上の役職の仕事を意識させ、先を見通す姿勢を育む

生徒が3年生になった時、希望進

クラスの問題を見だし、その解決に向けて自分のできることを考えさせるために行っています。視野を広く持ち、集団の一員としての自覚を促すねらいがあります」（石原先生）
ほかに、朝の小テストで合格点を獲得すると金色のシール（「黄金のシール」）を貼る活動（写真2）を行ったり、分散登校中はクラスメートに励ましのメッセージを贈り合う活動を行ったりと、工夫を凝らした活動を通じて、クラスの団結力や帰属意識の向上を図っている。

路の実現に向けて自走できるための力の育成にも力を入れる。生徒は各自手帳を持ち、それに目標や予定を書き、いつまでに何をすべきかを考え、目標を達成したかどうかを振り返る。また、模擬試験の振り返りを行うHR活動では、志望校の入試から逆算して、時期ごとに自分がすべき学習を考えるよう促している。「志望校合格に向けて頑張るのは、生徒自身です。3年生になるまでに自律的・計画的に学ぶ姿勢が身につくよう、低学年次から先を見据えた活動を行っています」（石原先生）
先を見通す姿勢は、普段のクラス運営でも生徒に意識させている。例えば、クラス委員長は担任に代わってHR活動の運営を、副委員長や各委員は委員長の仕事を、その他の生徒は各委員の仕事を率先して行うといった具合に、自分の役職や立場よりも1つ上の仕事をしよう、生徒に伝えている。
そうした活動を地道に積み上げていくと、次第に生徒は集団の中で自分に何ができるのかを考え、行動する習慣を身につけていく。今年度のクラスの生徒は、担当を決めなくても、率先して黒板を消したり、プ

『ホームルーム通信』では、先生方の実践を基に、HR活動や生徒への接し方のポイントを紹介しています



ベネッセコーポレーション
『ホームルーム通信』
編集長
藤川 恵史

多くの先生がクラス担任を経験されますが、HR活動などの進め方は先生個々に任されている学校が大半のようです。教育委員会が行う初任者研修などは教科指導が中心であるため、特に若手の先生方からクラス

運営に対する悩みをよく伺います。先輩のクラス運営を見て学ぶといった暗黙知の継承も、中堅の先生が少ない学校では難しい状況にあり、よい指導を言語化して引き継ぐことが課題であると捉えています。

そうした課題のお役に立てていただきたいと考え、『ホームルーム通信』を年5回発行しています。元気なクラスづくりのためのヒントとなるよう、担任を受け持つ先生のクラス運営の実践、面談などでの生徒への接し方のポイント、生徒の声かけに役立つデータの活用方法の3本立てでお届けしています。

全国の先生方を取材する中で、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、生徒主体のHR活動を試行錯誤されている状況が分かってきました。生徒一人ひとりが当事者意識を高めて、クラス全体や仲間自分がどのように貢献できるのかを考え、行動を起こす経験は、社会で生きる力につながると考えています。生徒主体のHR活動の実現に向けて日々奮闘する先生方をつなげるコミュニティづくりも、今後、『ホームルーム通信』で支援したいと考えています。

Benesse High School Onlineでは、過去3年間の『ホームルーム通信』をご覧ください。
<http://www.bhso.ne.jp> トップページ>指導>担任>クラス担任先生の教室「ホームルーム通信」

ントを配つたりするようになった。「自律的な集団をつくるには、教師がルールを守らせるよりも、集団への帰属意識が高まるような雰囲気や文化をつくり上げるのが効果的だと考えています」（石原先生）
クラスがまとまるに連れて、相手の目を見て挨拶する、授業に集中できていないクラスメートを注意する

など、生活態度も変わっていくと言。クラスの居心地がよく、自分を出すことや周囲とかかわることをためらわない生徒が増えるのだ。
「生徒が大人になった時、自分がしたよい経験を次の世代にも伝えたいと思うような、30年後の生徒にも響く教育をしていくことが、私の目標です」（石原先生）

生徒会活動

自主自律の校是を體現しながら、 想定外の時代を生きる力を身につける

宮崎県立宮崎大宮高校

「異年齢の生徒同士で協力し、学校生活の充実と向上を図るための諸問題の解決に向けて、計画を立て役割を分担し、協力して運営することに自主的、実践的に取り組む」教育活動である生徒会活動。宮崎県立宮崎大宮高校では、生徒会が主体となり、校是に掲げられる「自主自律」の精神を継承している。教師や保護者と協働しながら行われる生徒会活動の実践と、そこで育まれる資質・能力について、同校の生徒と教師に話を聞いた。

教師、保護者とともに 学校のあり方を考える

旧制中学校を前身とし、創立132年を迎えた宮崎県立宮崎大宮高校。脈々と受け継がれている伝統の中で、宮崎大宮高校としてのあり方を体現する大きな役割を果たしているのが生徒会活動だ。

同校にとって生徒会活動は、役員となった一部の生徒に偏った活動ではなく、役員などではない生徒も生徒会の一員としての自覚を持ち、学校生活の充実と向上を図るために、主体的、自治的に行われる活動である。新入生オリエンテーションや歓迎遠足、文化祭や体育大会など、ほ

とんどの学校行事において、生徒から実行委員を募り、企画・運営を生徒が主体となって行う。さらに、準備、渉外、広報、当日の進行など、スタッフとしてかわる生徒も募集する。スタッフを希望する生徒は非常に多く、学校行事によっては、抽選や志望理由を基にした選考が行われるほどだ。

生徒会をまとめ、生徒全体としての意思決定へと導くのが、総務委員会と呼ばれる組織で、生徒会長にあたる総務委員長を筆頭に、書記、会計、幹事など、8人の生徒で構成される。総務委員会は各行事の実行委員会と連携して、その企画・運営にあたるが、これからの高校生活のあ

り方を教師や保護者と話し合うのも、同校の総務委員会の特徴だ。例えば近年は、スマートフォンなどの携帯電話の校内持ち込みや朝の課外学習などについて、総務委員会が保護者や教師と話し合い、その内容を生徒総会でさらに議論し、再度、保護者や教師との合意形成を図った。スマートフォンなどの携帯電話の校内持ち込みについては、2020年度途中から認められるようになったが、そのルールは全生徒対象のアンケート結果を踏まえて、総務委員会で作成し、PTAに諮って採用されたものだ。時には、同校の生徒会活動をよりよくするために、総務委員会の生徒は先進校を視察する。

宮崎県立宮崎大宮高校

- ◎「自主自律」「稚心を去れ」「質実剛健」を校是に掲げ、知・徳・体の調和のとれたたくましい人材の育成を目指す。2020年に文部科学省「WLL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業における『カリキュラム開発拠点校』に指定。
- ◎設立 1889（明治22）年
- ◎形態 全日制／普通科・文科情報科／共学
- ◎生徒数 1学年約360人
- ◎2020年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、東京大、京都大、大阪大、九州大、宮崎大などに213人が合格。私立大は、慶應義塾大、法政大、明治大、同志社大などに延べ190人が合格。
- ◎URL <http://www.miyazaki-ced.jp/miyazakiomha-h/index.html>

生徒会活動への憧れが 同校を志望する動機に

「生徒会は大宮の宝」。それは、同



1年生
迫井颯汰
 さこい、そうた
 総務委員会幹事



2年生
岩井亜由美
 いわい、あゆみ
 総務委員会総務委員長

生徒



生徒会担当・生徒指導部
川崎真琴
 かわさき、まこと
 教職歴25年。同校に赴任して4年目。保健体育科。



生徒指導主事・主幹教諭
渡部祐一
 わたなべ、ゆういち
 教職歴37年。同校に赴任して4年目。英語科。

教師

校が中学生向けに発信する学校紹介媒体などで、度々登場する言葉だ。生徒の主体的、自治的な行動を尊重する同校の姿勢は、21年度の学校案内の巻頭言で、中学生にメッセージを贈っているのが総務委員長であることから分かる。そうした「生徒会は大宮の宝」という学校風土は、同校を志望する中学生にも、学校の魅力として確実に伝わっていると、20年6月から第131期総務委員会

の委員長を務めている2年生の岩井亜由美さんは言う。

「中学3年生の時に参加した宮崎大宮高校のオープンスクールで、生徒会や実行委員会の先輩たちが自分たちでプログラムを進行する立派な姿を見て驚きました。私は、生徒一人ひとりがよい集団をつくろうとする意識を持つ宮崎大宮高校の総務委員会に入りたくて、この学校を第一志望にしました」

第131期総務委員会の幹事として、岩井さんとともに活動した1年生の迫井颯汰さんも、「中学校の生徒会では、生徒がすることは先生が決めていました。でも、宮崎大宮高校では、自主自律の校是の下、何をするかを生徒同士で話し合っ、自由に決められます」と、同校の生徒会でのやりがいと責任を語る。

「新入生オリエンテーションなどで新入生に話す内容も、生徒だけで考えています。先生から任せられているから、みんなのためになる活動しようという意識になります。生徒がこれほど自由に活動できるのは、生徒がしたいことと先生たちが生徒にしてもらいたいことが一致しているからだと思います」（迫井さん）

生徒主体で進める学校行事における生徒会の役割

1 新入生オリエンテーション

20年度は実施がかなわなかったが、例年、入学式実施前の新1年生を対象に、校歌・応援歌の練習、クイズ形式で進行する校内オリエンテーション、部活動紹介などを行う。新入生への歌唱指導や校内案内

2 4校定期戦

宮崎北高校、宮崎西高校、宮崎南高校、そして宮崎大宮高校の県立4校による野球の交流戦。20年度はコロナ禍によって中止となった。例年、全校生徒が吹奏楽部の演奏に乗せて応援合戦を繰り広げ

3 オープンスクール

中学3年生とその保護者を対象とした学校説明会。学校説明や部活動紹介のほか、校内の案内や中学生への学習指導も行うスタッフであるチューターを約100人、1、2年生の各クラスから募集する。チューターの指導は総務委員会が担当。20年度は7月下旬に予定していたオープンスクールを、9月と10月に生徒のみの

4 弦月祭（文化祭）

同校最大の行事。実行委員を募集・選考し、7月から本格的な準備に入り、9月に開催。内容は、クラス対抗の合唱コンクール、各文化部の公演や展示・発表、全校生徒でのシンポジウムなど。例年、多くの地域住民が来校するが、20年度は無観客。短縮プログラムで実施した。

などを担当するチューターは、新2、3年生から募集。意気込みなどを書いたエントリーシートを基に、総務委員会がチューターを選考する。チューター指導や当日の運営も総務委員会が行う。

る。応援指導は総務委員会と応援団が担当する。4校では、生徒会活動に関する交流も行い、行事ごとの生徒会の動きや役員の公約などについても共有している。

参加で実施。県内外から600人以上の中学生が参加した。

総務委員会作成のパンフレット



前例のない状況の中で 他者との協働を経験した

20年3月の臨時休業が始まるコロナ禍でも、総務委員会を始めとする生徒会活動において、同校の校是「自主自律」の精神は十分に発揮された。「私たち第131期総務委員会は、『変幻自在』を活動のスローガンとして掲げました。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、学校行事を例年通りに行うことが難しい状況でしたが、宮崎大宮高校の新しい伝統をつくる機会だと考えました。積み上げたことが一瞬で白紙に戻るともたたくさんありましたが、どうすれば去年に近づけるか、去年を超えられるかを追求し続けました。想定外のことが起きるからこそ、例年以上に様々なケースを想定し、行事の進行も細かく決めて生徒会で共有したところ、合唱コンクールなどでも、全生徒がその企画の流れを理解し、それぞれの役割を全うしてくれたので、スムーズに進行することができました」(岩井さん)

長い歴史を持つ同校の総務委員会の活動の中でも、20年度ほど臨機応変な動きが求められたことはなかった。だからこそ、生徒会活動の成果や失敗を今年度は特に丁寧に検証し、後輩に伝えようとした(写真)。「学校をよりよくするために今すぐにもできることはないか、コロナ禍での生徒会運営における気づきを後輩たちにどう伝えるか、そういったことを考えながら、振り返りに臨んでいました」(岩井さん) 生徒会活動を通じて成長を、幹事の迫井さんは次のように語る。「総務委員会の活動を広く知ってもらうために、会報を発刊しました。製作を続ける中で、独善的にならないように、視野を広く持ち、伝え方に気を配ることを意識するようになりました。また、生徒会活動での、学年やクラスを超えて協働する過程で、生徒会活動や課外活動と勉強を両立する人など、尊敬できる仲間と出会いました。自分も忙しさを言い訳にせず、目の前のことに全力を尽くそうと思うようになりました」 岩井さんも、同校には生徒同士で協働する中で向上心が育まれていく風土があることを実感している。「みんなが頑張っている様子を見て、私も『もっと自分にできることはないだろうか』と考えたくなりま



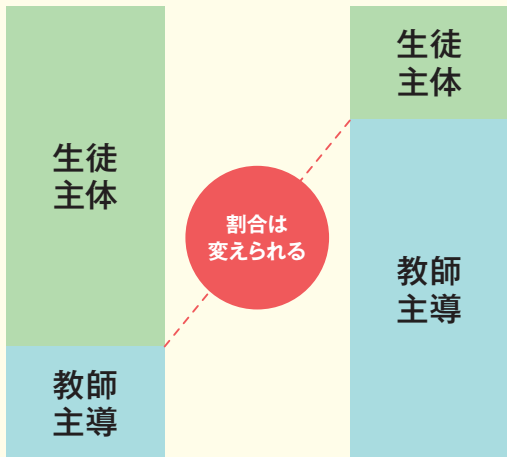
写真 3時間以上、議論を交わし、多様な意見が出された文化祭の反省会の議事録。「引き継ぎが円滑な分、生徒の動きは早く、4月に『文化祭の企画です』と、生徒から提案があるほどです。本校では、行事のことは教師よりも生徒の方が詳しいのです」(川崎先生)

自主自律を理解するための 声かけが必要

お互いに高め合いながら、学校生活をよりよいものにするのが、宮崎大宮高校の生徒会活動における自主自律だと思います」 生徒会活動における自主自律を実現するために、同校の教師たちはどのように生徒にかかわっているのだろうか。生徒指導主事の渡部祐一先

生は、「自主自律を理解するために必要な生徒への声かけを工夫している」と説明する。「生徒に『個性と我の違いは何だと思う?』と尋ねることがあります。『これがダメ』『こうしなさい』と、生徒の言動一つひとつを指導するのではなく、自主自律とはどのような状態なのか、その答えに自分の力でたどり着けるように、もっと高い視座を育むような問いかけを生徒にすることが教師の役割です」

図 生徒会活動における生徒と教師の関係



生徒主体の割合が大きい学校

教師主導の割合が大きい学校

「生徒に任せただけでは、質のよい自律は実現しません」と、渡部先生は語る。生徒に任せながらも、よい集団をつくるための声かけを教師が続け、気づきを促す。「生徒主体だから迷走することもあります。本校でも、自律を取り違え、服装などの生活規範が乱れた時期がありました。ただ、その時も教師が管理を強めるのではなく、生活委員会の生徒に声をかけ、生徒からの変化を求めました。主体性が尊重される中で自分を律する経験が重要なのです」

*取材内容を基に編集部で作成。

渡部先生のそうした考えは、生徒にも理解されている。

「生徒総会の進め方などを相談した時も、私の質問に答えてくださった後、先生は、『そもそも岩井さんはどんな気持ちになるの？』『どうすればみんなのためになると思う？』などと問いかけ、私がより高い視座で考えられるよう、助言してくださいました。先生たちは私たちを野放しにしているようで、実はよく見てくださっていると思います」(岩井さん)

コロナ禍で様々な活動が制限された中でも、生徒は「自主自律」の精

神を体現し、伝統を引き継いでいったと、生徒会担当の川崎真琴先生は振り返る。

「携帯電話の校内持ち込みについて生徒総会で話し合った時も、自分の希望ばかりを主張しがちな下級生に、『ほかの人の思いを想像しないで持論を押し通そうとするなんて、大宮生とは言えないのではないかと上級生が一喝するなど、学校という社会の中での物事の考え方を生徒同士で示し合っていました。わがままな気持ちで突っ走りそうになった時も、先輩や同級生から気づきを

得て、周りの意見を聞き、他者の気持ちを感じ取れるようになっていくのです。例年よりも少ない準備時間で、携帯電話の校内持ち込みという大きなテーマを議論する生徒総会を円滑に進められるのか心配でしたが、杞憂でした。総務委員会の生徒たちは、きちんと計画を立てて総会を迎え、閉会後には、次の生徒総会への引き継ぎを念頭に、いつものように丁寧な振り返りを行いました」

主体的な生徒会活動を実現するために必要なもの

生徒会活動を通じた生徒の変化を間近に見てきた川崎先生は、「対話を通して自分の思考を深める力など、授業につながる資質・能力を、生徒は生徒会活動を通して身につけている」と語り、生徒会活動がほかの教育活動により影響を与えていることを実感している。自律の実現と資質・能力の向上が有機的に結びついているからこそ、宮崎大宮高校は県内有数の進学校としての歴史を積み重ねてきたのだろう。

「丁寧な声かけを繰り返し、自分のあり方を考えさせることで、どの

学校の生徒も必ず主体的になっていく」と確信する渡部先生は、その基本スタンスは他校に赴任しても変わるものではないと語る。

「どの学校の生徒会活動にも、生徒主体の活動と、教師主導の活動があり、その2つの比率が違うだけです。重要なのは、その比率は教師の生徒への接し方で変えることができるということです。教師主導の活動が多い学校でも、『君たちは絶対にできる、伸びる』と声をかけて、教師が指導のバランスを変えていけば、生徒は変わります。『うちの生徒は変わらない』のではなく、教師が今までのやり方を変えられないだけだと、私は思っています」(図)

宮崎大宮高校の生徒手帳には、生徒会活動の意義は「爽やかな学校生活を実現するため」と記されていると、迫井さんは教えてくれた。

「爽やかな学校生活を目指して他者のために活動すると、周囲から自分にもよい影響を与えてもらえることが分かりました。私は、自分のためではなく、社会のために何かを残そうとするのが人生なのではないかと、生徒会活動を通して学びました」(迫井さん)

学校行事

鑑賞と対話を通して、他者と自己を深く理解し、 社会で求められる普遍的な力を身につける

熊本県立第二高校

「全校若しくは学年又はそれらに準ずる集団で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養いながら」特別活動が目標に掲げる資質・能力を育成する教育活動である学校行事。熊本県立第二高校では、コロナ禍においても生徒に良質で体験的な活動を提供するため、「ベネッセアートサイト直島」の教育プログラムを実施。平素と異なる環境での生徒の学びと成長を紹介する。

ピンチをチャンスに！ 体験的な教育活動に挑戦

熊本県立第二高校美術科は、1年次に海外研修旅行を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、「ベネッセアートサイト直島」(以下、「BASN」)での教育プログラムの実施に変更した。「BASN」は、瀬戸内海の直島、豊島、犬島を舞台に株式会社ベネッセホールディングスと公益財団法人福武財団が展開するアート活動の総称で、世界的な建築家である安藤忠雄氏の設計による、ホテルと美術館が一体となったベネッセハウスや、地域固有の自然や文化の中に配置された現

代アートは、他に類を見ない作品として高く評価され、国内外から多くの訪問客を集めている。山本朝昭校長は、「困難な状況下で、チャンスを創り出す経験をしてもらいたかった」と、「BASN」の教育プログラムの企画に至った思いを語る。

「コロナ禍によって、学校行事を始めとする、これまであたり前だった教育活動ができなくなりました。しかし、様々な制限の中でも、発想と工夫次第で、今まで以上に質の高い活動ができることを生徒に実感してもらいたいと考えました。海外でなくても、美術科の1年生に必要な経験ができる場所、さらに、その経験を普通科や理数科にも還元できる

図1 研修旅行日程

- 1日目 (直島)**
 - ・安藤忠雄氏講演
 - ・ベネッセハウス ミュージアム鑑賞
 - ・グループで1日の気づきを共有
- 2日目 (直島)**
 - ・「家プロジェクト」フィールドワーク
 - ・グループワーク「新しい作品、若しくは社会システムの提案」
 - ・地中美術館鑑賞
 - ・グループワーク・発表
- 3日目 (犬島)**
 - ・犬島のアートプロジェクト鑑賞

*学校資料を基に編集部で作成。

熊本県立第二高校

- ◎創立の精神は「自主積極・謙恥自尊・礼節協調」。県下唯一の美術科を有する。熊本地震の被災後は、全学科で「くまもと地域復興論」を設置するなど、「創造的復興」に向けた教育にも力を注ぐ。
- ◎設立 1962 (昭和37)年
- ◎形態 全日制/普通科・理数科・美術科/共学
- ◎生徒数 1学年約400人
- ◎2020年度入試合格実績(現浪計)
国公立大は、筑波大、東京藝術大、東京大、広島大、九州大、熊本大などに236人が合格。私立大は、多摩美術大、中央大、武蔵野美術大、早稲田大、立命館大、関西学院大などに延べ441人が合格。
- ◎URL <http://kumamoto-2hs.ed.jp/>

プログラムを考えた時に、「BASN」という選択肢が浮かんだのです」同校の教師は、「BASN」のエデュケーション担当とオンライン

ミーティングを重ね、地域とかかわり合うアートを体験しながら、「自分たちが学ぶ美術を通じて、どのような社会貢献ができるのか」を考え



美術科・1年生
張佳明
 ちやう・よしあき



美術科・1年生
大城ひかる
 おおしろ・ひかる

生徒



美術教諭
牛島佳子
 うしじま・よしこ
 教職歴14年。同校に赴任して11年目。



美術科主任
弘孝昌
 ひろ・たかまさ
 教職歴29年。同校に赴任して1年目。



校長
山本朝昭
 やまもと・のりあき
 教職歴38年。同校に赴任して3年目。

教師

るプログラムを立案。「本物のアートに触れる中で好奇心を喚起する」「入力と出力をループさせる」「互いの気づきを交換する」を柱に、活動内容を決めた。そして、事前学習を経て、12月、美術科全41人の生徒が直島を訪問した。



写真1 直島の歴史、そして現代アートの価値を語る安藤忠雄氏の言葉は、これから始まる研修旅行に対する生徒の期待をさらに高めた。

岡山県の宇野港から直島までは船で20分。生徒たちが臨んだ研修旅行の最初のプログラムが、ベネッセハウスの地中美術館など、「BASIN」の代表的な美術施設の設計を多く手がけた建築家の安藤忠雄氏の講演だ(写真1)。安藤氏は、「BASIN」の活動の始まりや、アートと建築が

普遍的な学びを
 生徒に与えた安藤氏講演

1日目
 ● 安藤忠雄氏講演
 ● ミュージアム鑑賞

安藤忠雄氏講演(要旨)

兵庫県立美術館には、サミュエル・ウルマンの詩「青春」をモチーフに私がデザインしたオブジェ「青いりんご」があります。日頃から、甘く実った赤りんごではなく、未熟で酸っぱくとも、明日への希望に満ちあふれた青りんごの精神を持ち続けたいと思っています。皆さんにも青い気持ちを大切にしたいと思っています。今は100歳まで生きる時代です。長生きをするのだから、好奇心を持って、楽しいものをゲットしないともつたない。せっかく直島に来たのだから、皆さん、ここでも何かを吸収してほしい。そして、直島の海でも、アートでも、自分の顔でも、何でも構わないから、今日一枚、絵を描いてみてください。直島に来た思い出が心に深く残ります。

ベネッセアートサイト直島は、ベネッセの社長だった福武總一郎さんが、「直島を世界一の現代美術の島にしたい」と、1987年に私に相談に来たのが始まりです。ただ、福武さんに連れられて直島を訪れた私は、「ここはアカン」と反対しました。土砂や石材の採掘、工場の煙害などで、緑が失われた島に人が来るわけがありません。しかし福武さんは、「よいものがあれば必ず人は来ます」と譲りませんでした。そして今、美術を愛する人たちが世界中からこの島を訪れています。福武さんの言った通りになりました。彼は自分の信じる道を自由に生きようという気持ちと、それを貫く勇氣を持ってきているのだと思います。

えない向こうに何かがあるかもと好奇心を持った人にだけ見ることができのです。それは皆さんの人生と同じです。壁にぶつかっても、向こうに何かあると思える人、自分が信じる道を生きようと思いを貫ける人になってください。コロナ禍は確かに私たちにとって難しい問題だけれども、この困難の向こうに何かあるのかを考えることが大切です。直島のアートに対しても、「分からない」と諦めず、何が面白いのかを考えてみてください。

これからの時代は、芸術、科学、技術の力を磨くことで、世界の人々から信用を得られます。皆さんは、同じ地球の上で世界の人たちと生きるのですから、自分の身の回りを、そして日本を、世界をよりよくしていかなければなりません。小さなことでも、世界のためにできることはたくさんあります。この直島も、こんなに緑豊かな島ではありませんでした。しかし、ここまで魅力的な島に変わったのです。

人と人のつながりを大切に、世界を変えていくのは、皆さん一人ひとりの心です。AIではありません。直島のアートに触れて心を豊かにしてください。海を眺める時も、「この海は俺の海だ」と思って眺めてみてください。見えなかつたものが見えてくるはずですよ。





写真2 アーティストが直島を訪れ、この場所のために制作した作品を鑑賞する。場や空間と一体となった、ここにしかない本物に出合えるのが研修旅行の醍醐味だ。



写真3・4 スタッフの問いかけをきっかけに、自分の考えを交換する生徒の姿は、「主体的・対話的で深い学び」を体現したものだ。



写真5 町を散策するようにアートを鑑賞する生徒たち。アートが人にもたらす影響、社会におけるアートの可能性を、生徒たちはその場に身を置いて考えた。

融合する魅力などを、芸術家や文芸家との交流のエピソードを交えて語りながら、世界の人々とつながるために豊かな心で深く学ぶこと、よく学び、よく遊ぶことが大切だと訴えた（P.17要旨）。

安藤氏の講演を聞いた大城ひかるさんは、「建築の領域にとどまらず、人生そのものに通じる学びをいただいた」と感想を語る。

「『暗闇の向こうに何かがあると信じなさい』という安藤先生の言葉が心に残りました。私も今後の人生で、壁にぶつかっても諦めず、壁の向こう側に希望を見いだすようにしようと思いました。また、原点から考えることの大切さについてのお話も印象的でした。明日、私たちが訪問する、安藤先生が設計された地中美術館には、クロード・モネの『睡蓮』が、自然光だけで鑑賞できるように展示されていますが、モネが見ていた睡蓮がどんなものだったのかを想像し、原点に立ち返ってみることは、作品を鑑賞する上でも、また、自分が今後作品を作っていく上でも大切なことだと思いました」

主体的に学び合う力を 発揮し始めた生徒たち

ベネッセハウスミュージアムでは、スタッフと一緒に、作品を鑑賞した（写真2）。現代アートは観る

人によって様々な解釈ができる。美術教諭の牛島佳子先生は、生徒たちが好奇心を持って作品に向き合い、それぞれの気づきを交換することを期待していたが、生徒たちが自ら対話を始め、思考を深めていたことに感動したという（写真3・4）。

「生徒たちがある作品の前で、その作品から想像したことを活発に話し合う様子を目にしました。生徒から言葉を引き出したのは、アートが持っている力だと思えます。生徒が仲間の力を借りながら主体的な学びができるようになった時、教師の役割はこれまでもとは違ったものになるのだろうと、対話を通して学び合う生徒の様子を見て思いました」

2・3 目

- フィールドワーク
- グループワーク

意見を伝える勇気の必要性に 他者との対話を通じて気づく

島内に点在する空き家などを改修し、人が住んでいた頃の時間と記憶を織り込みながら、暮らしの空間を作品化する「家プロジェクト」。生徒たちは地図を手に町を歩き、7軒の作品を見て回ったが（写真5）、鑑賞中も生徒たちは、「アートが担う役割」などについて語り合っていた。

張佳明さんは、「友人と感じたことを語り合う中で、他者の視点を取り入れながら自分の考えが深まっていった」と振り返る。

「お互いの考えが深まるような対話をするためには、自分の意見をきちんと相手に伝える勇気が必要だと気がつきました。僕は周りの空気に流されがちなので、すぐには変わらないかもしれないけれど、安藤先



写真6 理想の社会を実現するために、アートで何ができるのかを考える。環境問題や防災など、直島の自然や作品鑑賞を通して考えたことを基にした提案が行われた。



写真7 生徒たちは、その場、その時の気づきを言葉にして、Classiに蓄積していった。



写真8 研修旅行中の学びや気づきが並ぶClassiの画面。生徒の書き込みに「まとまらない」という課題があるように、生徒のつぎやきをすくい上げる場としても機能した。



写真9 研修旅行の思い出を、生徒はそれぞれの形式でポートフォリオにまとめた。同じ場・時間で異なる学びを得たことを確認し、それぞれの学びをさらに深めた。

ICTを活用して 学びを即座に共有する

生徒たちは、取り組むべき社会課題を設定し、実現したい未来の社会を描いた上で、それを表現した作品や実現に必要な社会システムを考えるグループワークにも取り組んだ(写真6)。安藤氏の講演、ベネッセハウスミュージアムや地中美術館「家プロジェクト」での現代アート鑑賞と仲間との対話、そして瀬戸内

海の直島の自然などから、イメージやヒントを得ながら、グループでアイデアを膨らませていった。アート鑑賞を通じたインプットを良質なアウトプットにつなげていく際に役立ったのがICTだ。Classi(注*)を導入している同校は、生徒が研修旅行中の学びや気づきを即座に言語化できるように、Classi上で教師から問いを投げかけたり、感想を自由に書き込ませたりした(写真7・8)。生徒は、互いの書き込みに対して感想などを書き込み合うなど、オンライン上でも活発に意見交換する様子が見られた。美術科主任の弘孝昌先生は、「ちよつとした感想や疑問を大切にすることで学びが

広がる可能性があることを、事前学習で繰り返し伝えていた」と語る。「事前学習でも、現代アートや直島に対していろいろな疑問が生徒の中に生まれていたもので、私たちは生徒に、それらを書き留めたり、言葉にしたりすることを促しました。そうすると生徒たちは、『こんなささいな疑問でも口にいいたいんだ』『自分の何気ない言葉が、ほかの人の学びにつながるんだ』と分かり、質問をどんどんするようになりました。そのため、生徒たちは、直島でも積極的に話し合い、考えを深められたのだと思います」

他者を通じた学びの 価値を身をもって知る

学校に戻った生徒は、研修旅行のまとめとして、旅行中の写真、風景などを盛り込んだポートフォリオを作成(写真9・P.20写真10)。さらに、直島で見た作品の感想やアートと地域の関係についての考察、あるいは研修旅行がその後の自分に与えた影

1か月後

● アルバム、
アートエッセー
作成

* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

響など、各自が自由にテーマを設定して2000字以内のエッセーを書いた。それらは、今後の高校生活で取り組む探究活動や、大学入試での志望理由書などにもつながっていくことを期待したものだ。

「何人かの生徒が、『ほかの人が物事を見て何を考えているのか、なぜ、そう考えているのかを知りたい気持ちが強くなった』と私に話してくれました。多くの視点を通して本質に迫ろうとする感性が確実に磨かれていると感じました」(牛島先生)

「同じ経験をして、人によって気づきや学びが異なることで、お互



写真10 大城さんのポートフォリオの一部。安藤氏の講演から得た気づき、憧れのアーティストの作品に接した感動がつけられている。

いの理解が深まることに、多くの生徒が気づいたと思います」(弘先生)

弘先生、牛島先生が実感した成果が確かなものであることは、生徒の次の言葉からも分かる。

「社会の出来事に対してほかの人がどんな意見を持っているのか、もっと知りたいと思うようになりました」(張さん)

「地域の中のアートの役割を考えたことがきっかけになって、目に見えるものだけでなく、今は見えていない物事の本質を追究しようとする力が身についてきたように思います」(大城さん)

研修旅行をサポートした担当者

アートを通じて思考力や社会を見る目を養うBASNの教育プログラム

公益財団法人 福武財団 藤原綾乃さん

BASNでは学年や行程に合わせた教育プログラムを実施しています。今回は美術科の生徒向けに、BASNの作品鑑賞を通じてアートの役割とは何かを考え、その視点を生かして社会の課題を解決するグループワークを提案しました。安藤氏の講演、対話を用いた主体的な作品鑑賞、作品を通じて瀬戸内の自然や集落の魅力に気づく体験から、生徒たちのプレゼンテーションでは、思考を引き出す装置としてアートを取り入れたものが多く、アイデアも多岐にわたりました。どのグループも、体験から得たことを自分たちなりに解釈してアウトプットにつなげることができており、答えが1つではない課題に取り組んだ経験値や達成感、将来自分で自分の道を切り開いていく自信につながると考えます。また、作家の制作プロセスを追体験するワークショップにより、個性豊かな創造力も発揮されました。BASNの作品は、作家の様々な表現方法によって場の固有性を引き出し、鑑賞者に新しい視点を提示しています。自然、建築、地域、人、アートが融合する場で、より多くの関係性に気づき、総合力を養う学びを支援したいと考えています。

BASN教育プログラムお問い合わせ
<https://benesse-artsite.jp/education-program.html>

感染対策と教育効果を保護者に丁寧に伝える

コロナ禍でも生徒によりよい学びの機会を提供しようと、同校が初めて実施した「BASN」の教育プログラム。事後アンケートで集計した生徒の満足度は、例年と比べても高かったと言う。山本校長が期待した通り、生徒にとっては「困難な状況下で、チャンスを作り出す経験」になったと言えるだろう。

「保護者に安心して子どもを送り出してもらうために、学校としても感染対策において様々な配慮や工夫

をしました。人が密になることがないように、フェリーをチャーターしたり、バスを2台手配して1人2座席割りあてたりしました。また、旅行中に生徒が発熱した場合の対応を具体的に保護者に説明するなどしたことで、保護者の不安は随分払拭されたと思います。しかし、すべての生徒が参加できたのは、保護者の不安をしっかり受け止めて、安心・安全のための対策を説明した上で、保護者の不安を打ち消すほどの大きな教育効果がある研修旅行であることを、本校の教師が保護者説明会などの場で直接訴え、私たちの考えを理解してもらえたからだと思えます」(山本校長)

「BASN」での生徒と教師の学びや気づきを、様々な教育活動につなげていきたいと、山本校長は語る。

「『BASN』で目にした現代アート、そして直島そのものの歩みは、普通科や理数科の生徒にも大きな刺激をもたらすでしょう。STEAM教育の必要性が叫ばれる中、今回の研修旅行を、生徒と教師が本校における教育の本質を改めて追究していくきっかけにしたいと考えています」(山本校長)

渡部祐一

田村 学

谷口明正

VIEW21編集部 統括責任者
柏木 崇

小川幸司

より質の高い学びの場となるために、 これからの学校に求められていること

國學院大學 人間開発学部初等教育学科 教授 **田村 学** / 長野県蘇南そなん高校 校長 **小川幸司** /
愛知県立豊野ゆたかの高校 進路指導主事 **谷口明正** / 宮崎県立宮崎大宮高校 生徒指導主事・主幹教諭 **渡部祐一**

新学習指導要領の解説では、特別活動は「各教科等の学びの基盤」と説明されている。予測困難な時代においても、自らの人生を切り拓いていけるような資質・能力を育成すべく、授業改善や探究学習の拡充が進む中、「学びの基盤」である特別活動は、どのような教育活動であるべきなのか。そして、コロナ禍における気づきや学びを踏まえて考える「教育の『これから』」について、本誌8月号を起点に展開したシリーズ特集に登場した3人の教師と識者が語り合った。

特別活動で育まれる 進路意識や協働性

柏木 まず、今号の特集のテーマである特別活動についてお話を伺います。新学習指導要領の解説では、特別活動の課題として、身につけるべき資質・能力が必ずしも意識されないまま指導が行われてきたと指摘しており、各教科等の学習と関連づけながら、特別活動において育成を目指す資質・能力を示す必要があると記されています（P.22 図1）。現場の先生方からは、特別活動は前年踏襲になりがちで、形骸化しているように感じるといふ声も少なからず聞

こえてきます。本誌のシリーズ特集「教育の『これから』を考える」にご登場いただいた先生方は、特別活動の意義をどのように捉え、実践されていますか。

谷口 生徒同士で協働し、問題解決に取り組む中で、よりよい集団を形成するために必要な力を最も育みやすいのが特別活動です。リーダー経験の少ない生徒が多い本校では、リーダーシップを学ばせる上で、特別活動は大きな役割を果たしています。生徒が楽しく取り組みやすく、主体性が発揮されやすい特別活動は、学校の特色が表れる教育活動であるはずですが、そうした意義を現

場の私たちはもっと意識してもよい気がします。学習指導要領の改訂が、特別活動の意義を改めて確認する契機になってほしいと考えています。

小川 本校では、特別活動は教科の学習や探究学習で学んだことを踏まえて自身の生き方を考え、キャリアデザインを描いていく場と捉え、学校の中で最も大切な活動の1つと位置づけています。本校が育成を目指す資質・能力として、思考力・判断力・表現力や協働性、探究力などを掲げましたが、コロナ禍で特に育成の必要性を感じるようになったのが、レジリエンス（回復力）と自己効力感です。それらの資質・能力

を育成する上で、特別活動が果たす役割は非常に大きいと考えており、特別活動を含めた教育活動全体の見直しを図っています。

渡部 本校の特別活動の特徴は生徒主体で行われることです。例えば、中学生向けのオープンスクールでは、生徒会が中心になってスタッフを集め、計画から実施までを生徒が行います。先輩が後輩にノウハウを伝えていくため、教師が指示を出す必要がほとんどありません。そうした生徒主体の活動を通じて、協働性や他者を認める力、自律する力など



田村 学 たむら・まなぶ
國學院大學 人間開発学部初等教育学科
教授

専門はカリキュラム論など。新潟県公立学校教諭、同県柏崎市教育委員会指導主事、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官などを歴任。同省で新学習指導要領の作成に携わる。2017年度から現職。著書に『深い学び』（東洋館出版社）など。

田村教授による「主体的・対話的で深い学び」についての解説は、2020年10月号・特集P.24～27で紹介。

が育つと考えていますが、私たち教師が特に配慮しているのが、当事者意識の醸成です。どのような取り組みにも、生徒によってかわり方が濃淡があります。淡いかかわりができるだけ濃くなるよう、当事者意識を育む生徒への声かけを先生方には心がけてもらっています。

よりよい集団づくりが 質の高い学びにつながる

小川 生徒の視野を広げること、学校外を学びの場とする機会を有する特別活動の目的の1つだと考えています。特に、本校のような地方の高校で学ぶ生徒は、限られた生活体験から得た知識だけを基に、進路選択を行っていきます。多様な生き方や広い世界をできるだけ多く見せることで、生徒が自分の足場を広げられるのではないのでしょうか。

谷口 学校内だけで生徒の視野を広げることには限界がありますよね。本校では、豊田市と連携して生徒にSDGsについて学ばせ、企業が抱える課題に対する方策を提案する活動を始めています。学校外の大人に考えを伝えることが、生徒の視野を

図1 特別活動の課題

- 身に付けるべき資質・能力は何なのか、どのような学習過程を経ることにより資質・能力の向上につながるのかということが必ずしも意識されないまま指導が行われてきたという実態も見られる。特別活動が各教科等の学びの基盤となるという面もあり、教育課程全体における特別活動の役割や機能も明らかにする必要がある。
- 社会参画の意識の低さが課題となる中で、自治的な能力を育むことがこれまで以上に求められていること、キャリア教育を学校教育全体で進めていく中で特別活動が果たす役割への期待が大きいこと、防災を含む安全教育や体験活動など、社会の変化や要請も視野に入れ、各教科等の学習と関連付けながら、特別活動において育成を目指す資質・能力を示す必要がある。

*文部科学省「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 特別活動編」を基に編集部で作成。

広げ、成長を促すと期待しています。**田村** 学校外に活動を広げることがは確かに大切なことですね。ただ、生徒が視野を広げるためには、学校外の人のなかかわり以上に、自身の内面、そして自分の所属する集団の一人ひとりの個性を理解することが重要だと思います。自分が属している学校やクラスの課題、自分の日常生活の問題だからこそ、谷口先生が述べられた通り、主体性が発揮しやすく、渡部先生が配慮されている当事

者意識の醸成につながりやすいという面が特別活動にはあります。学習指導要領に「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせる」とあるように、自分が所属しているコミュニティを足場にして、人間関係の構築やよりよい集団づくり、集団の形成者としての立場を学ばせることも、特別活動の意義の1つだと思います。だからこそ、学校内のホームルーム活動や生徒会活動、学校行事が大切になるのです。

小川 学校の中で、よりよい集団づくりに寄与するような資質・能力を育んだ上で、学校外の地域や社会の課題を考えたり、実際に学校の外に出ていたりすることで、探究活動やキャリア学習もより深みを増していくというわけですね。学校内のコミュニティにおける活動と学校外の方があるから、生徒は成長するのだと、私は考えています。

田村 特別活動による集団づくりがなぜ必要なのかという点、よりよい学びにつながるからです。生徒一人ひとりが集団の形成者として他者を認め、力を合わせ、全体を高めていくという意識を持つ。それにより

長野県蘇南高校の取り組みは、2020年度8月号特集P.26～29で紹介。

長野県蘇南高校
 ◎「開拓者の精神を具現することのできる学校を」と建学の精神として、地域社会の期待に応える人材の育成を目指す。文理・経営・ビジネス・ものづくりの3系列制。キャリア教育を重視し、地域連携・教科横断型の「蘇南学」、インターシップなどに取り組む。
 ◎設立 1953（昭和28）年
 ◎形態 全日制/総合学科/共学
 ◎生徒数 1学年約70人
 ◎2020年度進路実績（現役のみ）
 公立大は、群馬県立女子大、新潟県立大、福井県立大、都留文科大、長野大に5人が合格。私立大は、麗澤大、中京大、大谷大などに延べ16人が合格。短大、専門学校進学28人。就職22人。
 ◎URL <https://www.nagano-ced.jp/sonan-hs/>



小川幸司 おがわ・こうじ
 長野県蘇南高校 校長
 教職歴32年。同校に赴任して1年目。地理歴史公民科。

個人の力が発揮されやすくなると同時に、全体で成長していく組織風土、集団のよさを守り伝えていく伝統が育まれ、それが組織の形成者一人ひとりの成長を促すのです。つまり、

愛知県立豊野高校の取り組みは、2020年12月号・特集P.22～25で紹介。

愛知県立豊野高校
 ◎「真心」を校訓とする。特別活動の目標は、「健全な精神と体の育成を目指す」。ホームルーム活動で生き方・将来を、部活動で協調・自律の精神を、行事や生徒会活動で創造的能力と企画力を高める。献血運動や地域清掃など、ボランティア活動にも力を入れている。
 ◎設立 1986（昭和61）年
 ◎形態 全日制/普通科/共学
 ◎生徒数 1学年約320人
 ◎2020年度入試合格実績（現浪計）
 国立大は、岐阜大、名古屋工業大、公立鳥取環境大に4人が合格。私立大は、東京理科大、日本体育大、愛知学院大、愛知大、豊橋創造大、名古屋学院大、名城大、鈴鹿医療科学大、近畿大などに延べ344人が合格。
 ◎URL <https://yutakano-h.aichi-c.ed.jp/cms/>



谷口明正 たにぐち・あきまさ
 愛知県立豊野高校 進路指導主事
 教職歴14年。同校に赴任して10年目。数学科。

ホームルーム活動と生徒会活動、学校行事から成る特別活動を深めれば深めるほど、生徒の相互理解が進み、学年やクラスの特徴も明確になっていく。それが「主体的・対話的で深い学び」を促進させ、生徒一人ひとりの学びを豊かにしていくのです。学習指導要領の解説に「特別活動が各教科等の学びの基盤となる」とあるのは、まさにそのことを言っているのだと思います（図1・P.24図2）。



柏木 崇
 VIEWS21編集部
 統括責任者
 かしわぎ・たかし

宮崎県立宮崎大宮高校
 ◎学校紹介および取り組みは、本号P.12～15で紹介。

渡部祐一 わたなべ・ゆういち
 宮崎県立宮崎大宮高校
 生徒指導主事・主幹教諭
 教職歴37年。同校に赴任して4年目。英語科。

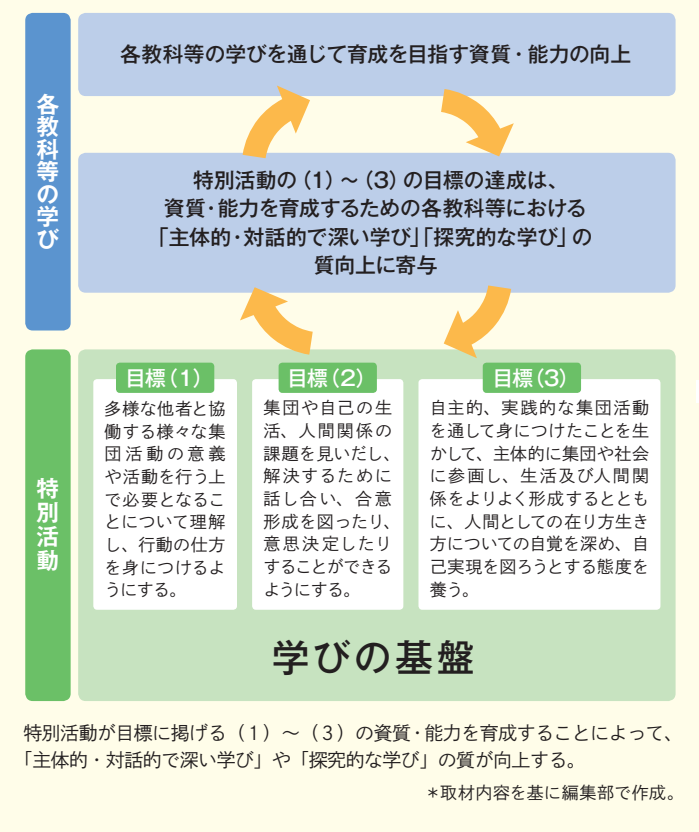


「主体的・対話的で深い学び」の実現には、強い関係があると思います。集団で何かを成し遂げた経験があれば、次もみんなで頑張ろうという気持ちになります。仲間との絆が深まれば、周りの様子が見えるようになって、主体性や協働性が発揮されやすくなり、授業が活性化され、思考の深まりが期待できます。「学びの基盤」という言葉を、私は、土壤というイメージで捉えています。特別活動によって耕した土壌が豊かであるほど、そのほかの教育活動を通じてまく種からの実りも、豊かになると思います。

生徒に内省を促し、成長につながる評価とは

柏木 特別活動をどのように評価し、生徒の成長につなげていくのかという点も、現場の先生方にとって今後重要になってくるテーマかと思えます。特別活動を「学びの基盤」とするためには、どのような評価のあり方が求められるでしょうか。
谷口 最も大切なのは、取り組み後の振り返りだと思います。本校では、教師による「値踏み」としての評価ではなく、生徒の自己評価を重視しています。特別活動だけでなく、教科等の学習面、進路面でも年度初めに目標を立てさせ、年度末にすべて

図2 「各教科等の学びの基盤」としての特別活動



の取り組みを総括して、生徒自身が「やりたいこと」「自分に向いていること」「自分ができていること」について振り返りを行い、自分の強みはどこにあるのかを認識させています。私が担任をしていた時は、行事後の面談において、最大の壁は何だったのか、それをどのように乗り越えたのか、生徒に話をさせていました。内省を深める問いを常に投げかけ、アウトプットさせることが、教科指導とは異なり、テストなどの機会の

ない特別活動の評価では特に大切だと思えます。

田村 評価について考える時、教師が生徒を見取る側面と、生徒が自身の学びを省察し、成長につなげる側面がありますが、後者は意外とおざなりにされることが多いため、注意が必要です。行事が終わった直後、生徒は大きな達成感に包まれますが、本当に大事なものはその後です。行事を通して自分がどう変わったのか、集団の力は高まったのか、その

中で自分は何ができたのかを振り返ることが成長につながります。

また、先生方は、生徒の成長を客観的に見取るための評価規準を、特別活動においてもつくる必要があります。この時、ポイントになるのは、いわゆる非認知能力を見取るための評価規準を、具体的に言語化できるかどうかです。例えば、行事については「お互いの違いやよさを認め合いながら学校行事を推進している」「ボランティアについては「毎朝欠かさことなく活動を続けている」などと言語化できれば、教師は目の前の生徒の姿から、「学びの基盤」としての資質・能力が育っているかを判断できます。非認知能力の定義については、各校の実情に鑑み、具体的に言語化することが重要です。明確な評価規準ができれば、先生方が育てるべき資質・能力が鮮明になり、学習活動の精度も上がっていくはず

です。

小川 これまで教師が指導要録に書いていた特別活動の評価は、「実行委員を誠実に務めた」「文化祭を成功させた」といった程度で、必ずしも生徒の努力や成長について言語化できているわけではありませんし

た。育成を目指す資質・能力をゆるやかにイメージしておくことで、教師は客観的な見取りが可能になるとともに、生徒が自身の学びを掘り下げ、より適切に自己評価を行うことを支援できるでしょう。今後、本校の課題であるレジリエンスと自己効力感についても、特別活動でどのように伸ばしていくのかを言語化し、取り組みのイメージを生徒と教師で共有していきたいと思えます。

谷口 活動ごとに育成を目指す資質・能力を明確にすれば、教師は「今回の活動では○○の力を伸ばすように心がけよう」と、生徒に具体的に発信できますね。一方、生徒は事前に「自分の○○の力は今のレベルにあるのか」と意識することができ、事後に「取り組み後にどのレベルになったのか」「そう思ったのはどういった行動ができたからか」と考えることで、より具体的に次につながる自己評価ができるようになると思えます。

田村 その上で、特別活動はそれぞれが単発の教育活動として捉えられないように、関連性、連続性を意識してプログラムを構築していくことも大切です。

総括◎コロナ禍を経た「学校」の姿とは

学校の価値が再認識された 今こそ教育の本質への回帰を

柏木 最後に、想定外のコロナ禍で、教育のどのようなことが浮き彫りになったか、そして、これから学校はどうあるべきなのか、先生方のお考えをお聞かせください。

田村 コロナ禍で私たちが再認識したことが2つあると思います。1つめは、学校という社会資本の持つ価値です。休業になった当初は、その状況を喜ぶ生徒はいたものの、程なくして友人などに会えないことを寂しいと感じ、保護者も学校の大切さを実感しました。臨時休業を機に、学校は社会の基盤であることが広く共有されるとともに、学校に対する期待が一層高まったのも、この1年の大きな変化だったと思います。それは、学校を支えてきた多くの先生方の努力の結果にはかたまりません。

2つめは、学びの意義です。答えが1つではない問題に大人たちが右往左往する姿を、子どもたちは目の当たりにしました。これまで、大学入試が変わらなければ授業も変わ

らないと言っていた先生方も、答えが1つではない問題に向き合うことに、学びの本質的な価値があるということを考えさせられたはずで、コロナは災厄ではありますが、発想を変えてみれば、今が教育の大きな転換点になる可能性がありますし、むしろそうしなければならぬと思います。そうした流れを、教育の本質への回帰と捉えて、学校現場に定着させられるかが、これからのトッパーリーダーやミドルリーダーに問われるのではないのでしょうか。

渡部 転換点にできるよう、まずは校内での対話を大事にしたいと思います。コロナ禍によって多忙感が高まっているのは事実ですが、忙殺されることなく、何とかして、ベテラン、若手、それぞれが思いを語り合える機会を設けるべきだと考えています。一方で、社会に開かれた教育課程を目指す中で、学校だけでなく、行政、保護者、教育にかかわるすべてのステークホルダーが連携して、子どもたちにとって必要なことを考えていく必要性を感じています。

谷口 臨時休業中の2か月間は、職

員室で先生方と教育とは何か、学校とは何かといった根源的な問いについて話し合う機会に恵まれました。また、若手教師が率先して学校を変えていこうという雰囲気が出てきたのも、大きな変化の1つです。本校での学校のあり方についての議論では、以前はベテランの意見に左右されることが少なくありませんでした。しかし、今年度は、20〜30代の先生方が「何が起きるか分からない社会だからこそ、私たちにもできることがある」と、ベテランを巻き込んで新しいことに取り組み始めており、非常に心強く感じています。

小川 私は「つながりの大切さ」を再発見しました。生徒同士、生徒と教師の心がきちんとつながっているかを意識し、評価や見取り、日頃の声かけや支援を丁寧に行うことで、つながり続けることが大切なのだと改めて感じています。同時にレジリエンスや協働性など、生徒に求めている資質・能力を教師が持っているかどうかも問われた1年だったと思います。私たち教師の側も、生徒と同じように、学び続ける必要があることを痛感しました。まだまだ大変な状況が続くと思いますが、絶えず

新しいことに挑戦をしているという意識を学校全体で共有して、未知の次のステージへ前進していきたいと考えています。

田村 これからの学校教育では、生徒一人ひとりにふさわしい個別最適化された学びが必要となりますし、答えが1つではない問いや解決困難な問題について考える探究的・協働的な学びが一層重視されるようになるはずです。高校の先生方には、従来通り専門性をストロングポイントとして持ちながら、アクティブな学びをコーディネートする力がさらに求められるでしょう。

高校生にぜひとも身につけてほしいのは、「未来社会を創造する主体としての自覚」です。未来を創造する主体は自分たちであることを一人ひとりが自覚し、積極的に社会に参画し、つくり上げていく意欲を持つ。そうした学び手を育てることも、これからの学校教育の使命と言えるかもしれません。

柏木 今を生きる私たち一人ひとりが、未来をつくる当事者として、これからの教育のあり方について考え続けることが重要だと思いました。本日はありがとうございました。

NEXTを 語り合う ワークシート

『VIEW21』 高校版
2021年2月号特集

テーマ

特別活動の真価・進化を考える

特別活動も、学校が育成を目指す資質・能力を、生徒が身につけるための重要な教育活動の1つだ。では、自校の特別活動は、どのような資質・能力を育成することに寄与しているだろうか。改善する余地があるとしたら、それはどのような点だろうか。自校の教師同士で、改めて特別活動の真価を問い、さらなる進化を目指すために、本ワークシートを使って考えてみていただきたい。

ワークシートの使い方

本ワークシートを複写、またはダウンロードし、各自が①②③④⑤を記入した上で集まる。記入した内容を共有してから、自校の特別活動を改善するために、今後できそうなことや工夫してみたいことについて意見を交わし、その内容を④④に記入する。そして、特別活動の充実が教科の授業に与える影響や、教科の授業にも取り入れられそうな特別活動における工夫について語り合い、その内容を⑤に記入する。

1

自校で育成を目指す資質・能力を記入し、そのうち、特に特別活動で育むことができると考えられる資質・能力を選び、○で囲む

※自校で育成を目指す資質・能力を今後検討する場合は、学年団や分掌などで重視している資質・能力を記入

2

①で選んだ資質・能力の育成に寄与していると考えられる特別活動の種類と具体的な内容

【活動の種類】 ※該当するものを○で囲む

ホームルーム活動・生徒会活動・学校行事

【具体的な活動内容】

2

①で選んだ資質・能力の育成に十分に寄与していないと考えられる特別活動の種類と具体的な内容

【活動の種類】 ※該当するものを○で囲む

ホームルーム活動・生徒会活動・学校行事

【具体的な活動内容】



ファシリテーター役の先生へ

特別活動は、教科指導に比べると、改善のための議論が少なくなりがちです。そのため、これまでは育成を目指す資質・能力とひもつけて特別活動を見直したことがなかったという教師もいるでしょう。だからこそ、資質・能力を軸に、「この行事は、資質・能力の育成にどのように寄与しているのか」「自分のホームルーム活動では……」などと、教師が互いの考えを語り合う機会は貴重です。ただ、これまで特別活動について対話する機会が少なかったために、言葉に窮する教師がいるかもしれません。そうした時は、「こんな特別活動ができればいいなと思ったことはありませんか？」と、活動の理想の状態を想像させると、意見が言いやすくなるでしょう。

5
②、②で挙げた特別活動の充実によってもたらされると考えられる、教科の授業の変化や、教科の授業に取り入れられそうな特別活動の工夫

4
②で挙げた特別活動をさらによいものにするために、今後できそうなこと・工夫してみたいこと

3
②で挙げた特別活動が、①で選んだ資質・能力の育成に寄与していると考えられる理由

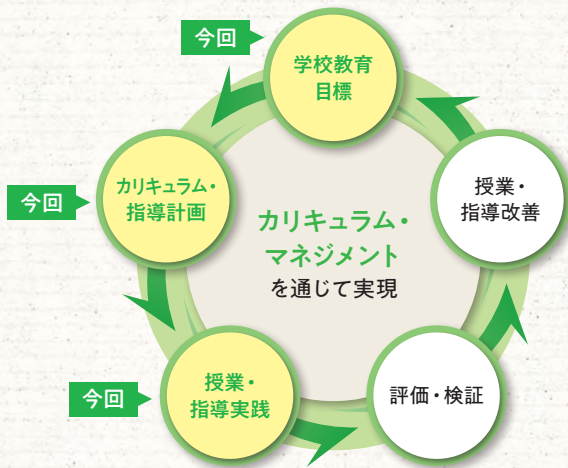
4
②で挙げた特別活動を、①で選んだ資質・能力を育成するものにするために、今後できそうなこと・工夫してみたいこと

3
②で挙げた特別活動が、①で選んだ資質・能力の育成に寄与していないと考えられる理由



育成を目指す資質・能力を精選し、 学年団の裁量を担保することで、 運用されるグランドデザインを実現

群馬県立吉井高校



◎校訓は、「明るく、清く、正しく、強く、美しく」。2000年度、総合学科に改編。2年次から、文科系列、理科系列、芸術・福祉・体育系列、商業系列に分かれる。地域に開かれた学校を目指し、生涯学習のための学校開放講座や生徒のボランティア活動などに力を入れている。

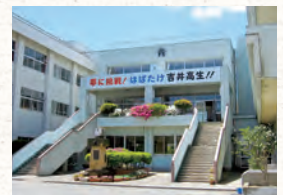
◎設立 1975(昭和50)年

◎形態 全日制/総合学科/共学

◎生徒数 1学年約160人

◎2020年度進路実績(現役のみ) 国立大は、群馬大に1人が合格。私立大は、共愛学園前橋国際大、群馬医療福祉大、上武大、高崎商科大、駿河台大、工学院大、国士館大、東海大、日本大などに延べ37人が合格。短大、専門学校進学66人。就職34人。

◎URL <http://www.nc.yoshii-hs.gsn.ed.jp>



課題はグランドデザインの 学校全体への浸透

群馬県立吉井高校は、2016年度に教育活動のグランドデザインに策定に着手した。その後も毎年見直し、20年度のグランドデザイン(図1)から実質的な運用が始まった。同校がグランドデザインを策定した背景には、生徒の多様性という総合学科ならではの状況があった。大学進学を目指し、勉強を頑張りたい生徒や自分の強みを生かして就職したい生徒、部活動に打ち込みたい生徒など、高校への期待は様々だ。一

方で、生徒への育成を目指す資質・能力が教師間で共有されておらず、指導の方向性が定まっていなかったという課題があった。そうした中、文部科学省から2つの研究指定(※)を受け、問題解決型の学習やアクティブラーニング(以下、AL)の視点での授業改善を始めたことをきっかけに、多様な資質・能力を評価する必要性が高まり、学校全体として進むべき方向性を定めようとする意識が教師間に醸成されていった。そのような背景から、16年度、管理職と各分掌の主任によってグランドデザインの策定が進められた。育

図1 「吉井高校グランドデザイン2020」



*学校資料をそのまま掲載。

* 2015年度からは、「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究」に研究指定。2016年度からは、「教科の本質的な学びを踏まえたアクティブラーニングの視点からの学習・指導方法の改善に係る実践研究」に研究指定。



教務主任
小林良典
 こばやし・よしのり
 教職歴21年。同校に赴任して4年目。数学科。
 進路指導主事
町田貴
 まちだ・たかし
 教職歴16年。同校に赴任して3年目。国語科。
 1学年主任
飯田貢士
 いいだ・あつし
 教職歴19年。同校に赴任して7年目。数学科。
 2学年主任
狩野圭市
 かのう・けいいち
 教職歴16年。同校に赴任して6年目。理科(生物)。

成を目指す14の資質・能力を定め、それらを育成する方策を各教科・科目と各分掌で検討した(図2A)。

しかし、この段階でのグランドデザインは、策定にかかわったのが特定の教師にとどまったこともあり、全教師が当事者意識を持って指導に生かすものとしては浸透しなかった。

全教師が課題を共有し、資質・能力を絞り込む

17年度は、全教師に運用されるグランドデザインにするための改訂に

図2 グランドデザイン策定のステップ

2016年度 ◎管理職・各分掌主任によって、グランドデザインを検討。(A)

育成を目指す資質・能力 ①コミュニケーション能力 ②プレゼンテーション能力 ③主体性 ④基礎的・基本的な知識・技能 ⑤英語力 ⑥グローバル人材 ⑦論理的思考力 ⑧協働性 ⑨多様性 ⑩チャレンジ精神 ⑪豊かな心 ⑫心と体の健康 ⑬文武両道 ⑭創造的表現力

2017年度 課題 学校全体にグランドデザインが浸透しない。

◎管理職・各校務分掌主任・各学年主任の8人による企画会議で、自校の教育活動がグランドデザインの中でどう位置づけられるのかを議論・確認。(B)
 ◎全教師によるワークショップで、育成を目指す生徒像、生徒に身につけさせたい資質・能力、そして、その育成の方策について議論。(C)

◎ワークショップで出された意見を企画会議で検討し、育成を目指す資質・能力を8つに精選するなど、2018年度のグランドデザインの策定につなげた。(D)

育成を目指す資質・能力 ①コミュニケーション能力 ②思考力・判断力 ③表現力・プレゼンテーション能力 ④主体性(主体的に学習・行動する力) ⑤基礎的な知識・技能 ⑥やりきる力・レジリエンス ⑦自己肯定感・自尊心 ⑧課題解決能力

2018年度 課題 育成を目指す資質・能力は8つでも多く、細かい点で授業や学校行事などの目標と結びついていない。

◎企画会議、全教師によるワークショップで、本当に必要な資質・能力とは何かについて議論。(E)

◎育成を目指す資質・能力を3つに精選したグランドデザインを策定。各教科・科目、学校行事などで育成するための方策を一覧化。(F)

育成を目指す資質・能力 「主体性」「コミュニケーション能力」「やりきる力」

2019年度 課題 ルーブリック作成の過程で、「主体性」を育成する方策・評価と、「コミュニケーション能力」「やりきる力」を育成する方策・評価の区別がつけられないという問題が浮上。

◎企画会議で議論し、「主体性」「コミュニケーション能力」「やりきる力」の関係性を整理して、2020年度のグランドデザインを策定(図1)。

*学校資料、及び取材を基に編集部で作成。

動いた。管理職、教務主任、生徒指導主事、進路指導主事、各学年主任による「企画会議」を隔週で実施。学力向上策や学校行事、部活動等の教育活動がどういった資質・能力の育成に結びついているのか、本当に必要なものなのかを検討した(図2B)。

全教師参加のワークショップ(以下、WS)も学期に1回実施。教科や学年を超えた4〜5人から成るグループで、自校の教育活動について話し合った。自校の課題をテーマとした回では、各教師が課題を出し合い、それらを基に教育活動を精査し、改善すべき活動について対応策を検討した。

討した。また、グランドデザインがテーマの回では、育成を目指す資質・能力と、育成の方策を話し合った(図2C)。そうしたWSが、グランドデザインの必要性を全教師に浸透させる機会になったと、教務主任の小林良典先生は語る。

「最初はWSの参加に消極的な教師もいましたが、実施してみると皆、活発に議論し、『やってよかった』といった声が聞かれました。教師間で目標や課題を共有したことで、グランドデザインを自分事として捉えられるようになっていきました」

WSの内容は企画会議で共有し、グランドデザインの改訂につなげた。例えば、「育成を目指す資質・能力が多く、焦点が定まらない」といった声を踏まえ、14の資質・能力が生徒の実態に合っているか、重複していないかを検討し、8つに精選(図2D)。18年度の企画会議でも継続して検討し(図2E)、同校が直面する課題に焦点をあてた3つの資質・能力に集約した(図2F)。

「総合学科である本校には、生徒が自ら進路目標を定めて切り拓いていく『主体性』が欠かせません。また、生徒同士のグループワークで議論が深まらないという課題が浮き彫

りになったこともあり、『コミュニケーション能力』の育成も必須でした。『やりきる力』は、部活動に力を入れてきた本校の歴史を踏まえ、どんな場面でも最後まで力を出し切ってほしいという思いから設定しました」（小林先生）

資質・能力の育成の方策とルーブリックを作成

19年度は、全教科・科目、及び1年次の「産業社会と人間」、2・3年次の「総合的な学習の時間」、学校行事・LHR、部活動のそれぞれについて、3つの資質・能力を「身につけるための方策」を各教科・科目と各分掌で分担して作成。さらに、それを基に、各教科・科目でルーブリックを作った。

ルーブリックの作成前には、教員研修を実施し、学力の捉え方がコンテツ・ベースからコンピテンシー・ベースに転換されることや、ペーパーテストでは測りきれない力を育成し、客観的に評価する必要があることなど、新学習指導要領の趣旨の理解を深めた。

数学科では、自校の生徒の状況を

踏まえてルーブリックの文言やレベルを設定したと、数学科担当で1学年主任の飯田貢士先生は語る。

「問題解決の過程を、ほかの人が見ても分かりやすいように書くことができる」といったように、数学が苦手な生徒でも理解できる表現になるように心がけました」

そのように評価規準が明確になったことで、計算の途中式を書くようになるなど、丁寧に問題に取り組む生徒が増えたという。

一方で、ルーブリック作成の過程では、『主体性』と『コミュニケーション能力』『やりきる力』とで、育成する方策や評価の区別がつきにくい」といった指摘があった。そこで、3つの資質・能力を並列にせず、『主体性』を上位にし、それに付随する資質・能力として、『コミュニケーション能力』『やりきる力』を置く現在のグランドデザインの形とした（P.28図1）。

グランドデザインを基に指導改善が進む

3つの資質・能力を「身につけるための方策」が明確になったことで、

進路指導や教科指導の改善が進んでいる。

「グランドデザインは、策定がゴールではなく、始まりです。育成を指す資質・能力を3つに絞り、育成の方策と評価規準を定めたことで、実効性のあるグランドデザインになりました。教師の会話の中でも、『コミュニケーション能力』や『やりきる力』などがキーワードとして出るようになりました」（飯田先生）

20年度は、全1年生に手帳を配布した。学習や生活の計画を自ら立て、達成状況や課題、次の目標を記録するための。生活を律することで『主体性』を養うとともに、担任とのやり取りを通じて『コミュニケーション能力』を、1年間記入し続けることで『やりきる力』を育むことがねらいだ。また、手帳は、コロナ禍で面談が十分にできない中で、生徒把握のツールとしても活用している。

国語科では、20年度の1年次から漢字検定の全員受検をスタートさせた。進路指導主事も務める町田貴先生は、そのねらいを次のように語る。

「検定という目標を設定すること、『主体性』や『やりきる力』の育成につながると考えています。1.

2学年を通して検定学習を奨励し、学習習慣の定着を促すことは、数学や英語などの基礎学力の向上にもつながるでしょう」

各学年が毎年目標を定め、柔軟に取り組みを軌道修正

学年団の裁量が大きいことも、指導改善が進む一因となっている。同校では17年度、総合学科推進部の主導で、1年次は「発見」、2年次は「挑戦」、3年次は「飛躍」をキーワードとして、探究学習の3年間の計画を策定した。以降、そのキーワードを各学年のテーマとしつつ、学年団の方針や生徒の実態に応じて、学年の目標と取り組みを毎年策定し、グランドデザインに反映している。

「育成を目指す資質・能力と各学年のキーワードは変わりませんが、各学年の目標設定とその達成の道筋は、各学年団に任されています。指導の内容や方法を学年団が決められるようにすることで、各教師の主体性が高まります。そうした柔軟性も、グランドデザインの実効性を担保する上で欠かせません」（小林先生）

20年度の2学年では、キーワード

図3 育成を目指す資質・能力を「身につけるための方策」とルーブリック(抜粋)

■育成を目指す資質・能力を「身につけるための方策」

育成を目指す 資質・能力		主体性の育成	
		コミュニケーション能力	やりきる力
身につけるための方策	各教科の授業	国語 言葉を使った活動(言語活動)による意思疎通を目指す。 地歴・公民 グループワーク等で意見交換し、自らの知識や考えをまとめ、発表するとともに、様々な立場や意見があることを理解する。 数学 グループ学習による問題演習を通じて、自分の考えを他者に伝えるように発表する。 理科 課題研究や実験でのグループワークを通じて、問題解決に向けて協力する。 保健 グループ練習を行い、その中で技術向上	自ら設定した目的に向かって、根拠ある自信を積み上げながら、継続的に前進する。 獲得した知識や情報を活用して説明できるなど、年間を通じて、総合的な力を身につける努力を続ける。 発展的な課題にも積極的に挑戦し、諦めずに問題解決に向かう。 授業中に生じた疑問について積極的に質問し、解決する。 記録の向上を目指す。
	「産業社会と人間」 「総合的な探究の時間」	職場体験や吉井ナビなどの活動に積極的に取り組むことで、コミュニケーション能力の向上を目指す。 探究学習の中で、自らの考えを人に分かりやすく伝える。	様々な活動の中で、振り返りまで行うことで、自らの新たな一面にも目を向けてみる。
	学校行事 LHR	グループエンカウンターなども利用し、友好的な人間関係づくりを行う。	LHRで進路目標設定や受験計画作成を行い、その達成を目指し、ひたむきに努力する。
	部活動	定期的なミーティングを開き、部員間の話し合いにより、具体的な目標設定を行う。	挨拶など、基本的な礼儀を徹底する。
		とともに努力する仲間を尊重し、相互理解を深める。	活動日誌に記録して、日々の振り返りの習慣を確立する。

■数学のルーブリック

育成を目指す 資質・能力		主体性の育成	
		コミュニケーション能力	やりきる力
身につけるための方策		グループ学習による問題演習を通じて、自分の考えを他者に伝えるように発表する。	発展的な課題にも積極的に挑戦し、諦めずに問題解決に向かう。
評価	A	・先生や友人の意見・考えをきちんと聞くことができる。また、相手の立場に立ち、自分の考えや説明を分かりやすく伝えることができる。 ・問題解決の過程を、ほかの人が見ても分かりやすいように書くことができる。	・分からない問題に対しても粘り強く取り組み、何とかして解決しようとしている。また、間違えた問題に対して、必ずやり直しを行い、理解しようとしている。 ・自分の進路を意識して、継続的に家庭学習を行っている。
	B	・自分の考えを説明し、先生や友人の話を聞くことができる。 ・問題解決の過程を書くことができる。	・分からない問題に対して、先生や友人の手を借りて、最後まで解決する。 ・テスト前には、集中して家庭学習を行う。
	C	・自分の考えをきちんと伝えることができなかつたり、先生や友人の話を理解しようとしなかつたりする。 ・問題解決の過程を書かずに答えだけを書く。	・分からない問題や間違えた問題をそのままにしている。 ・テスト前にも少ししか勉強しない。

*学校資料を基に編集部で作成。

の「挑戦」を基に、「進路目標達成への強い意志を持つ」を目標の1つに掲げた。それを踏まえ、小論文対策や志望理由書、卒業後の自分への手紙の作成などの活動を徹底して行うことで、進路意識の向上に努めた。

例えば、夏季休業中に自分が目指す職業と社会問題の解決をテーマとした小論文を課し、休業明けに生徒同士で読み合った。クラスメートの

夢や自分とは異なる視点などに刺激を受けた生徒が少なくなかったと、2学年主任の狩野圭市先生は語る。「2学年では、自己実現を図るための知的好奇心や意欲、必要な情報を得るための情報収集力など、自分の進路を切り拓く力の育成を意識して指導してきました。その結果、生徒は何事にも意欲的に取り組んでいると手応えを感じています」

あらゆる教育活動を意味づけする意識が定着

グラウンドデザインの策定を通じて、教師の意識は大きく変わった。「生徒にどのような資質・能力を育成したいのかという目的意識を持つて指導するようになりました。あらゆる教育活動に意味づけができるようになったことが、指導改善に

つながっています」(小林先生)

年2回行う生徒の自己評価では、1回目より2回目の方が、3つの資質・能力が向上したという結果が出ており、指導改善の効果がうかがえる。

今後の課題は、資質・能力のさらなる育成に向けて、文部科学省の「IGAスクール構想」によって活用の幅が広がるICTを、授業に効果的に取り入れることだ。教員研修などを通じて活用法を模索し、学校全体で共有していく。加えて、ルーブリックの運用レベルを学校全体で高めることも課題だ。20年度の2学期には、改めて新学習指導要領の趣旨の理解を深めるために研修を実施し、各教科・科目で育成を目指す資質・能力を「身につけるための方策」とルーブリックを見直した(図3)。

「教科・科目によっては、ルーブリックよりも振り返りシートやポートフォリオの方が評価ツールとして運用しやすいかもしれません。教科・科目の特性に応じて、あらゆる可能性を検討したいと思っています。また、今後は学校行事や部活動のルーブリックも作成し、すべての教育活動を通じて生徒の資質・能力を高めていきます」(小林先生)

11:45 本時のテーマを説明



長田先生は、ワークシートを配布した後に、本時のテーマが「ファッション産業の問題点」と説明した。テキスタイル工学科には、ファッション業界の企業に就職する生徒が多いことから、「ファッション産業の問題点を知っても、がっかりするのではなく、どうすれば問題を解決できるのかをみんなで考えてほしい」と熱く呼びかけた。

授業 ハイライト

●テキスタイル工学科3年生が履修する学校設定科目「新素材」の「地球環境負荷を軽減する繊維」の全5時間のうちの4時間目。ファッション産業が抱える環境問題について知り、持続可能な産業のあり方を考えた。(P.35に単元の指導計画を掲載)

主体的・対話的で
深い学びへ

実践
アクティブ・ラーニング

工業

考える手がかりとなる知識を
提示した上で生徒に問いかけ、
思考の深化を促す

長田先生のアクティブ・ラーニング

物事を深く考える面白さを
生徒が実感できる授業を目指す

ながた・ひでふみ
長田英史先生は長年、授業中にノートを取る
ことだけに一生懸命な生徒や、自分で考えずに
正解をすぐに知りたがる生徒が多いことに課題
を感じていた。そこで、教材研究に力を注ぎ、
生徒に考えてほしいことを明確にした上で単元
計画や指導案を作成。授業では、自分の伝えた



石川県立工業高校

長田英史 ながた・ひでふみ

教職歴26年。同校に赴任して9年目。

教務課。工業科。

一般企業での勤務を経て、高校教師になる。

2015年度からアクティブ・ラーニングの
視点をとり入れた授業を実践。

石川県立工業高校

◎前身は、日本で最初の工業高校として設立された金沢区工業学校。「ものづくりはひとつづくり」の理念の下、社会から期待され、社会に貢献する工業技術者、産業人の育成に力を注ぐ。

◎設立 1887(明治20)年

◎形態 全日制/機械システム科・電気科・電子情報科・材料化学科・工芸科・テキスタイル工学科・デザイン科/共学

◎生徒数 1学年約320人

◎2020年度進路実績(現役のみ)

国公立大は、富山大、福井大、長岡造形大、石川県立大、金沢美術工芸大、公立小松大などに9人が合格。私立大は、金沢工業大、福井工業大などに延べ48人が合格。短大・専門学校進学78人。就職163人。

◎URL <https://www.ishikawa-c.ed.jp/~kenkoh>



次に、長田先生は「Thinking Time」のボードを示し、「今の話で見えてきたファッション産業の問題点を9つ書いてみよう」と言い、制限時間5分間でワークシートに取り組みました。同校では、考える活動を「県工 Thinking Time」と名づけ、ボードを掲示して取り組ませることで、生徒に考えることへの意識づけを行っている。



長田先生は、写真やグラフを示しながら、ファストファッションの縫製工場の労働環境や、服の生産が自然環境に与える負荷について解説した。工場から垂れ流された染色液で汚染された川の写真をスクリーンに映し、「これ、何だと思う?」といったように、生徒が関心を持てるような写真を示すとともに、問いかけをし、生徒の発言を促した。

いことを生徒に熱く語りかけていた。

「分からなかったことが分かった時の喜びや、物事を深く考えることの面白さを、授業で生徒に実感させたいと考えました。ただ、今振り返ると、伝えたいという思いが強すぎて、生徒に一方的に話す授業になっていました」

そうした折、長田先生が勤務する石川県立工業高校は、2014年度から3年間、文部科学省「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール」の指定校となった。それを機に、育成を目指す資質・能力として思考力やコミュニケーション力、創造力を掲げて、学校全体でそれらを育成する授業の研究を進めた(*)。その過程で、長田先生はアクティブ・ラーニング(以下、AL)について学び、授業に取り入れ始めた。

「グループでディスカッションをさせた最初の授業では、生徒は私の問いに対してほとんど発言をせず、教室が静まりかえってしまいました。生徒が発言しやすい場づくりや、生徒から考えを引き出す教師のファシリテーションの重要性を痛感し、問いの立て方や生徒への声かけにおける工夫を試行錯誤しました」

思考の活性化・深化への配慮

テーマ設定の工夫と、知識・視点の提示で、思考の深化に導く

長田先生は、「考えよう」「議論しよう」と呼ぶだけでは、生徒は何をどのように思考

し、議論すればよいのか分らないと考えた。そこで生徒が関心を持ち、自分事として考えられるテーマを設定した上で、思考を活性化させるための知識と視点を提示するようにしている。

「工業高校ならではの最先端技術や、生徒が関心を持ちそうなタイムリーな話題を題材にし、生徒が『知りたい』『なぜだろう』と思うような問いを設定するようにしています。関心を引きつけるためには、写真や図を用いて視覚に訴えることも有効です。適切な問いを投げかけられるように、教材研究には時間をかけています」

例えば、本時は、ファッション業界を目指す生徒が多いテキスタイル工学科の授業であるため、授業のテーマを「ファッション産業の問題点を洗い出し、持続可能な産業のあり方を考える」と設定。生徒がよく着るファストファッションを取り上げ、それがどのように製造されているのかを写真やグラフを示しながら解説し、労働問題や環境問題を抱える産業である点に目を向けさせた。そして、思考を活性化させる視点として、ファッション産業の問題は、工業技術を用いて解決できることと、社会の仕組みや人々の意識を変えないと解決できないことに分かれるのではないかと問いかけた。

「ファッション産業の問題が、企業や業界だけでなく、社会の問題であることに思いを巡らせてほしいと考えました。卒業後に働く業界の問題に、消費者として既に自分がかかわっていると気づいた生徒もいました」

* 同校の取り組みは、本誌2018年2月号の特集の実践事例1(P.12-16)で紹介。



「ファッション産業の何が問題か、どうすればよくなるか、どんな意見を出そう」と、長田先生が生徒に発言を促すと、「リサイクル率を上げる」「長時間労働の改善」「無駄に服を買わない」など、生徒から様々な意見が出された。それを踏まえ、ワークシートにファッション産業のあり方について意見をまとめさせ、最後に振り返りシートで自己評価をさせた。



ワークシートに書き込む生徒の手が止まってきたタイミングで、長田先生は、「9つ挙げるのが難しかったら、席が隣や前後の人に相談してみよう」と、生徒にペアワークを促した。すると、生徒たちは、自分の書いたワークシートを見せ合いながら、「服の値段が安すぎるのも問題だね」「川の汚染を防ぐにはどうすればよいのかな」など、考えや疑問を話した。

場づくりへの配慮

生徒のつぶやきを拾い上げ、 発言しやすい雰囲気をつくる

長田先生は、授業中の生徒のちょっとしたつぶやきも聞き漏らさないようにしている。「何でそうなるのだろうか?」といった生徒のつぶやきを取り上げて、「みんなはどう思う?」とほかの生徒に投げかけると、生徒同士の議論が始まって、考えが広がったり、思考が深まったりすることがよくあるからだ。

「教師にとつては何気ない一言でも、生徒は勇気を振り絞って発した一言かもしれません。生徒の一言一言を、教師が大切に受け止めることで、生徒が発言しやすい場がつくられていくと考えています」

生徒から多様な発言を引き出すことを大切にしながらも、本筋から脱線しすぎないようにす

長田先生は、生徒のそうした気づきから考えを深めさせるために、言語化することも重視している。本時では、長田先生の解説を基に、ワークシートにファッション産業の問題点を9つ書かせた上で、それらの問題点が、思考を活性化させる2つの視点のうち、それぞれどちらに関する問題なのかを分類させた。そして、授業の最後には、本時の目標の到達度の自己評価とその理由、授業前後での自身の変化について、「振り返りシート」に記入させた。

成果と課題

ノートの取り方が変わり、 問いに対する姿勢にも変化が

長田先生は、授業改善の手応えを少しずつ感じている。例えば、ノートの取り方では、板書をそのまま写すのではなく、授業で自分がポイントだと感じたことや疑問を抱いたことなどが、読み返した時に分かるように書く生徒が増えた。また、長田先生が問いを投げかけると、すぐに答えを知ろうとするのではなく、「なぜ、こういった状況になっているのか」「私はここをもっと深く知りたい」といった発言が、生徒から出てくるようになった。

「本校の生徒の多くは、卒業後すぐに就職します。企業の即戦力として、与えられた仕事を的確に丁寧に行うとともに、自分で考えてより質の高い成果を出すことも求められます。自分で、そして他者と一緒に物事を深く考える授業を通じて、自ら行動できる生徒や、自分の意見を持ってそれを発言できる生徒、また広い視野を持った生徒を、これからも育んでいきます」

単元の指導計画

【教科・科目】工業・学校設定科目「新素材」 【分野・単元】地球環境負荷を軽減する繊維 【テーマ・作品】持続可能なファッション産業のあり方 【設定時数】全5時間の中の4時間目 【単元目標】①ファッション産業が抱える環境問題について知り、環境負荷を軽減する繊維について理解する。②持続可能なファッション産業のあり方について考え、それをまとめる。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	<ul style="list-style-type: none"> リサイクル繊維について学ぶ。 マテリアルリサイクルとケミカルリサイクルの違いを工業技術の側面から学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> 環境問題の現状を知り、環境負荷を軽減する繊維について理解する。 知らないことに対して、新たな知識を身につけようとする。 【知識、技能】	<ol style="list-style-type: none"> 繊維産業における環境問題への対応を解説する。 マテリアルリサイクルとケミカルリサイクルの違いを、ノートにまとめる。 	【主体的な学び】 ルーブリックを提示して目指す姿をイメージさせ、学習に見通しを持たせる。身近な例を示して、自分事として捉えさせる。 【対話的な学び】 理解したことを自分の言葉で説明させる。	<ul style="list-style-type: none"> 発言 ノート
2	<ul style="list-style-type: none"> 生分解性繊維の材料としての特徴や用途を学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> 知らないことに対して、新たな知識を身につけようとする。 【知識、技能】	<ol style="list-style-type: none"> 生分解性繊維について解説する。 生分解性繊維と生分解性樹脂の実物を見て、それらの用途を考え、ノートにまとめる。 振り返りシートに自己評価と本時の気づきを記入する。 	【主体的な学び】 振り返りシートを記入させ、授業の前後での自らの変容に気づかせる。	<ul style="list-style-type: none"> 発言 ノート 振り返りシート（ワークシート）
3	<ul style="list-style-type: none"> リサイクル繊維、生分解性繊維について、理解したことをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> リサイクル繊維と生分解性繊維について理解したことをまとめ、表現することができる。 【知識、技能、表現力】	<ol style="list-style-type: none"> 環境負荷を軽減する繊維について理解したことを、教科書やノートを参考にしながら、A4判シート1枚にまとめる。 まとめた内容を全体に発表する。 	【主体的な学び】 「色ペンを使って、見て楽しい、書いて楽しい、そんなまとめをつくらう」と声をかけ、生徒の意欲を引き出す。 【対話的な学び】 まとめたシートを見せ合い、批評し合う。 【深い学び】 他者のまとめと自分のまとめを見比べて、自分のまとめのよい点と足りない点を自覚させる。	<ul style="list-style-type: none"> まとめたシート
4	<ul style="list-style-type: none"> ファッション産業の現状を理解し、問題点を見いだす。 	<ul style="list-style-type: none"> ファッション産業が抱える環境問題について知り、解決すべき問題を見いだすことができる。 【思考力、主体性、多様性】	<ol style="list-style-type: none"> ファストファッションを題材にして、写真や図、動画を見せながら、ファッション産業の現状を説明する。 ①を聞いて気づいたファッション産業の問題点をワークシートに9つ書く。思いつかない場合は、席が近くの生徒と話し合う。 書いた問題点を発表させる。 振り返りシートに自己評価と本時の気づきを記入する。 	【主体的な学び】 ルーブリックを提示して目指す姿をイメージさせ、学習に見通しを持たせる。写真や図、動画を提示するタイミングを工夫し、興味と集中力を持続させる。 【対話的な学び】 生徒の発言を別の言葉で言い換えたり、ほかの発言と関連づけたりして、見方や考え方を広げるきっかけをつくる。 【深い学び】 ビル倒壊の画像から、「なぜ、このようなことが起きたのか？」と問いかね、物事の背景を想像させる。	<ul style="list-style-type: none"> 発言 ノート 振り返りシート（ワークシート）
5	<ul style="list-style-type: none"> 持続可能なファッション産業のあり方について考えをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> SDGsの取り組みについて知り、自らの行動に落とし込んで考えることができる。 【思考力、判断力、主体性、協働性】	<ol style="list-style-type: none"> SDGsの概要を説明する。 前時に出したファッション産業の問題の対応策を個人で考える。 生徒数人を指名して、考えを発表させる。 生徒から出てきた問題について、意見を出し合い、考えを深める。 振り返りシートに自己評価と本時の気づきを記入する。 	【主体的な学び】 気づいたことをワークシートに書き込ませ、具体的な行動に落とし込んで考えられるよう、声をかける。 【対話的な学び】 発言のよい点を褒め、発言を尊重し、否定しない。 【深い学び】 自分の行動に落とし込めるような視点を持った意見になるよう促す。	<ul style="list-style-type: none"> 発言 ノート 振り返りシート（ワークシート）

*長田先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。本時のワークシートと振り返りシートは、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME」→教育情報→高校向け」をご覧ください。

同僚の声



テキスタイル
工学科
齊藤美穂子



材料化学科
大西悠

齊藤 授業の冒頭に、バンクグラデシユで縫製工場が入っていたビルが倒壊した現場の写真を、生徒に見せていました。服を製造する労働者がどのような環境で働かされていたかがひとめで分かる写真に、生徒は見入っていました。長田先生は、生徒を授業に引き込んでいく話題を示すのがとても上手だと思えます。私も、生徒の興味・関心を引きつける授業を目指して、「これを見せたら、きっと関心を持ってくれるだろう」と思える素材を集めています。授業ではつい情報を詰め込みすぎてしまっています。

長田 その点は、私にとっても悩みの種です。知識の習得と思考のバランスの取れた授業にするために、「この授業で、生徒に一番深く考えさせたいこと」を基準にして、学習内容を絞り込むようにしています。

大西 環境に配慮したファッション産業のあり方を生徒に考えさせた際に、「2年生の時に、水を使わない染色の方法を習ったよね？」と既習事項を思い出させていました。生徒が授業で学んできたことを手がかりにしながら、問題解決の方法を考えられるようにしていたのが、印象的でした。

長田 既習事項と結びつけて考えさせることは、常に意識するようにしています。ただ、水を使わない染色技術について、私が指摘するまで生徒は全く思い出せていない様子でした。どうしたら既身に身につけた知識を結びつけて、問題解決の方法を見いだす力を育めるのかも、今後の課題の1つです。

9:40 各自で担当パートを黙読



前時までに読解した評論の前半部分の要旨を振り返った後、後半部分の読解に入った。本時で行ったのは、本文をいくつかのパートに分け、分担して読む「アクティブ・ブック・ダイアログ®」(*)だ。評論の後半部分をA・B・Cと3つのパートに分け、3人1組のグループ内で各パートの読解を分担。まずは各自で5分間、担当パートを黙読した。

授業
ハイライト

●3年生「現代文B」の評論を読解する全5時間うちの5時間目。「人類による環境への影響」の後半を3パートに分け、3人1組のグループ内で各パートの読解を分担。各自が読解した内容を共有し、本文の理解を深めた。(P.39に単元の指導計画を掲載)

主体的・対話的で
深い学びへ

実践
アクティブ・ラーニング

現代文

「内化→外化→内化」のプロセスと、
他者との協働で理解を深め、
主体的に文章に向かう態度を養う

内橋先生のアクティブ・ラーニング

双方向型の教員研修に参加し、
学び合いの意義を実感

「グループワークには当初、懐疑的でした」と語る内橋(うち)先生は、意見を言わなければならぬという義務感が先行して、深く考えずに教科書の言葉を抜き出したり、発言力のある生徒の意見に流されてしまったりするイメージを持っていたと語る。しかし、2015年度に受



兵庫県・私立百合学院中学校・高校

内橋(うち) 朋子(ともこ)

教職歴37年。同校に赴任して38年目。進路指導部長。主幹教諭。国語科。インタラクティブ・ティーチング講座やオンラインの教材作成講座などを受講してスキルを高め、2016年度からアクティブ・ラーニングを実践。

兵庫県・私立百合学院中学校・高校

◎カトリックの精神に基づき、自立した女性の育成を目指す「宗教教育・女子教育・少数者教育」を展開。生徒1人あたり1台のタブレット端末を活用したICT教育やポートフォリオの構築、個別指導の充実など、生徒の力を最大限に引き出す取り組みを行っている。

◎設立 1961(昭和36)年

◎形態 全日制/普通科/女子校

◎生徒数 1学年約80人

◎2020年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、大阪教育大、大阪大、神戸大に3人が合格。私立大は、上智大、京都女子大、立命館大、追手門学院大、大阪芸術大、関西大、関西学院大、甲南女子大、甲南大、神戸女学院大などに延べ88人が合格。

◎URL <http://high.yuri-gakuin.ac.jp>

* 竹ノ内壮太郎氏が開発した読書手法。複数人で1冊の書籍を分担して読み、要約文を作成。それを発表・共有して、気づきを深め、対話をする。そのプロセスを通じて、書籍の内容を深く理解し、能動的な気づきや学びを得ようとする手法。

10:02 パートごとの読解



「人工生態系とは何?」「その速度は、何を指すのだろう?」などと、生徒は疑問を出し合い、議論して、理解を深めた。議論が行き詰まったグループには、内橋先生がまとめ方の例が書かれたノートを提示し、「こんなふうに整理すると分かりやすいよ」といった声をかけた。それを受けて議論が活性化し、「食物連鎖を例にしよう」などと、アイデアが飛び交った。

9:55 パートごとの読解



A・B・Cのパートごとに集まり、難しい語句の意味を調べたり、内容を補足するための具体例を考えたりしながら、担当パートの要旨を協力してまとめていった。授業の後半で元のグループに戻った時に、ほかのパートを担当するメンバーに自分のパートの要旨を分かりやすく説明できるよう、話し合った内容をホワイトボードやノートに書きながら、整理した。

講じた教材作成のオンライン研修で、その意識が変わった。グループワークで参加者が活発に意見交換をし、知見を深め、互いに刺激し合った体験から、学び合いの効果を感じ、授業に取り入れようと考えた。

その後、思考ツールについて学ぶ講座などを受講し、16年度に初めて、アクティブ・ラーニング（以下、AL）の視点を取り入れた授業を実施した。三島由紀夫の『青の時代』の一部を教材としたが、分からない言葉を調べながらも活発に意見を交換し、学び合う生徒の姿に、大きな手応えを感じた。

「それまで私が行っていた一斉授業では、生徒は、教師が出した問いを1人で考えるため、思考が深まらず、間違いを恐れて発言しないことがありました。そうした授業は、学習内容を理解できていない生徒を置き去りにしていたのではないかと反省しました。生徒の学び合う力を引き出し、意欲を持たせることが、学力向上の一步になると考え、ALを実践するようになりました」

思考の活性化・深化への配慮

適切な課題と粘り強い問いかけで、生徒を深い思考に導く

内橋先生が授業で最も重視するのは、「内化↓外化↓内化」のプロセスだ。それは、課題意識を持った上で（内化）他者と話し合うことで

（外化）、多角的な理解につなげることができ、再び内化をすることで思考を深められるからだ。

本時では、評論の読解を「アクティブ・ブック・ダイアログ®（以下、ABD）（*）を用いて行った。進め方は、A・B・Cと3つのパートに分けた本文を、3人1組のグループ内で各パートを分担し、まずは各自で担当のパートを黙読（内化）。次に、A・B・Cのパートごとに集まり、意見を出し合いながら担当パートの読解を深め、要旨を整理した。その後、元のグループに戻って担当パートの要旨を発表し合い（外化）、本文全体の理解を深め、最後に、個人で各パートにタイトルづけを行った（内化）。

内橋先生の授業では、最後の内化の際に、本文の要約を記述させることが多い。それは、本文の内容の理解度を測る上で要約が有効だと考えているからだ。本時における各パートのタイトルづけは、要約に代わる活動として行った。

「最初の内化や外化で表面的な理解にとどまっていたとしても、最後の内化で生徒に適切な課題に取り組ませることで、より深い理解に導くことができると考えています」

また、内橋先生は、生徒に「なぜ」と問いかけ、生徒が思考を深められるようにしている。

「読解力に自信がないという生徒もいますが、全く読解力がなければ、ドラマを見て感動することもありません。文章読解で得点できないのは、語彙の意味を理解できていなかったり、読解したことを表現する力がなかったりするか

10:22 タイトルづけ、授業の振り返り



自分がまとめた担当パートの要旨と、グループのメンバーが発表したほかのパートの要旨を基に、各パートのタイトルを各自で考え、それを振り返りシートに書き込んだ。振り返りシートには、グループワークで気づいたことや自身の成長についても記入し、提出した。

10:15 元のグループで、内容を共有



元のグループに戻り、Aパートから順番に2分間ずつ担当パートの要旨を発表。自分が書いたノートを見せながら説明する生徒もいた。内橋先生は、「自分の担当パートとどう関連しているのかも考えながら発表を聞きましょう」と、聞く際のポイントを提示。聞いた内容を書き留められるよう、30秒ほど間を空けてから、Bパート、Cパートと発表を続けた。

場づくりへの配慮

みんなで整理した要旨だから 自信を持って発表できる

読解力に自信がない生徒でも意欲的に授業に取り組めるよう、内橋先生はペアワークやグループワークを効果的に取り入れている。

「1人で読んでみると、『本文の内容を理解できていないのは、自分だけではないか』と不安になり、授業にも消極的になってしまいます。しかし、他者と対話する時間を設ければ、『みんな、同じように分からないことがあるんだ』と安心できます。そのタイミングで、『もっと読み進めたらヒントがあるかもよ』などと声をかけます。そうすることが、粘り強く読み進める姿勢を養うことにつながると考えています」

本時で行ったABDには、担当パートが同じ者同士が話し合っ要旨を整理することで、「みんなでまとめた」と自信を持って発表できるよ

成果と課題

「自分ならどうするか」答えが 1つではない問いに挑戦させたい

内橋先生が授業にALの視点を取り入れてから、自信を持って自分の意見を述べる生徒が増えた。「内橋先生の授業は、頭をよく使うから疲れるけれど、楽しい」といった声が聞かれるようになるなど、生徒が能動的に授業に参加している様子が見えてくる。

今試みているのは、図や表など、多様な資料を複合的に読み取って意見を述べるような、大で求められる読解力や表現力の育成だ。今後はさらに、答えが1つではない問いに挑戦させたいと、内橋先生は語る。

「現在は、国語が苦手な生徒が読解力を高められるような指導に重点を置いています。今後は、本文を読んだ上で、『自分ならどうするか』といった答えが1つではない問いを出し、生徒の思考力や表現力をより高めていきたいです」

うにするねらいがあった。また、ABDは、大学進学後を見据えて取り入れた活動でもある。

「大学では論文を読んで、自ら世界を広げる学びが求められます。そのため、一見、難しいような文章でもじっくり読み込んだり、他者と協働したりすれば、必ず内容を理解することができるといふ体験を積んでもらい、読解力に自信をつけて卒業してほしいと思っています」

単元の指導計画

【教科・科目】国語・現代文B 【分野・単元】評論 【テーマ・作品】鷲谷いづみ『人類による環境への影響』【設定時数】全5時間の中の5時間目 【単元目標】・主体的に文章に向かう態度を養い、読解に自信が持てる。・本文と対話するように読解することで、内容理解が深まることに気づく。・分担して読むことの利点を知り、今後の学びの姿勢に役立てる。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	各自、段落ごとに分かれた文章を読み、意味段落になるかたまりを予想する	・段落ごとの内容や、段落の相互関係を意識しながら、本文を読むことができる。 【主体性、協働性】	①形式段落に分けた20のパートをバラバラに配布し、複数段落のかたまりの正しい順序を考える。 ②ペアで活動の感想を述べ合う。	【主体的な学び】バラバラの形式段落から、意味段落のかたまりを見つけるというゲーム的な要素を活動に取り入れることで、読解に主体的に向かう姿勢をつくる。 【対話的な学び】活動中に自分の頭の中がどのように動いたか、どのようなことが難しかったかを、ペアで話し合う。	・段落相互の関係を見つけてようとして読んだか。 ・主体的に読んだ体験を自らの言葉で述べられたか。
2	第1段落(意味段落Ⅰ)の読解	・本文を対話的に読む姿勢を身につけることができる。 ・述語→主語→目的語の順に意識して読むことで、修飾が長い文や難解そうに見える文も読解しやすくなると気づく。 【知識、技能、主体性】	①筆者と対話するように「なぜ」「なるほど」と考える「ツッコミ」を本文に対して入れながら、ペアで第1段落を読む。 ②1文ずつ、述語→主語→目的語を意識しながら読む。 ③第1段落の要旨をまとめる。	【主体的な学び】述語→主語→目的語を確認しながら読むことで、文が理解しやすくなることに気づかせ、読解へのモチベーションにつなげる。 【対話的な学び】ペアで本文に「ツッコミ」を入れることで、疑問を持っているのは自分だけではないことに気づく。 【深い学び】「ツッコミ」を入れることで、本文に分からない点があっても、それが今後筆者によって説明されることに気づく。	・段落相互のワークシートに「ツッコミ」が記入できているか。 ・第1段落の要旨をまとめることができたか。
3	第2段落(意味段落Ⅰ)の読解	・主語、述語を意識しながら本文を読解し、要旨をまとめることができる。 ・文の関係に注意し、主語、述語の短い文で筆者が最も伝えたい内容を言い表すことができる。 【知識、技能、思考力、表現力、主体性】	①第2段落を述語→主語→目的語と意識しながら読む。 ②文相互の関係を確認し、筆者が最も伝えたい内容を主語、述語の短い文で書く。 ③②の文に必要なことを追加しながら、要旨をまとめる。	【主体的な学び】前時に学習したように、述語→主語→目的語を意識して読むように促す。	・第2段落の要旨をまとめることができたか。
4	第3～7段落(意味段落Ⅱ)の読解	・2・3時間目に学習した方法で第3～7段落を読解し、二項対立に気づくことができる。 【知識、技能、主体性、協働性】	①3～4人のグループとなり、前時までに学んだ読み方で、第3～7段落を読解する。 ②ワークシートに、「共生型戦略」「征服型戦略」の内容をまとめる。	【主体的な学び】前時までに学習した読み方で、各自が内容を把握し、それを述べる。 【対話的な学び】互いの考えを話し合うことができているか観察する。分からない点は、メンバーに質問するよう促す。	・ワークシートに適切に記入できているか。
5	第8～20段落(意味段落Ⅲ～Ⅴ)の読解	・第8～20段落をグループ内で分担して読解し、ほかのメンバーの発表を聞いて、担当パートとの関連性を考えることができる。 【知識、技能、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性】	①3人グループとなり、第8～20段落における3つの意味段落を分担して読む。 ②同じ担当パートの生徒3～4人が集まり、疑問を出し合いながら内容理解を深める。 ③①のグループに戻り、担当パートの要旨を発表する。 ④個人で3つのパートそれぞれにタイトルをつける。	【主体的な学び】担当パートの要旨をほかのメンバーに自信を持って発表できるよう、同じ担当パートの生徒同士で相談できる場を設ける。 【対話的な学び】同じ担当パートの生徒同士でグループワークを行い、発表方法を相談し合う場を設ける。不安な場合は、他者のまねをしてもよいと声をかける。 【深い学び】自分の担当パートと、ほかのメンバーの担当パートの関連性に着目させる。	・振り返りシートへの記述から以下を確認。 1 文章の読解に自信を持てたか。 2 筆者と対話するように本文を読解できたか。 3 自分の担当パートとほかのメンバーの担当パートの関連性について考え、内容が理解できたか。

*内橋先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。

友藤 生徒が難解な文章を意欲的に読解する姿に頼もしさを感じました。元のグループでの発表も堂々としており、聞く態度も熱心でした。1コマの中で読解から発表まで行ったことで、生徒は自信をつけたでしょう。また、議論が停滞した際、内橋先生がまとめ方の見本となるノートを見せたのもよかったです。生徒は具体的なヒントを基に軌道修正ができていました。

内橋 実は、活動の手順を説明する際にノートを準備する予定でしたが、それを忘れてしまったのです。議論が行き詰まっているのを見て慌てて見せたのですが、結果的には、生徒が試行錯誤する機会を担保し、タイミングよくヒントを出せて、活動をよい方向に導くことができました。

杉本 教師が一方的に話す授業では、話を聞いてただで理解した気になって終わる生徒もいます。その点、生徒主体のグループワークが中心の内橋先生の授業では、自分が動かなければ活動が成立しないといった責任感が、生徒の能動的な学習姿勢につながっています。そこに仲間と学ぶ意義の1つがあると実感しました。「難解な文章だから読めない」といった後ろ向きな姿勢も見られず、「自分も読解できる」という自信が一人ひとりの根底にあったと思います。

内橋 グループワークを通じて、生徒は互いの異なるものの見方に気づき、自らの考えが広がり、深まったりすることを実感していきます。それが、互いを認め合う人間関係の構築につながり、A.Lを活性化させるといった好循環を生むと感じています。

同僚の声



友藤 ともこ
国語科



杉本 優芽
国語科

北海道札幌北高校
探究学習

探究学習の手法を採り入れて
教育活動を充実させ、
自立した学習者を育成

変革のステップ

背景と課題

- 生徒の学習姿勢が受け身で、自分で学びを設計する力に課題があった。加えて、コミュニケーション能力に不安がある生徒が少なかった

実践内容

- 「自立した学習者」を1学年の目標に設定 2020年度の1学年では、学年目標を「自立した学習者」とし、学年集会や学年通信を通じて、「自ら課題を見つけ」「問いを立て」「課題を解決する」ことの大切さを生徒に伝え続ける
- 探究学習の充実 「総合的な探究の時間」で行う探究学習では、課題発見力や課題解決力などの育成を目指し、活動を行う
- 道徳教育の推進 対話を重視した道徳教育をスタート。ICTを活用して生徒の内面の変容を可視化することで、成果を生徒と教師の間で共有

成果と展望

- 講演会で講師への質問が増えるなど、課題発見力が高まる。家庭での学習習慣が定着した生徒が増加
- 今後は、3年間の教育活動の計画に育成を目指す資質・能力をひもづけ、各活動のねらいをより明確にする

PROFILE



北海道庁立札幌高等女学校として開校。校訓は、「寛容・進取・良識」。ポートフォリオの活用、育成を目指す資質・能力の策定などにより、指導改善を推進。海外短期研修など、国際理解教育にも力を入れている。

設立	1902 (明治 35) 年
形態	全日制・定時制/普通科/共学
生徒数	1 学年約 320 人 (全日制)

2020 年度入試合格実績 (現浪計) 国公立大は、旭川医科大、北海道大、東北大、東京工業大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、札幌医科大などに 283 人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ 287 人が合格。

住所	〒001-0025 北海道札幌市北区北 25 条西 11
電話	011-736-3191
Web site	http://www.sapporokita.hokkaido-c.ed.jp

資質・能力を育成する必要性への理解が
A-L の実践研究を機に深まる

道内有数の伝統校である北海道札幌北高校は、生徒の希望進路の実現という従来の目標はそのままに、探究学習の充実、育成を目指す資質・能力の策定など、新学習指導要領に基づいた教育活動へと変革を加速させている。その第一歩となったのが、2016年度、文部科学省の研究指定(*1)を受けて行ったアクティブ・ラーニング(以下、A-L)の視点の授業改善だった。1学年主任の中道洋友先生は、その実践研究が教師の意識を変化させたと振り返る。

「A-Lの視点を取り入れた授業は、本校が行ってきた教科指導を否定するものではない」

*1 文部科学省「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」。

く、大学入試改革の動向や近年の各大学の出題傾向に鑑みると、むしろ、希望進路の実現という目標達成のために背中を押すものだと分かりました。実践研究を通じて、新学習指導要領で示された資質・能力を育成する必要への理解が、学校全体で深まりました」

18年度には、全教師参加のワークショップを実施し、5～6人のグループで出した意見を教務部が集約して、自校で育成を目指す16の資質・能力を策定した(図1)。

「本校は、ここ数年で教師の顔触れが大きく変わり、先輩教師から受け継いできたよき伝統を次代に継承する必要があります。そ



教育相談部、道徳教育推進教師

亀谷千代仁 かめや・ちよひと

教職歴37年。同校に赴任して15年目。理科(化学)。「この高校生も皆同じ。いつ学びの大切さに気づくかで、将来は異なる」

1学年主任

中道洋友 なかみち・ようゆう

教職歴29年。同校に赴任して14年目。理科(物理)。「不思議を探そう。始まれば終わるとりあえず前へ」

総務部

前田健太郎 まえだ・けんたろう

教職歴23年。同校に赴任して4年目。情報科。「経験だけでなく、データから課題を見つけて改善する」

進路指導部

鈴木伸也 すずき・しんや

教職歴18年。同校に赴任して3年目。数学科。「生徒とともに日々成長する」

図1 育成を目指す16の資質・能力

<p>① [知識及び技能]の習得 何を理解しているか、何ができるか</p>	<ul style="list-style-type: none"> 各教科の知識・技能 異文化の理解 多様性の理解 傾聴する技能 コミュニケーションの技能 情報を扱う技能
<p>② [思考力・判断力・表現力等]の育成 理解していることをどう使うか</p>	<ul style="list-style-type: none"> 論理的・批判的・創造的思考力 課題を発見・解決する力 情報を分析・判断する力 表現する力
<p>③ [学びに向かう力・人間性等]の涵養 どのように社会・世界とかわり、よりよい人生を送るか</p>	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に実践する力 自己を理解し管理する力 他者と協働する力 社会を多角的に見る力 責任感 健康を保持・増進する力

* 学校資料を基に編集部で作成。

うした状況の中で実施したワークショップは、本校が大切にしてきた教育観を教師間で再確認する場になりました。育成を目指す資質・能力が明確になったため、教育活動の新規計画や見直しの際にも、目標の設定や、共有・浸透がスムーズに進むようになりました」(中道先生)

オンラインで行った発表会の見学振り返りの充実で気づきを促す

20年度の1学年では、「自立した学習者」を目標に掲げた。

「本校には、中学校時代まで受け身の学習をしてきた生徒が少なからずいて、自分で学びを設計する力に課題がありました。目標で掲げた『自立』とは、『自ら課題を見つけ』

『問いを立て』『課題を解決する』ことであり、16の『資質・能力』の中に位置づけられています」(中道先生)

学年集会や学年通信では、例えば、学校行事のどの場面が自立につながるのか、取り組む際にはどういった心構えが必要なのかを説明。さらに、取り組みを自分事として捉えられるよう、「行事に没頭できたが、こんな反省点があった」といった生徒の声も盛り込むようにした。

そして、17年度に中道先生が学年主任を務めた2学年でスタートさせた探究学習を、資質・能力の育成を意識した活動へと進化させた。「総合的な探究の時間」(以下、総合探究)で行われる探究学習は、1学年では、生徒が4～6人ずつの班となり、各班でテーマを決めて調査研究に取り組み、2月にポスター発表を行う。

20年度は、先輩の研究を手本にもしてもらおうと、12月に体育館で行われる2年生のポスター発表会を、1年生にも見学させる計画を立てていた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、発表会の2週間前に見学の方法を再検討。2年生の約80班の中から事前に研究内容の質が高い2班に絞り、体育館で行うその2班の発表をオンライン会議ツールで各教室に同時配信し、1年生はスクリーン越しに視聴した。

「生徒は大きな画面に見入り、発表を集中して聞いていました。教室間の移動がなく、振り返りに多くの時間を充てられたことはメリットだったと感じています。その場で質疑

応答ができないという問題はありましたが、振り返りシートに『自分が質問するしたら』という項目を設け、疑問点を挙げさせました。自分なりに疑問点を出し、気づきを得るという体験の積み重ねが、『課題発見力』や『問いを立てる力』につながると期待しています（中道先生）

そうした生徒の批判的思考力などを数値で把握するため、「GPS-Academic」（*2）を年1回実施。学年通信でも思考力の重要性を解説し、生徒に帳票を熟読させている。

「生徒には、論理的・批判的に物事を捉える力が問題発見につながると伝えています。20年度の帳票返却時には、協働的思考力の大切さを実感させようと、チーム・ビルディングのためのゲーム『マッシュマロチャレンジ』（*3）を行いました。思考力の大切さを理解すれば、探究学習に取り組む意欲も高まると考えています」（中道先生）

ワールドカフェを導入した道徳学習で対話と多様性の大切さを知る

20年度の1学年では、思考力や協働性の育成の一環として道徳教育にも力を入れている。19年度、亀谷千代仁先生を中心に、道徳の研究会に参加するなどして実践のあり方を模索。道徳教育の目的である道徳的判断力や心情、実践意欲・態度を養うためには、物事の本質や価値、あり方を論理的に明らかにする探究

学習の方法が有効と考え、総合探究で行うことにした。道徳教育を探究学習に融合させるために採り入れたのが、ワールドカフェ（*4）だ。

「本校には、中学校時代に周囲に遠慮して自分の意見が言えなかった経験があるなど、他者とのコミュニケーションに不安を持つ生徒が少なくありません。そこで、ワールドカフェを導入することで安心・安全の場をつくり、答えが1つではないテーマについて考えを出し合う活動を通じて、自身の思考を深めるとともに、仲間とのコミュニケーションに自信を持てるようになることを目指しました。また、その過程で、対話の醍醐味を感じてもらおうことを期待しました」（亀谷先生）

20年11月には、「新渡戸稲造の生涯を知り、自身の人生観・世界観・価値観を見つめる」をテーマとした道徳の学習を行った。事前に新渡戸の人生と国際貢献についてまとめた資料を読み、ワールドカフェ形式でグループのメンバーを替えながら語り合った。

「クラスメートと政治や哲学などの切り口から話をしたくてもできなかった生徒や、考えが他者と違うことに悩んでいた生徒も、自

図2 道徳の学習のワークシート（抜粋）

1 新渡戸稲造の人生を学び自分の人生観、世界観、価値観を見つめてみよう				
	道徳的心情	道徳的判断力	道徳的実践意欲と態度	自己理解
授業前	どのよきな感動や気持ちを持ちましたか。	どのよきな考えを持ちましたか。	自分のよきな人生観や世界観を教えてください。	自分のよきな価値観を教えてください。
授業中	どのよきな感動や気持ちを持ちましたか。	どのよきな考えを持ちましたか。	自分のよきな人生観や世界観を教えてください。	自分のよきな価値観を教えてください。
授業後	最終の話を聞いて、感動や気持ちにどのような変化が生じましたか。	最終の話を聞いて、自分の考えや自分のよきな価値観にどのような変化が生じましたか。	最終の話を聞いて、人生観や世界観にどのような変化が生じましたか。	最終の話を聞いて、自分のよきな価値観にどのような変化が生じましたか。

「道徳的心情」「道徳的判断力」「道徳的実践意欲と態度」「自己理解」「他者理解」の5項目について、授業前（資料を読んだ後）・授業中・授業後（授業の数日後）に自身が考えたことや感じたことを書き込んだ。
* 学校資料を一部改訂・抜粋して掲載。

分の考えを堂々と発言する経験によって自信をつけることができたようです。また、同じ学校に通う生徒でも、考えは多様であることを実感したと思います。ワークシートには、『人生の意義を学べた』『初めて自分の考えが深まり、よい方向に変わっていくことを感じた』といった感想が書かれており、道徳教育の目的である内面的資質の変容を実感している様子が見られました」（亀谷先生）

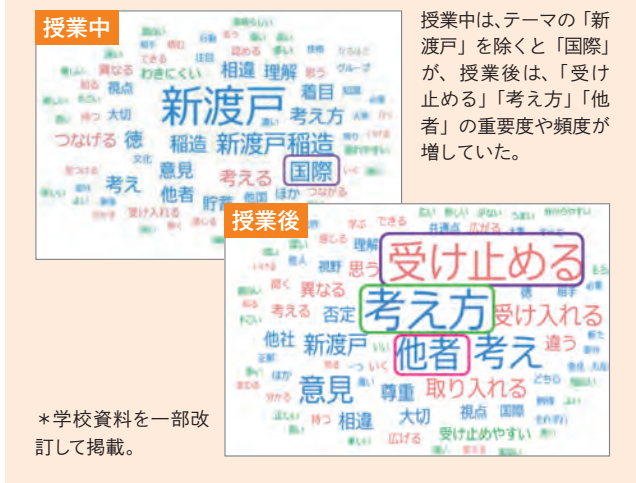
テキストマイニングで生徒の内面の質的変容を可視化

今回の道徳の学習では、生徒の内面的変容をICTを活用して可視化した。生徒は、授業前・

*2 ベネッセのアセスメントの1つで、問題発見・解決に必要な3つの思考力（批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力）を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。 *3 マッシュマロと乾燥パスタを使ってタワーを作るチーム・ビルディングの手法。 *4 話し合いの手法の1つ。参加者が小グループに分かれて話し合った後、指定の時間になったら各グループ1人を除いて、新しいグループを構成し、同じテーマで話し合う。その際、残った1人が前のグループで話し合った内容を新たなグループのメンバーと共有する。そうした活動を繰り返し、最後に元のグループに戻って、それぞれが話し合ってきた内容を共有する。

図3

「自己理解」のテキストマイニングの結果



授業中・授業後の各段階における道徳的心情（自分の気持ち）、道徳的判断力（自分の考え）などを、ワークシート（図2）に記入。そのテキストを「情報」の授業で、共同研究をしている「Classi」（*5）に入力させて、タグクラウド機能（*6）でテキストマイニングによる分析を行った。その結果として、単語の重要度（文章の特徴を表す単語）と出現頻度（単語の使用数）が文字の大きさで表された（図3）。

さらに、亀谷先生が作成する道徳教育の補助教材「ML通信」で、授業前・授業中・授業後に出現した単語の変化を、生徒のワークシートにコメントとともに紹介した。亀谷先生とともにデータ分析を担当した、情報科の前田健太郎先

生は、次のように語る。

「例えば、道徳的心情を見ると、授業前では『感動』が目立っていたのに対して、授業中は『徳』『貯蓄』などの単語が現れていました。それは、『感動しました』といった漠然とした記述から、『徳の貯蓄が備わってこそ、自分のやりたいことができる』『徳の貯蓄は、目に見えないが重要である』などと、自分が考えたことを表すコメントへと変容していったためです。生徒の考えを言語化し、時系列で記録させることで、学習過程による内面の変化を追うことができ、思考の深化や新しい視点の獲得など、学びの成果が可視化されました。それによって、生徒と教師の間で成果が共有しやすくなったことは、大きな意義があると思っています」

伝統的な進路学習にも 探究学習の手法を採り入れる

同校は、長年継続してきた進路学習の改善にも力を入れている。90年代半ばから続く「AGE16」は、将来への視野を広げて進路意識を高めるとともに、進路情報の収集方法を身につけることを目的とし、1年生が夏季休業中に大学・学部・学科調べを行い、レポートにまとめる取り組みだ。それを探究学習の一環に位置づけて進化させた。進路指導部の鈴木伸也先生は、改善点を次のように語る。

「個人ワークに加えて、4〜5人のグルー

プでレポートを見せ合う相互評価と、各グループの代表者がクラスで発表する活動を行い、思考力や表現力、協働性の育成にもつなげています。伝統を受け継ぎつつ、時代の要請に応じて活動を変化させていくことが、形骸化を防ぐためにも大切だと考えています」

20年度の1学年が入学してから約1年が経った。臨時休業や学校行事の中止などを乗り越えて、生徒は大きく成長している。例えば、20年12月に総合探究で行われた外部講師による職業講話「プロフェッショナル講座」では、以前に比べて、生徒から講師への質問数が増え、社会問題に迫る質問も見られた。漫然と話を聞くのではなく、課題意識を持ち、批判的な視点で講師の話をつまえているからこそ、そうした質問ができるようになったのだろう。

また、家庭での学習習慣が定着している生徒が多く、生徒のアンケートでは、「計画的に学習できた」「うまくいかなかった時にも計画を修正できた」といった回答が増加傾向にあるという。

今後の課題は、16の資質・能力を3年間の教育活動の計画に落とし込むことだ。各活動と16の資質・能力の関係を明確にすることで、活動の質を高めたいと、中道先生は語る。

「卒業までの2年間、教科指導や学校行事など、生徒の成長につながる場面を16の資質・能力とひもづけながら、できるだけ多く設けていきたいと考えています」

*5 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。
*6 コンテンツの属性や内容を表すタグ（目印となるキーワード）を集め、一覧表示したもの。

校内の教師同士による対話を通して、自校の指導ツールの改良を図る本コーナー。
今号は、秋田県立能代松陽高校が2年次に実施するインターンシップの
報告書について検討した。

Before

～インターンシップ報告書～

2年 組 番氏名

○実習場所: _____

○期 間: ____月 ____日() ~ ____月 ____日()

○希望した理由

○インターンシップで学びたかったこと

○実習内容(どのような仕事をおこなったのか)

○事前指導で学んだことが、実習でどのように役だったのか

○実習で指導されたこと(アドバイスされたことなど)

○実習で何を学び、これからの学校生活でどのように生かしていきたいと思っていますか

- 6 -

生徒は、実習の前に、参加を希望する理由などを「個人カード」に、インターンシップ中は実習先での活動内容などを「インターンシップの記録」という名称の日報に記入し、インターンシップ後にこの報告書をまとめる。

改良会議実施校

秋田県立 能代松陽高校



進路指導主事
吉田英亮
よしだ・ひであき

教職歴 22 年。同校に赴任して 1 年目。



進路指導部・教務部
佐々木隆介
ささき・りゅうすけ

教職歴 11 年。同校に赴任して 8 年目。



進路指導部・教務部
夏井修一
なつい・しゅういち

教職歴 9 年。同校に赴任して 6 年目。

ねらい

同校では、2年生の希望者が夏季休業中にインターンシップに参加。キャリア観を深め、進路選択に生かせるように、報告書では、実習を通じての学びや気づきを整理させる。3年次の志望理由書や自己PR書の作成などにもつながる振り返りを行わせることがねらい。

課題

- ① その後の進路選択につながるよう、目的や課題意識を持たせた上で、生徒をインターンシップに臨ませたい。
- ② 学校が育成を目指す3つの資質・能力を意識させた上で、実習に臨ませたい。

秋田県立能代松陽高校

◎秋田県立能代北高校と能代市立能代商業高校が統合し、開校。グローバルな視野で未来を切り拓く力を持つ人間の育成を目指し、自分の考えを整理し、相手に分かりやすく伝える力、調査・研究したことをまとめ、整理して効果的に発表する力を育む教育活動を展開する。

◎設立 2013(平成25)年

◎形態 全日制/普通科・国際コミュニケーション科・情報ビジネス科/共学

◎生徒数 1学年:約210人

◎2020年度進路実績(現役のみ) 国公立大は、弘前大、秋田大、山形大、青森公立大などに15人が合格。私立大は、仙台大、日本女子大、日本大などに延べ38人が合格。短大、専門学校進学85人。就職73人。

◎URL <http://www.noshiroshoyo-h.akita-pref.ed.jp/>

2年生 インターンシップ報告書

After

改良ポイント

- ① 目的や課題意識を明確にしてインターンシップに参加できるよう、参加前に業界の課題などを調べ、実習先で実態を確認させる。
- ② 育成を目指す資質・能力について、インターンシップ参加の前後で考える問いを加える。



インターンシップ報告書 2年 組 番 氏名 _____ 実習先 _____
 期間 月 日() ~ 月 日()

インターンシップ参加前の記録	インターンシップ参加後の記録
①実習先の業界が抱えている課題、今後発展が期待される事柄は何か _____ ②①の課題に対して、または今後さらに発展していくために、その業界が取り組んでいることは何か _____ ③あなたが社会に出た時、仕事を通して感じたいやりがいや喜びは何か _____ ④能代松陽高校が育成を目指す「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの力を、今、あなたはどれくらい身につけているか、5点満点で自己評価しよう 前に踏み出す力—①②③④⑤ 考え抜く力 —①②③④⑤ チームで働く力—①②③④⑤ ■まとめの問い インターンシップで学んだこと。今後の高校生活で生かしたいと思うこと _____	①実習先の業界が抱えている課題、今後発展が期待される事柄に、業界や実習先は具体的にどのように取り組んでいたか _____ ②①の取り組みを見て、「もっとこうすればよいのではないか」など、気がついたことは何か _____ ③参加前の記録の③で記した「あなたが仕事を通して感じたいやりがいや喜び」を得るためには、実習先ではどんな働き方をすればよいか _____ ④能代松陽高校が育成を目指す「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの力を、あなたはどれくらい身につけているか、インターンシップでの経験を踏まえて、5点満点で自己評価しよう 前に踏み出す力—①②③④⑤ (理由 _____) 考え抜く力 —①②③④⑤ (理由 _____) チームで働く力—①②③④⑤ (理由 _____) インターンシップを通じて、進路について考えたこと _____

実習先の課題や展望を事前に調べておき、実態を実習先で確認するようにする。

実習先で経験したことを書くだけでなく、自分なりの気づきや提案を書かせるようにする。

学校として育成を目指す資質・能力について、インターンシップの前後で自己評価させ、自己理解を深めさせる。



インターンシップを、生徒が「仮説→検証」を経験する機会とするために、事前指導を手厚くしたいと考えていました。しかし、2年生の夏季休業前は行事も多く、さらに時間を割くことは難しい状況でした。改良した報告書を早めに生徒に提示し、取り組ませることで、事前指導の補完になると思いました。



今後は、改良した報告書をICTと連動させたいです。生徒は学習時間の管理をClassi(*)で行っていますが、そうした日々の記録と、インターンシップ報告書のような節目の記録を一元管理することで、生徒は日々の学習と進路意識を関連づけて高校生活のPDCAサイクルを回すことができるでしょう。



従来の事前学習はマナー講座などがメインで、インターンシップの目的や、就業体験を通して探究する具体的なテーマを考える時間が十分ではありませんでした。今回の改良で、生徒は実習で何を学ぶのかを明確にして活動に臨み、実習後には目的の達成度合いを振り返ることができるのではないのでしょうか。

* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け → 生徒指導・進路指導ツール集」をご覧ください。

実 録

改良会議

先生方の
対話のダイジェスト

インターンシップの目的を あらかじめ生徒に言語化させ、 資質・能力の自己評価の機会にする

実習先の業界が抱える課題を事前に考えさせる

河野 現状の報告書の問題点を整理したいと思います。生徒は報告書にどんなことを書いていますか。

佐々木 多い年は学年の3分の2程度の生徒がインターンシップへの参加を希望しますが、「参加するなからこの仕事が面白そう」といった程度の動機しかない生徒も多いです。そうした生徒は、報告書でも「仕事は大変そうだったけれど、やりがいもありそう」と、どの仕事でも言えそうな感想しか書けません。

夏井 目的がないままでの参加では、気づきや発見が得られにくく、報告書の内容は希薄になり、せっかくの経験が後の進路選択につながりません。3年生になって推薦入試の志望理由書などを書く際、インターンシップの経験を交えて書くようにアドバイスすることがありますが、そこでの学びを今の自己や将来の目標と結びつけるのが難しいようです。

吉田 生徒の中で、インターンシップが単発の活動になっているのが課題です。高校3年間で自分ほどのように成長していくべきかを考え、その過程の中のインターンシップの意義を自覚させたいです。

本校は、育成を目指す資質・能力として、経済産業省の「社会人基礎力」の「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの資質・能力を掲げていますので、それらも強く意識させたいです。

河野 生徒一人ひとりが自分なりの目的意識を持ってインターンシップに参加するようになるためには、どのような仕組みが必要でしょうか。

佐々木 なぜ目的意識を持っていないかと言うと、生徒たちは社会についての知識が乏しく、実習先がどんな社会貢献をしているのか、理解が不十分だからだと考えています。

吉田 前任校でもインターンシップを実施していましたが、参加後に生徒に、「あなたが就業体験した業界は、どんな課題を抱えていた?」「それにどう向き合っていた?」と聞いても、なかなか答えられませんでした。事前に業界の課題などを調べることを通じて、実習中に確かめたいことをあらかじめ考えさせたいですね。

夏井 活動を具体的に示すとまじめに取り組むのは、本校の生徒の長所です。業界の課題を調べておき、実習先がその課題に対して具体的にどのような



改良会議を振り返って



先生方との対話を通じて、自分の中の課題感が具体的にになっていきました。そうした自分の内面を整理する心地よさを、生徒にも体験させる対話の機会を設けたいと思いました。



生徒に変化を求めたのであれば、まず教師が変わるべきです。以前からある教育活動を、資質・能力の育成という文脈で捉え直した今回の機会を、私たちの変化の契機にしたいです。



学校を活性化させていくには、中堅・若手の活躍が必須です。今回の対話の場を、インターシシップ報告書の改良にとどめず、若い先生方も含め、学校全体で動き始める機会としたいです。

河野 学校が育成を目指す資質・能力として掲げる3つの力からも考えたいと思います。どのようになれば、生徒たちは3つの力について、インターシシップと関連づけて考えやすくなるでしょうか。

佐々木 自分は3つの力をどれくらい備えていると思うか、インターシシップの事前事後に自己評価させるとよいと思います。そして、3つの力をそれぞれ自分ほどのくらい備えているかを問うだけでなく、インターシシップのどのような経験がその評価につながったのか、理由まで聞くことを事前に生徒

3年間の教育活動の文脈を生徒に自覚させる

ことに取り組んでいるのかを現場で見てくださいと指示することで、参加の姿勢が変わりそうです。生徒が事前に調べたことを実習先に伝えておくことは、先方の受け入れ準備にもつながります。

に示すことで、育成を目指す資質・能力を意識して実習に臨めるようになると思います。

夏井 将来的には、3つの力のルーブリックを作成し、それを踏まえて生徒にインターシシップを通じて自己理解を求めたいですね。そうすれば、実習が外の世界を知る機会になるだけでなく、自分に対する評価軸をつくる機会にもなります。「この業界で働き、社会貢献するために、高校でこの資質・能力を伸ばしたい」と語れるようにしてあげたいです。

吉田 高校生活のどのような教育活動を通じて、どの資質・能力を育むのかといった本校としてのグラウンドデザインを描き、それを教師と生徒が理解することが重要です。そうすれば、どんな目的でインターシシップに参加するのか、そこで学んだことをその後の活動にどうつなげていくのか、生徒は俯瞰的に語れるようになるでしょう。報告書の改良を、そうした大きな改革の一步につなげたいです。



改良会議ファシリテーター



VIEW21編集部
高次領域担当責任者
河野仙一
この・せんいち

先生方が感じられている生徒の課題と理想を語り合う中で、「自主」「創造」「協働」という校訓に話が及んだことが印象的でした。その校訓に描かれる生徒像を育成すべく、教育活動全体を俯瞰して、改めてインターシシップの活動のねらいを整理した今回の改良会議は、部分と全体が響き合う、カリキュラム・マネジメントの実践の1つの形であったと思います。

2015年に連載を開始した本コーナーは、今号でいったんの終幕となります。幕間に、ぜひバックナンバーをご覧くださいと思います。ウェブサイトに、これまで改良会議で作成してきた指導ツールを、加工可能な形式でダウンロードできるように、活用時期にまとめています。

検討を経て磨かれた指導ツールを提供することだけでなく、その完成に至るまでに交わられた先生方の対話の内容も、自校での指導ツール検討の参考にしていただきたいというのが、本コーナーのねらいでもありました。ぜひ、記事本文をご参照いただきまして、自校でも指導ツールの改良会議を実践していただければ幸いです。そしていつの日か、その対話の様子を取材させていただきます。

生徒指導・進路指導上、活用できる指導ツールを、加工可能な形式でダウンロードできます。



「生徒指導・進路指導ツール集」
https://berd.benesse.jp/magazine/kou/dwdata/data_kou.php

トレンド・ワード

グローバル化

生徒の学びや進路選択、そしてその後の人生に影響を与えるような革新的な技術や価値観を「社会のトレンド」として、「暮らす」「働く」「学ぶ」の観点から解説する本コーナー。今回は「グローバル化」を取り上げる。海外の製品やサービスが身近になり、街で外国人をよく見かけるようになって久しいが、今後、グローバル化はどのように進み、私たちにどういった影響をもたらすのか。そして、グローバルに活躍するためには、どのような資質・能力が求められるのか。グローバル化における企業の人材について研究する早稲田大学政治経済学術院の白木三秀教授に話を聞いた。

サマリー

資本主義や自由主義の広がり、そして技術の進化を背景に、国境を越えた結びつきが緊密化

グローバル化の恩恵の裏に解決が難しい問題が山積

グローバル化とは、人や商品、資本、情報などの様々な分野で、国や地域の垣根を超えた移動が活発化し、世界の結びつきが深まる現象を指す。その先駆けは、15世紀に始まった大航海時代と言われ、18世紀の産業革命以降に拡大

したという考え方が一般的だ。

グローバル化の進展について、早稲田大学政治経済学術院の白木三秀教授は、次のように説明する。

「グローバル化は、20世紀後半の通信や輸送、交通にかかわる技術の急速な進化と密接に関係しています。資本主義や自由主義の下、国際的な自由競争や規制緩和の推進を背景に、人やモノの移動コス

トが大幅に下がりました。昨今は、インターネットを介して瞬時に情報が行き来するようになり、グローバル化の進展はさらに加速しています」

グローバル化の恩恵として、資本や技術の流入により新興国が台頭し、国際分業が進んで世界全体が豊かになることなどが挙げられる。労働力が安価な新興国で商品

図1 グローバル化の利点と課題

利点	<ul style="list-style-type: none"> ◎資本や技術の流入による新興国の台頭 ◎国際分業が進み、世界全体が豊かになる ◎高品質の製品が低価格で入手できるようになる ◎異なる文化が出合うことによる新たな価値の創出
課題	<ul style="list-style-type: none"> ◎国際競争の激化 ◎技術や優秀な人材の流出 ◎(主に先進国)産業の空洞化 ◎(主に先進国)労働者の賃金低下 ◎(主に先進国)失業率の上昇 ◎文化間での衝突、文化の消滅 ◎環境問題の悪化 ◎感染症の流行

*白木教授への取材を基に編集部で作成。

解説者

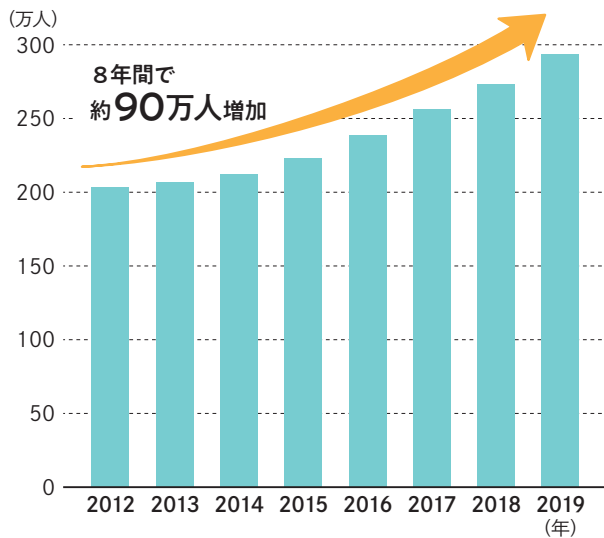


早稲田大学
 政治経済学術院 教授
 トランスナショナルHRM
 研究所 所長

白木三秀
 しらき・みつひで

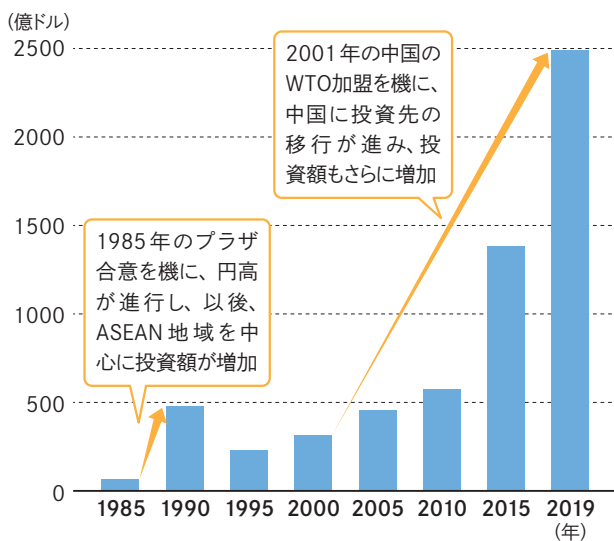
国士舘大学政経学部教授などを経て、現職。専門は人的資源管理。著書に『英語de人事 日英対訳による実践的人事』（文真堂、2020年）、『グローバル・マネジャーの育成と評価』（早稲田大学出版部、2014年）など。

図2 在留外国人数の推移



* 出入国在留管理庁「令和元年末現在における在留外国人数に関する公表資料」を基に編集部で作成。

図3 日本の対外直接投資の推移



* 日本貿易振興機構「直接投資統計資料」を基に編集部で作成。

を製造することで、企業には増収、消費者には安価な商品が手に入るといった利点がある。一方で、国によっては産業の空洞化が進み、失業や賃金低下を招いている。自然環境の破壊や感染症の流行など、各国の協調が求められる問題も深刻化している(図1)。

日本企業で進む海外投資 増える外国人従業員

日本でも、海外の製品やサービスがあふれ、街では多様な国籍の人々が行き来している(図2)。

企業も、海外における売上比率を伸ばしたり、海外に生産拠点を設けたりしている。日本のグローバル化を示すデータの1つが、企業が海外で事業活動を行う投資である「対外直接投資」の推移だ(図3)。

「日本では、1985年のプラザ合意以降、急速に進んだ円高を背景に、ASEAN地域への投資額が膨らみました。そして、2001年の中国のWTO加盟を機に、中国に投資先の移行が進み、投資額もさらに増加しました。日

本企業の海外進出に伴い、従業員の多国籍化が進み、日本の企業でも、外国人と一緒に働くことは珍しくなくなっています」

世界の同質化が進む中で、 地域の独自性を見直す動きも

グローバル化は、経済や社会、文化などの様々な領域に見られるが、それらは連動しながら進行している。例えば、経済のグローバル化によって外食チェーン企業が世界展開すると、食文化のグローバル化が進んでいく。グローバル

化は、世界の同質化を推し進める半面、それぞれの国や地域の独自性を際立たせる一面もある。

「グローバル化によってアイデンティティーが失われるわけではなく、逆に独自性が世界から認められるケースも少なくありません。例えば、日本発のアニメやゲームが世界を席巻しているのは、その典型と言えます」

現在は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、国際間の人やモノの動きは停滞している。しかし、それは一時的なものであり、既に世界中の企業が多国籍化している今、グローバル化の流れは変わらないと、白木教授は指摘する。「人の移動が制限されても、私たちはオンライン会議システムを活用して交流しています。その時々問題は、新たな技術や手法の開発によって解決されていくと考えられます」

●次ページからは、「暮らす」「働く」「学ぶ」の3つの切り口で、グローバル化による、社会や生活の変化を具体的に見ていく。

暮らす

生活が便利で快適になる半面、特有の課題も

世界各国で事業展開する企業が
増えれば、国際競争を通じて企業
の商品・サービスは磨かれていき、
生活は便利で快適になっていく。

「私たちは既に、インターネット
の検索サービスや映画・音楽の
サブスクリプションサービス（*
1）、通販サイトなどを、それら
がどの国の企業のサービスかをさ
ほど意識せずに利用しているはず
です。日本にいながら、海外企業
のサービスを利用していることも
多いのです。それらの企業は、世
界中の広範な対象から利益を少し
ずつ集める仕組みを構築し、安価
にサービスを提供できる強みがあ
り、消費者を引きつけています」

さらに、私たちの身の回りには、
海外で製造された商品があふれて
いる。その背景には、人件費が安
価な国で生産し、輸入する仕組み
がある。

「日本企業は、これまで中国に
生産拠点を置く場合が多かったの

ですが、ここ数年、人件費がより
安いベトナムなどに移行しつつあ
ります。品質の高い商品を安価に
入手できるのは、消費者にとって
魅力的ですが、その半面、国内の
産業の空洞化や賃金の低下、失業
率の上昇などの問題につながる可
能性もあります」

また、インターネットによって、
情報が瞬時に世界中に伝わるよう
になった結果、海外の出来事が私
たちの生活に大きな影響を及ぼす
ようにもなっている。その典型は、
情報通信技術の進歩などによって
もたらされた金融市場のグローバ
ル化だ。1つの国での出来事が、
世界中を金融危機にさらす可能性
が高まっている。

「今後日本は、世界各国の事
象から直接的・間接的に影響を受
け続けるでしょう。そうした社会
に適応して生活するためには、海
外の情報への感度を高める姿勢が
欠かせないと言えます」

働く

グローバルな動きと現地の情報を捉える姿勢が必要

グローバル化によって、企業活
動のあり方は大きく変化してい
る。複数の国・地域で事業を展開
する多国籍企業が世界中に増えて
おり、日本企業でも海外の売上比
率が高まっている。だが、ある国
で受け入れられた商品やサービス
が、そのまま他国・地域で通用す
るとは限らず、企業は事業を展開
する国・地域の文化や価値観に基
づいたニーズを捉える必要がある。

「海外で事業を展開しても、消
費者が求める商品やサービスを提
供するという企業の原理原則に変
わりはありません。そのため、文
化や習慣、宗教、価値観などが異
なる国や地域を企業活動の対象と
するならば、それらの国や地域の
状況を綿密に調査した上で、商品
やサービスを設計することが欠か
せません。例えば、世界展開する
外食チェーン企業では、同じ商品
でも、商品を提供する地域に住む
人々の嗜好に合わせて味を微妙に

変えて販売する例が見られます」

海外で事業展開をする多国籍企
業に勤めれば、海外出張はもちろ
ん、電話やメール、オンライン会
議など、様々な場面で外国人とコ
ミュニケーションを取る機会があ
るはずだ。加えて、国内向けに商
品・サービスを展開する企業で
あっても、国内在住の外国人の増
加を受け、多様性への配慮が必須
となっている。

図4 海外で働く日本人の評価が低い項目

海外で働く日本人に対する現地従業員からの評価が低
かった項目

- ◎ 現地語を熱心に勉強している。
- ◎ 現地の商習慣をよく理解している。
- ◎ 現地の文化や風俗習慣を理解している。
- ◎ 上の人が間違っていたらはっきりと指摘する。
- ◎ 対外交渉力の強さ。
- ◎ 人脈（社内・社外）の広さ。

* 白木三秀『グローバル・マネジャーの育成と評価』「現地従業員に
よる上司調査」（早稲田大学出版部、2014年）を基に編集部で作成。

* 1 定額料金を支払うことで一定期間利用できるサービスのこと。

学ぶ

「企業は今後、様々な国の人が顧客になることを一層考慮する必要があります。グローバル社会では、多くのことが世界と連動しています。ですから、グローバルな知識や発想を持たない企業は、この先、生き残ることは難しいでしょう。また、私の調査研究において、『海

グローバル人材に必要なのは「前向き行動力」

「グローバル人材」という言葉がよく使われるが、グローバルに活躍する人材は、どのような資質・能力を備えているのか。白木教授は、海外に派遣された日本企業の若手社員を対象に、パフォーマンスを決定するコンピテンシーに関する調査研究を行った（*2）。

62のコンピテンシーを、「前向き行動力」「異文化適応能力」「仕事能力」「対人関係能力」の4つの因子に分け、それぞれの因子の、①仕事成果の向上、②スキル・能力の伸長、③仕事・生活環境への適応、④仕事満足・モチベーション

外勤務の日本人は、現地の従業員から、現地の文化や商習慣などを理解していないと評価されている」という結果が出ました（図4）。仕事の能力だけでなく、赴任先の文化に関心を持ち、一緒に働く人に配慮することも、仕事をする上では重要なのです」

考えられるのは、「前向き行動力」だった（図5）。

『「前向き行動力」は、①④のパフォーマンスのすべてに良い影響を与えていました。次いで重要と考えられるのは、③と④のパフォーマンスの決定要因となった『異文化適応能力』です」

ンの4つのパフォーマンスへの影響を評価した。その結果、海外で活躍するために最も重要な因子と

『「前向き行動力」は、大小様々なことに挑戦し、成

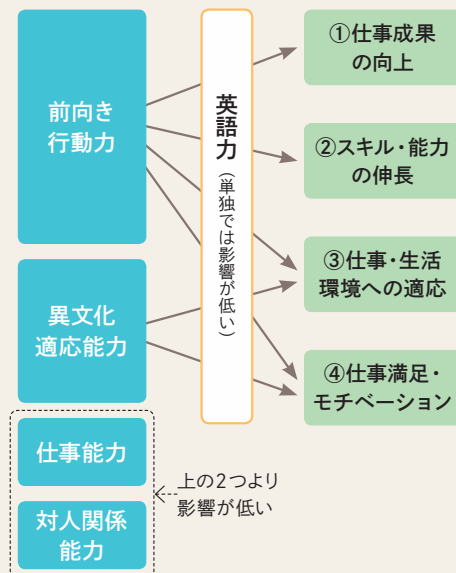
身につけるためには、どういった学びが必要になるのか。

功と失敗を積み重ねる中で培われるのではないかと思われます。結果にかかわらず、努力したプロセスを評価することも大切です」

英語力は、すべてのパフォーマンスの向上に必要な不可欠であったが、単独では強い影響を及ぼさず、ほかのコンピテンシーが伴う必要があると分かった。

「海外で活躍するためには、好奇心を持ち、リーダーシップを備えることが求められます。高校でも、生徒が主体的に挑戦するような体験を積んでおくことが重要だと言えるでしょう」

図5 グローバル人材が備えている資質・能力



海外に赴任した若手社員のパフォーマンスを決定する要因を、自己評価および上司評価を通じて調査した結果（*2）。

* 白木教授提供資料を基に編集部で作成。

図6 「前向き行動力」を構成するコンピテンシー

- ◎複雑で矛盾に満ちた状況に対応できる。
- ◎既存のやり方にとらわれず、臨機応変に対応する。
- ◎自分の仕事上の貢献をアピールしている。
- ◎新しい仕事・挑戦に意欲的である。
- ◎問題点を素早く発見できる。 ◎交渉力が強い。
- ◎視野・見識が広い。 ◎決断力がある。
- ◎想定外の状況において冷静に対応できる。
- ◎将来のニーズやチャンスを先取りできる。
- ◎新しい事や人との出会いを楽しんでいる。
- ◎指示や説明を分かりやすくできる。
- ◎課題達成・目標実現に向けて、リスクを取ることができる。
- ◎物事を定量的に考えることができる。
- ◎顧客からの評価を前向きに受け止める。

* 白木教授提供資料を基に編集部で作成。

* 2 白木教授が実施した「若手日本人派遣者調査（2016年）」。「調査概要」サンプル数：302人（本人&上司のマッチング・データ）/対象：20代、30代（平均年齢33.3歳）/赴任地域：アジア（中国を除く）41%、北米21%、中国20%、ヨーロッパ17%/調査方法：コンピテンシー（62項目）の自己評価、およびパフォーマンスに関する上司評価とのマッチング/評価方法：62項目のコンピテンシーを「前向き行動力」「異文化適応能力」「仕事能力」「対人関係能力」の4因子に分けて、「仕事成果の向上」「スキル・能力の伸長」「仕事・生活環境への適応」「仕事満足・モチベーション」の4つのパフォーマンスにどう影響するかを評価。さらに英語力の効果・影響を評価。

SDGsの視点で見る大学の学び



SDGsの達成に向けた取り組みや研究の視点で、大学の学びを紹介する本コーナー。今号では、飢餓の撲滅などを目指す目標2と、持続可能な経済成長と人問らしい雇用を促進する目標8に関する大学の学びを取り上げる。まずは、それぞれの目標について、世界と日本の状況を解説した後、目標2は東京農業大学、目標8は同志社大学の学びを紹介する。



解説



目標2
飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する

世界の状況

人口増加の中、食料分配や栄養障害の対策が急務

世界では9人に1人、約8億人もの人々が飢餓に苦しんでいます(*1)。先進国では食品ロスが問題ですが、アフリカなどの途上国では食料不足が深刻で、世界全体では、足りている食料の分配に課題があると云えます。人口増加により、2050年までの食料需要は10年ごとに14%ずつ増加すると予測されて

いる一方、農業生産量は気候変動の影響で、10年ごとに2%ずつ減少すると言われており(*2)、早急な対応が求められています。目標2には、栄養障害の問題も含まれています。栄養欠乏や栄養の過剰摂取により、世界の人口の3分の1が栄養障害に陥っています。その原因の1つに、食事の単純化が挙げられます。私たちが摂取する食物エネルギーの摂取量の半分は、米・小麦・トウモロコシの3大穀物に依存しており、脂質やカルシウム

解説



目標8
包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人問らしい雇用(ディーセントワーク)(*4))を促進する

世界の状況

新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、世界的な不況に

21世紀に入り、各国・地域の1人あたりの経済成長率は、多少の差はありましたが、おおむね上昇傾向でした。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大以降、景気が急速に冷え込み、2020年の世界経済の成長率は、マイナス4.4%になると予想されています(*5)。特に、アフリカのサブサハラ地域の経済成長

率の数字からは、深刻な経済危機が予測されています。ウガンダなどアフリカでは、以前から若者の高い失業率、児童労働教育や職業訓練の不足といった問題がありました。コロナ禍において、問題がさらに深刻化しています。農業生産性の低さから、都市部には農村から人が流入していましたが、感染拡大の影響で職を失う人が増え、自殺率が増加。都市部から農村に戻る人も多く、農業従事者が増加したことにより、農産物の価格が下がる

*1 国際連合「世界の食料安全保障と栄養の現状」(2019年7月)。*2 IPCC(国連気候変動に関する政府間パネル) *3 生物多様性の保全を目的として、植物の種子や動物の精子・卵子、微生物など、様々な遺伝資源を収集し、保存する仕組みや施設。 *4 decent work. ILO(国際労働機関)が21世紀の目標として、2009年のILO総会で提唱し、支持された考え方。

などが不足しています。途上国では、栄養不良による発育阻害といった問題のほか、先進国のように、一部の栄養素の過剰摂取による糖尿病などの病気も増えています。

食料の安定供給に向けて、国際機関が中心となり、干ばつや高温障害に強い品種の開発などを行い、農作物の生産性を高めることが重要です。また、栄養障害の解決には、農作物を多様化させることで、安定的な食料供給につなげるとともに、その消費を通じて栄養価向上を目指す取り組みが必要だと考えられます。

日本の状況

農業生産能力向上のための国際貢献が必要

日本は飢餓から遠い状況にありま

解説者



東京農業大学
国際食料情報学部
国際農業開発学科
教授
入江憲治
いりえ・けんじ

専門分野は、熱帯地域における作物生産や植物遺伝資源に関する研究。青年海外協力隊（ネパール）や国際協力機構専門家（ミャンマー）として、国際協力の業務に携わった後、大学教員となる。2013年から現職。

す。ただ、目標2のターゲットには、農業生産能力向上のための技術開発や植物・家畜のジーン・バンク（*3）への投資の拡大を図ることが含まれており、そうした側面からの国際貢献が求められています。生産能力の高い新たな品種開発を進めるためには、多様な遺伝資源が不可欠で、その持続的利用には、国際的なネットワークを構築して取り組む必要があるからです。

持続可能な農業の促進も重要な目標の1つです。農作物の栽培に過剰に化学肥料が使用され、それが川や海に流出すると水質汚染につながってしまいます。環境負荷を軽減した農業の推進が重要です。

また、国や生産者が協力し、食の多様化を広めていくことが重要です。なぜなら、栄養バランスの崩れが日本人の生活習慣病の大きな原因となっているからです。日頃から栄養バランスのよい食事を心がけ、健康を維持することが必要です。

P.54～55で、目標2の達成に向けた「東京農業大学」の学びを紹介しています。

解説者



同志社大学
政策学部
教授
岡本由美子
おかもと・ゆみこ

専門分野は、国際経済、国際開発。神戸大学大学院国際協力研究科助教授、アメリカ・ブランドイース大学大学院国際経済金融研究科客員助教授、名古屋大学大学院国際開発研究科助教授を経て、2004年から現職。

状況も報告されています。そうした甚大な影響を被っている途上国に対して、比較的影響の影響が少ないアジア・太平洋地域の先進国が積極的な国際協力を行うべきでしょう。今後の経済成長を考える際には、持続可能であることが重要です。EUのように先進国の中には、社会や環境に配慮しながら、持続可能な開発を目指して一定の成果を上げた地域もありますが、日本を含め、多くの国や地域では、経済と社会や環境のバランスの取れた開発に課題があります。

日本の状況

誰もが働きがいのある社会の仕組みの構築が必要

日本は、先進国の中で経済成長率

が低い方に属しますが、失業率の低さは世界でも群を抜いており、安定的な雇用の維持ができています。

ただし、正規雇用と非正規雇用の賃金や待遇の格差、長時間労働などは大きな課題です。特に、コロナ禍の影響で、男女間の雇用の格差が顕著化しています。20年4月以降、仕事に何らかの影響があった人は男性が18%、女性が26%で、女性は男性の1.4倍に上っています（*6）。中でも非正規雇用の女性が大きな影響を受けていることが明らかになっています。

また、若者の自殺率が高いことも課題です。働きづらさの影響から15～39歳の各年代の死因の第1位は「自殺」であり、先進7か国と比較しても高くなっています（*7）。

正規・非正規雇用の待遇差の改善や、結婚・出産後の女性の就業継続の支援、メンタルケアなど、誰もが働きがいをもって仕事に取り組める制度・仕組みの構築が必要でしょう。

P.56～57で、目標8の達成に向けた「同志社大学」の学びを紹介しています。

* 5 IMF(国際通貨基金)世界経済見通し(2020年10月)。 * 6 新型コロナウイルスと雇用・暮らしに関するNHK・JILPT共同調査より。 * 7 厚生労働省「自殺対策白書」(平成30年版)。先進7か国は、フランス・ドイツ・カナダ・米国・英国・イタリア・日本。

この学びに
関する
SDGsの
目標



大学の学び

**実学主義の下、国際農業を学び、
飢餓や食料問題の解決を目指す**
東京農業大学 国際食料情報学部 国際農業開発学科
熱帯作物学研究室

社会科学と自然科学の 両面から国際農業を学ぶ

東京農業大学 国際食料情報学部
は、世界と日本の食料や農業、農村
問題について学ぶ学部だ。同学部の
4学科（*1）のうちの1つである

私たちが紹介します



伏見和子
ふしみ・かずこ
東京農業大学大学院 農学研
究科 国際農業開発学専攻
博士前期課程1年

神奈川県立横浜国際国際高等学校卒業。東京農業大学国際
食料情報学部国際農業開発学専攻卒業。



射場木萌春
いは・もちは
東京農業大学大学院 農学研
究科 国際農業開発学専攻
博士前期課程2年

東京都立国際国際高等学校卒業。東京農業大学国際食料情
報学部国際農業開発学専攻卒業。

国際農業開発学学科は、国際的な農業
開発の専門家として活躍する人材の
育成を目指している。

同大学大学院農学研究科博士前期
課程1年の伏見和子さんは、高校時
代に社会問題を学ぶ授業で飢餓問題
に関心を持ち、食料不足などの食料
問題を学びたいと考え、国際農業開
発学学科を志望した。

カリキュラムの大きな特徴は2つ
だ。1つめは、大学の教育研究の理
念である実学主義の下、1〜3年次
まで各学年で必修の農業実習がある
こと。2つめは、社会科学と自然科
学の両分野の専門科目が開講されて
いることだ。

「途上国の農村社会について学ぶ
社会科学系の科目と、熱帯・亜熱帯
の作物育種（*2）や土壌を学ぶ自
然科学系の科目の双方を履修でき、

途上国の状況がより立体的に見えて
きました」（伏見さん）

同大学大学院農学研究科博士前期
課程2年の射場木萌春さんは、入学
時から農業に加え、国際協力に関心
があった。

「2年次の必修科目『国際農業協
力論』では、政府開発援助のプロジェ
クトにかかわった教授から、豊富な
写真を使った授業で、現地の実情を
学びました。大学の学びを現場でど
のように生かせるのか、イメージす
ることができました」（射場さん）

国内外の機関と連携し、 実践的に研究を進める

同学科では、実践的な国際農業開
発学に低学年次から触れられるよう
に、1年次から研究室に入室できる

この学びに関する 他のSDGsの目標



（*3）。伏見さんは1年次6月から、
射場さんは2年次11月から入江憲治
教授の熱帯作物学研究室に所属し
た。小学6年生までアメリカで過ご
した射場さんは、帰国後、日本の米
の味に感動した経験から、イネの研
究を志した。

「2年次の必修科目『農業専門実
習』では、田植えから収穫までを行
いました。実習用水田の隣には熱帯
作物学研究室の水田があり、環境ス
トレス（*4）に強いイネを研究し
ていると知りました。私もイネの研
究を行い、途上国の農業に役立てた
と考え、入室しました」（射場さん）

同研究室は、大学院の農学研究科
国際農業開発学専攻と合同で学ぶ。
熱帯・亜熱帯地域で栽培されている
農作物の特性解明や新規利用法の開
発、栽培技術の開発・改良に重点を

*1 国際農業開発学学科、食料環境経済学学科、国際バイオビジネス学科、国際食農科学科。 *2 作物を遺伝的に改良すること。 *3 1年次から室員として入室可能。3年進級時までは全員が研究室に所属する。 *4 水の不足や土壌の過湿、高温や低温、塩の影響など、作物の生育を抑制するもの。

置いた研究をし、「目標2 飢餓をゼロに」に貢献する研究を行う。

研究は、国内外の機関と連携しているのが特徴だ。伏見さんは、3年次に2週間、入江先生の紹介でケニアのビヒガ県での農業実習を経験。4年次に10か月間、同県に青年海外協力隊の短期ボランティア（*5）として滞在し、同県の農業多様性評価に関する調査・研究を行った。主食がトウモロコシの同県では、食事の単純化が原因による肥満や、ビタミン・鉄分などの不足による栄養不良の問題があった。

「現地の家庭を訪問し、調理段階で使われている食品や調味料の量を調べて、摂取カロリーや栄養素を分析するとともに、地域で伝統的に栽培されている作物種類の多様性も調査しました（写真1）。伝統的な作



写真1 伏見さんが、地域野菜を使った料理の調理手順や方法について教えてもらっている様子。学部生時代は、ビヒガ県の1地域の研究をまとめ、大学院進学後は、他の4地域を調査・分析している。

写真2 フィリピン国際稲研究所で、射場さんがイネの根の到達深度を測っている様子。同研究所には、世界中からイネの研究を行う研究者や学生が集まる。そこで射場さんは、研究発表も経験したという。



物の有効利用を促して（目標15）健康を促進するだけでなく（目標3）、新たな利用開発を行うことで経済創出につなげ、貧困からの脱却（目標1）ができればと考えています」（伏見さん）

射場さんの研究テーマは、乾燥地域でも栽培できる、干ばつに強いイネの開発だ（目標13、写真2）。学部3年次から研究を始め、博士前期課程1年次の9月から1年間はフィリピンの国際稲研究所で、2年次10月から3か月間は茨城県つくば市の農業・食品産業技術総合研究機構で研究を行った（目標17）。

「既存の根の形質を組み合わせることで理想の根のタイプを調査しています（目標15）。学部生時代の研究テーマだった葉や茎に比べ、根は掘り出してから泥を落とし、状態を

計測するまでの処理に時間と手間がかかりますが、研究の余地がある分野です。途上国の農業に貢献できるように、日々、目標を持って取り組んでいます」（射場さん）

国際的な研究経験を生かし、農業関連への就職を目指す

同学科の卒業生は、約半数が農業関連企業・機関に就職し、約2割が大学院に進学する。伏見さんは、国際的な農業機関や農業開発に携わる企業への就職を希望している。

「専門科目では、途上国の開発援助の立案・運営・管理の方法を学びました。研究では、その手法を実行し、日々、振り返りから改善を行うよう心がけました。そうした経験を生かして、国際農業に貢献していきたいです」

射場さんは、博士後期課程に進学後、イネの研究者を目指したいと語る。

「国際機関での研究を通じて、文化や価値観が異なる人と協働して問題解決に取り組む力が鍛えられました。そうした経験を生かして、これからも研究にまい進していきます」

学びとSDGs

海外での研究で適応力を磨き、国際農業に貢献できる人材に



東京農業大学
国際食料情報学部
国際農業開発学教科教授
入江憲治
いりえ けんじ

地球温暖化による気候変動は、干ばつなどの問題を引き起こし、農業の安定的な生産にも影響を与えています。そうした問題に対応するため、本研究室では、新たな品種開発、品種改良に取り組んでいます。長年の研究成果から、1000品種・系統のイネ・ヤムイモ・サトウキビなどの熱帯作物資源を保有しているのが強みです。

農業・農村開発の分野で国際的に活躍する人材には、どのような環境でも目標達成に向けて行動し続ける適応力が求められます。本研究室は、JICA（*6）や国際熱帯農業研究所など、国内外の機関と連携した研究を推進しているため、実践的な研究に参加することが可能です。低学年次から海外実習や研究に積極的に参加し、現地の人との協働を経験することで、現地の生活や文化への適応力を磨くことを期待しています。

世界の農業・農村開発に関心がある高校生には、多様な人と接する機会を持ち、異文化理解のための柔軟な思考力や協働のためのコミュニケーション力を養ってほしいと思っています。

* 5 2018年7月に同大学が青年海外協力隊事務局と結んだ大学連携協定に基づき、学生を休学させることなく協力隊員として派遣し、プロジェクトと連携した活動ができる制度を利用している。 * 6 独立行政法人国際協力機構。政府開発援助の実施機関の1つであり、国際協力の促進に資することを目的としている。

大学の学び

グローバルな視点でのフィールドワークで、 問題発見・解決能力を身につける

同志社大学 政策学部 政策学科
岡本ゼミ

この学びに関する
他のSDGsの目標



社会問題の解決方法を 分野を横断して学ぶ

同志社大学政策学部政策学科は、高度な問題発見・解決能力を身につけ、地域や組織で活躍するリーダーの育成を目指している。同学科3年の小橋杏実こはし あみさんは、入学の動機を次のように話す。

「私は、高校時代から環境問題や

私たちが紹介します



政策学部政策学科
3年
小橋杏実
こはし・あみ
京都府・私立同志社国際
中学校・高校卒業。



政策学部政策学科
3年
山本大喜
やまもと・たいき
三重県立川越高校卒業。

SDGs に関心があり、それらの社会問題を解決するためのアプローチ方法を学びたいと考え、本学部を志望しました」

1年次の必修科目「First Year Experience」では、大学の学習に必要な知識・技能を、1クラス15人程度の少人数で学ぶ。同学科3年の山本大喜やまもと たいきさんは、岡本由美子教授が担当するクラスで学んだ。

「私が中学校時代を過ごしたシンガポールは、高級マンションが立ち並び一方で、貧しい労働者を見かけることも多かったことから、貧富の差について問題意識を持つようになった。大学に入ったら国際的な社会問題の解決に取り組みたいと思っていました。岡本教授のクラスで、ウガンダなどの途上国について学び、持続可能な開発に関心を持ちました」

1年次秋学期から2年次春学期にかけても、少人数制の科目「アカデミック・スキル」が設置されている。

文献講読のスキルやデータ収集・分析の方法など、大学での学習や研究に必要な技能を身につける。同時に2年次からは、政治・行政、法律、経済、国際社会などの広範な専門科目を履修し、分野を横断して学ぶことができる。

国内外のフィールドワークで 現場主義を体感

2年次秋学期からはゼミが始まる。小橋さんと山本さんは、岡本教授のゼミに所属。同ゼミでは、「グローバル社会は持続可能か」をテーマに掲げ、「目標8 働きがいも経済成長も」の実現を目指し、実践的

な国際開発・協力のあり方を研究している。学びの特徴は、問題発見・解決能力の育成を目指し、フィールドワーク（以下、FW）を複数回実施することだ。2年次は国内でFWを行い、そこで得た知見を3年次の海外FWで生かしていくことで、グローバル（*1）な視点も身につけていく。

この1年間は、コロナ禍の影響でFWの内容をオンラインで実施した。まず、2020年3月には国内FWとして、徳島県勝浦郡上勝町かみかつこうのオンライン視察を実施。同町は、南天や紅葉など、日本料理を彩る「つまもの」を、栽培・出荷・販売するビジネスで注目を集める地域だ。

「商品である『つまもの』は軽く、女性や高齢者でも扱いやすいのが特徴です。このビジネスの成功で、同

*1 地球規模（グローバル）の視野で物事を考え、必要に応じて地域視点（ローカル）で行動すること。

町では女性や高齢者の就業率が上がり、収入が増えました。そうした取り組みが途上国の開発に役立てられないかという視点で視察を行いました」(山本さん)

同年9月には、オンラインでの聞き取り調査を、ウガンダの大学や政府関連機関などに対して行った。フェアトレード(※2)に関心があった山本さんは、ウガンダ東部のコーヒートの小規模農家組合の幹部役員に話を聞いた。組合は、質のよいコーヒを生産することで経済的自立を目指しているが(目標1)、日本の食品規格である有機JASの認証取得に苦戦。話を聞くと、認証の取得が遅れている原因は、主に組合スタッフのミスだと分かった。

「私たちは、ミスを減らす仕組み

ウガンダの小規模農家組合への提案書

3.ジェンダーに関して



ジェンダー格差を是正するための啓蒙活動を行い、女性農家を全体の40%に引き上げる案を提示。

に加え、女性農家の自立も課題だったため、上勝町の例を参考に、女性の活用(目標5)を提案しました(図)(山本さん)

小橋さんは、ウガンダへの国際協力プロジェクト班に所属。コロナ禍がウガンダの経済に与えた影響について調べ、オンラインでJICA職員に聞き取り調査を実施した。それらを基に、新型コロナウイルスの感染拡大を防ぎながら経済活動や教育を行う方法について仮説を立て、現地の大学教員などに提案(目標17)。仮説の立案では、岡本教授の助言を受け、現地の人たちのみで実施できる「現場主義」を大切にしました。「大学教員に、農村部の学校でのラジオ教育と分散登校を行うアイデアを提案しました(目標4)。その後ウガンダの大統領が実際にラジオ教育の実施を計画していたと聞き、提案の方向性が間違っていないかったと勇気づけられました」(小橋さん)

フィールドワークで行った提案を卒業論文で深める

現3年生は、コロナ禍が終息に向かえば、21年の夏にウガンダを訪れ、



写真 昨年度のゼミ生がウガンダのマケレレ大学を訪問した際の様子。学生はアフリカの大自然や現地の人と触れ合い、本当の幸せや持続可能な開発とは何かを考えた。

FWを行い、そこでの調査も踏まえ卒業論文を作成する予定だ。山本さんは、オンライン調査でまとめたコーヒー組合への提案を自らの手で実現させたいと話す。小橋さんは、ウガンダの大学で学生や先生と議論したいと意欲を語った(写真)。

「ラジオ教育は実現可能なのか、実現できるならば課題は何かを、現地の大学生と議論し、私の卒業論文のテーマにしようと考えています」
同ゼミ生の卒業後の進路は、多様でありつつも、問題解決能力を生かせる職業を希望する学生が多い。

「ウェブデザインなど、クリエイティブな仕事でクライアントの問題解決に貢献したいです」(小橋さん)
「生活基盤を担う企業など、SDGS達成に貢献できる企業に就職を希望しています」(山本さん)

学びとSDGs

分野横断的な目標の達成に貢献できる人材を育成



政策学部 教授
岡本由美子
おかもと・ゆみこ

政策学部では、SDGsのように分野横断的な目標の達成に貢献できる人材の育成を目指しています。そのため、1年次から、少人数の授業において問題解決型学習を実施するとともに、社会科学分野を横断的に学べるカリキュラムとしているのが特徴です。

ゼミで実施する海外FWのテーマは毎年異なりますが、20年度は、「ウガンダにおけるSDGs達成に与えたコロナの影響」「コーヒー産業の課題」「エコツーリズム」「JICAが実施する北部ウガンダ生計向上支援プロジェクトの評価」の4つの研究を進めました。初めてのオンライン調査では、想定していた以上に議論が深まりました。もちろん、現地に赴き、持続可能な開発とは何かを肌で感じることは重要であり、今後も実施予定です。

高校生には、飢餓問題など、海外で起きている問題も日本に深いかかわりがあることを知り、自分の行動が解決につながるという自覚を持って、学びを深めてほしいと思います。また、ボランティアなどの社会貢献活動にも参加し、視野を広げてから進学してほしいです。

* 2 開発途上地域の農家などの生産者が作る農作物や商品を、公平・公正な価格で継続的に購入し、生産者の自立を支援する貿易の仕組み。

NEXTリーダーが
オンライン&オフラインで
集まり、語り合う

若手教師・教育創造MTG ミーティング

第5回オンラインミーティング・レポート

「自由に語り合える場」の力を生かし、 新しい時代の指導をとともに模索する

全国の若手教師がこれからの教育について語り合う「若手教師・教育創造MTG」。2020年4月にオンラインミーティングをスタートし、その後は有志による対話の会などを重ねながら、12月には5回目のオンラインミーティングを開催。そこでは、全国の若手教師が課題や思いを語り合い、実践を共有する場をつくるなど、今後の展望がメンバーから語られた。



ともに次代を担う若手教師が、
それぞれの持つ課題感を知り、
学び合う

イマドキの進路指導とICT、
流行の中の不易を問う

2020年度、地域や公立・私立の壁を超えて組織された「若手教師・教育創造MTG」。ともに次代を担う仲間が、どのような課題を抱えているのかを知るため、今回のオンラインミーティングも、2人の教師の問題提起（囲み参照）から始まった。1つめのテーマは、「多様化・個別化しているキャリア教育における

教師のサポート」だ。発表者の教師の勤務校では、近年、スタディーサポートを繰り返し直し直すことによる学習習慣の確立や、定期考査前の講習の実施、1年次からの進路指導の充実など、生徒の希望進路の実現を支える校内体制づくりが進み、生徒の学習意欲は着実に向上している。その一方、「3年次の生徒の進路観が個別化・多様化する中で、一人ひとりの生徒に合ったサポートを模索している」と、自身の課題感を

私の教育活動 **喜** **怒** **哀** **楽**

テーマ1 ● 多様化・個別化するキャリア教育

生徒一人ひとりを支えるために

大阪府立枚方なぎさ高校 ひらかた 萩原大希先生 はぎわらたいき

課題として直面していること（問いかけ）

- キャリア観が多様化・個別化している現代において、教員はどんなサポートができるのか。
- 多様化する選抜方法に対する出願指導（早期に決められる方がよいのか？）
- 急増する新しいタイプの学部、学科
- 社会の変化の速さ、家庭の文化資本の違い（情報を持っている、リテラシーが高い方が有利）
- コロナ禍や働き方改革による労働環境の変容

萩原先生の 思い

学習習慣の確立と学習に取り組む動機づけは、生徒にとっては言わば自転車の両輪だ。学習習慣は教師の働きかけで一定の改善が見られているが、希望する進路先や進路に対する志望の度合いなどはますます多様化している。

萩原先生の発表に対する意見・感想

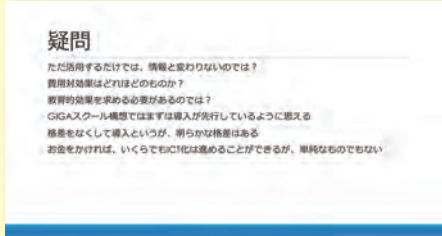
- ◎活動を都度振り返り、それらが将来にどうつながっていくのかを考えさせる活動が重要だ。自分の資質・能力を知って、ふさわしい進路を選べるように生徒を育てたい。
- ◎早期からの進路への意識づけが必要で、その時々を考えをポートフォリオとして蓄積させたい。それらを振り返ることとて生徒は自身の成長を俯瞰し、進路意識を深められる。

私の教育活動 喜 怒 哀 楽

テーマ2 ● ICT活用

ICT活用はどこまで進めるべきか

愛媛県・私立新田青雲中等教育学校 牧紘平先生



牧先生の 思い

各校でのICT環境の整備の進捗、ICT活用による成果や課題などを学びたい。それと同時に、ICT活用はどこまで進めるべきか、そもそも理想の生徒の姿はどのようなものか？といった本質的なテーマにも向き合いたい。

牧先生の発表に対する意見・感想

- ◎ 私たちはICTの活用法をもっと勉強しなければならない。同時に、生徒はICTを活用してどのように授業を改善してほしいと考えているのかにも耳を傾けたい。
- ◎ 私たちがICTに「使われない」ために、教師一人ひとりがICTを使ってどんな授業にしたいのかを明確にして、それを教師間で共有し、練り上げていく必要がある。

打ち明けた。発表者の教師は、「コロナ禍で、各家庭の教育資本の格差が広がり、子どもの進路に対する保護者の考え方もますます多様化している。こんな中だからこそ、いろいろな実践を学んでいきたい」と、率直に思いを語った。

2つめのテーマは、「ICT活用はどこまで進めるべきか」だ。GIGAスクール構想が進み、生徒一人ひとりに公正に個別最適化された学びによって資質・能力を育成する時代が近づいている。発表者の教師の勤務校でも、校内LANやWi-Fiの整備が進み、生徒はClassi（*1）の

を活用したポートフォリオの作成や、ウェブドリルでの演習に取り組んでいる。発表者の教師は、「OST（*2）を使ったスピーキング指導で英語の成績が向上するなど、手応えも感じており、より効果的なICT活用の実践例を学んでいきたい」と意気込みながらも、「ICTを活用して本校の生徒をどのように育てたいのかという目指すべき姿と、そのためにどこまでICT環境を拡充するのかといった、学校としての見通しが必要だと感じている」と、激変する教育環境の中で抱えている課題感を冷静に語った。

「自由に語り合える場」の力を知った私たちに、これから何ができるのだろうか

ニューノーマル時代の指導を模索する仲間として

オンラインミーティングの後半には、2021年度の「若手教師・教育創造MTG」のあり方について意見交換が行われた。メンバーからは、次年度以降もつながりの場を持ち続けたいという声が上がった。

コロナ禍で学校の日常が大きく変化する中、「ニューノーマル時代の指導を模索するような教育活動に挑戦し、その成果や課題を共有し合うことで、若手教師の力を引き出せるのではないか」といった提案からは、臨時休業のような予測困難な状況にも対応できる準備をしたいという危機意識が感じられた。また、「体育祭や文化祭の簡素化など、ニューノーマルを模索する過程で生徒が直

面した不利益を、各校はどのように解消しているのか、テーマを絞って情報交換をしたい」といった意見も上がった。さらには、「メンバー同士で普段の授業を動画などで見せ合い、意見交換してみてもどうか」「我々教師が地域を超えてつながるように、生徒同士を交流させたい」といった提案や、「4月に創刊される『VIEWnext』本誌でも、若手教師の意見をたくさん取り上げてほしい」といった要望も出された。

この8か月、オンラインミーティングでの気づきや学びを自身の指導改善につなげていった教師は少なくなかった。大きく変化する学校現場に身を置く教師が、自分の考えを自由に語り合うことは、目の前の生徒にとっても必ずプラスになることを、メンバーは証明したのだ。

若手教師・教育創造MTG 参加メンバー 佐藤亮介（北海道・私立札幌第一高校）、佐藤紘大（岩手県立遠野高校）、清水絢子（宮城県村田高校）、高秀大作（栃木県立矢板東高校）、浅見和寿（埼玉県教育局立学校部立学校人専科）、森迫恒平（神奈川県立愛川高校）、石黒佳奈（富山県立南砺福野高校）、吉岡弘和（福井県立美方高校）、森田歩美（三重県立神戸高校）、萩原大希（大阪府立枚方なぎさ高校）、山田伸太郎（鳥根県立浜田高校）、川口広司（広島県立広島工業高校）、石田純一（山口県立山口高校）、牧紘平（愛媛県・私立新田青雲中等教育学校）、白藤空（福岡県立八幡南高校）、ほか1人。

*1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。
*2 ベネッセが提供するサービスの1つで、インターネットを通じてネイティブスピーカーと1対1で英会話ができるサービス。

新学習指導要領の実施に向けた準備が本格化する中、学校現場は様々な課題に直面することが予測される。本コーナーでは、実践事例や有識者インタビューなどを通じて、現場の疑問や課題を解決し、自校の実践につなげる情報を提供する。

テーマ

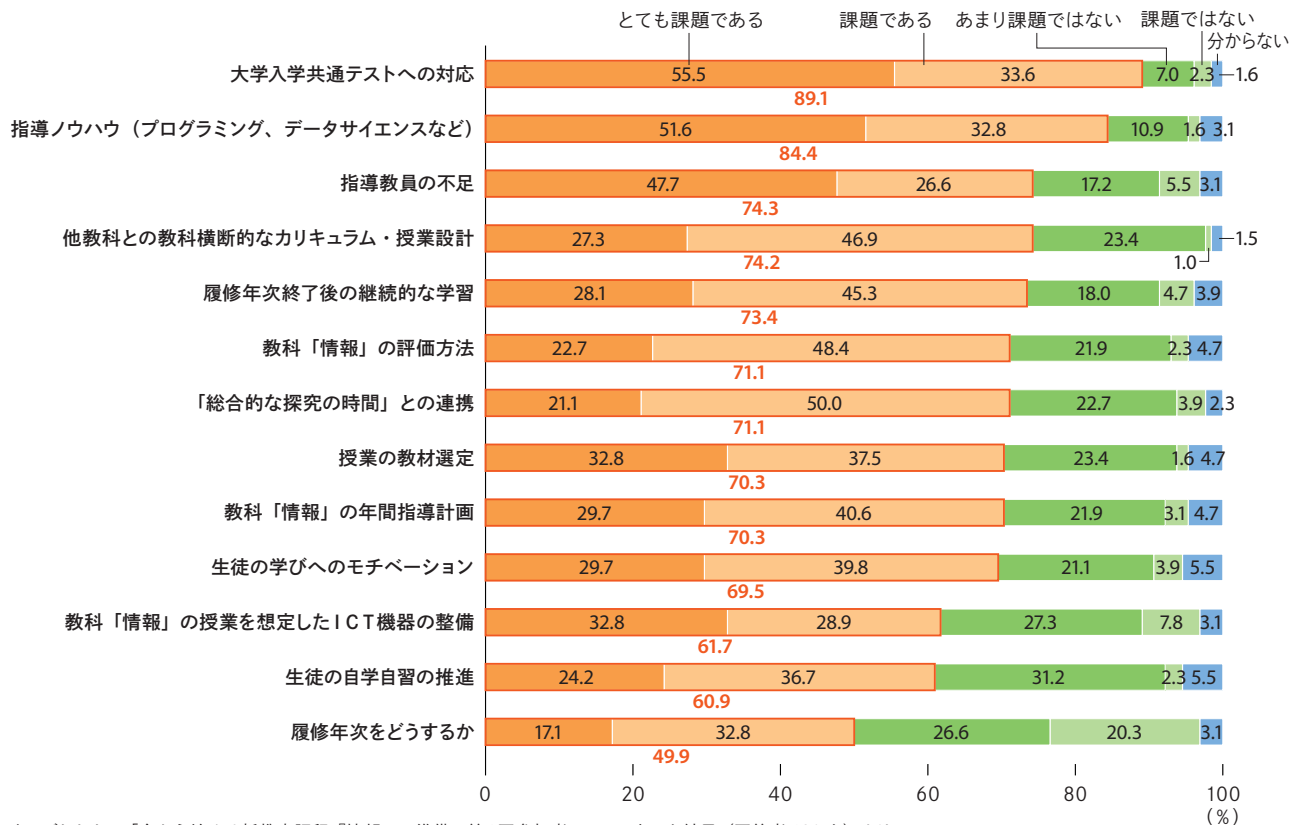
新教育課程における 教科「情報」のポイント

**教科「情報」の変更点
共通必修科目となる「情報Ⅰ」
の課題と指導の要点を整理**

新教育課程で教科「情報」は大きく変わる。現行課程では「社会と情報」「情報の科学」が選択必修科目だったが、新課程では「情報Ⅰ」が共通必修科目、発展的な内容の「情報Ⅱ」が選択科目となり、それぞれ学習内容も拡充。昨年には、大学入試センターが新学習指導要領に対応した2025年度大学入学共通テストの出題教科・科目等の検討状況を示し、「情報Ⅰ」が新設予定であることに注目が集まった。

そうした中、ベネッセは21年1月14日に、ウェブセミナー「今から始める新教育課程『情報』の準備」の第1回を実施。セミナー参加者へのアンケート結果からは、「大学入学共通テストへの対応」が課題感としては最も高く、次いで「指導ノウハウ」や「指導教員の不足」など、教科「情報」に関する様々な課題意識が浮かび上がった(図1)。次ページからは、セミナーの内容やアンケート結果から、教科「情報」の課題を整理し、指導の要点を考える。

図1 新課程における教科「情報」に対する学校の課題感



*ウェブセミナー「今から始める新教育課程『情報』の準備」第1回参加者へのアンケート結果(回答者128人)より。

Q1 なぜ、「情報Ⅰ」が必修科目に設定されるのか

A1 Society5.0として提唱される超スマート社会では、情報化やグローバル化が進展し、Aが様々な判断を行ったり、あらゆるものがインターネット経由で最適化されたりすることに伴い、我々の生活や仕事のあり方も大きく変化すると考えられている。

Q2 「情報Ⅰ」は、従来の科目とどう異なるのか

A2 現行課程では、全国のおよそ8割の高校が「社会と情報」を履修しているとされている。現行課程における「社会と情報」と比べて、新課程における「情報Ⅰ」は、学習内容が大幅に増加及び高度化している点に注意が必要だ。

高校の新学習指導要領では、そうした状況に対応できるようにするための教科等横断的な資質・能力として、「情報活用能力」を位置づけている。そして、教科「情報」の充実により、文理を問わずすべての生徒の情報活用能力を育成していく方針だ。

一方、小・中学校や大学でも情報教育に関連する変革が進む。小・中学校では「GIGAスクール構想」による端末整備が進行中で、小学校では、20年度よりプログラミング教育が必修化された。大学教育では、Aリーテラシー教育や情報系の資格取得が推進されている。そうした動きを俯瞰すると、「情報Ⅰ」必修化のねらいが一層明確に見えてくるだろう。

「情報Ⅰ」は、①情報社会の問題解決、②コミュニケーションと情報デザイン、③コンピュータとプログラミング、④情報通信ネットワークとデータの活用との4項目で構成される(図2)。そのうち、現行課程の「社会と情報」の学習内容の多くは①②に含まれる。一方、③④は、「情報の科学」の内容と重なる部分もあるが、新規の項目やこれまで以上に深い理解が求められる内容も少なくない。その中でも、特にその傾向が強い、情報デザインやプログラミング、データサイエンスの基礎となるデータの活用は、重要ポイントと言えるうだ。

図2 新課程と現行課程の教科「情報」の比較

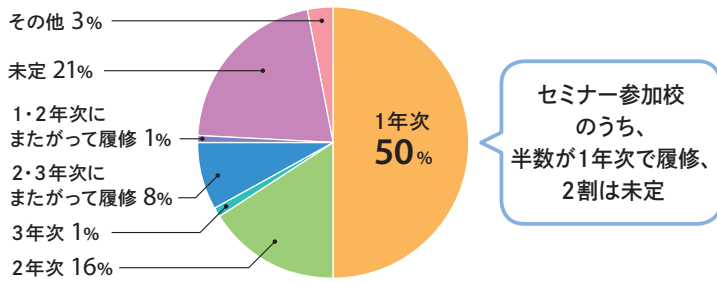
新課程	現行課程	
	社会と情報	情報の科学
情報Ⅰ ①情報社会の問題解決 ・情報やメディアの特性、問題の発見・解決、問題解決の振り返りと改善 ・情報に関する法や制度、情報セキュリティの重要性、情報社会における個人の責任と情報モラル ・情報技術が人や社会に果たす役割と及ぼす影響、情報と情報技術の適切かつ効果的な活用、望ましい情報社会の構築	3. 情報社会の課題と情報モラル 4. 望ましい情報社会の構築	4. 情報技術の進展と情報モラル
②コミュニケーションと情報デザイン ・情報のデジタル化、コミュニケーション手段の特徴、コミュニケーションツールの特徴 ・情報デザインの役割、情報の抽象化・可視化・構造化、情報伝達の方法 ・情報デザインの考え方を活かしたコミュニケーション、コンテンツ制作の過程、コンテンツの評価・改善	1. 情報の活用と表現 2. 情報通信ネットワークとコミュニケーション	
③コンピュータとプログラミング ・コンピュータの仕組み、計算誤差 ・基本的プログラム、応用的プログラム、アルゴリズムの比較 ・モデル化とシミュレーション、確定モデルと確率モデル、自然現象のモデル化とシミュレーション		1. コンピュータと情報通信ネットワーク 2. 問題解決とコンピュータの活用
④情報通信ネットワークとデータの活用 ・情報通信ネットワークの仕組みと役割、通信プロトコルとデータ通信、情報セキュリティ ・データの蓄積と管理、データベース、情報システムとそのサービス、データの提供 ・データの表現、データの収集と整理、データの分析と評価		1. コンピュータと情報通信ネットワーク 3. 情報の管理と問題解決

* 黄色い背景は新規の内容若しくは現行課程と比較してより深い理解が求められる内容。

* 新学習指導要領解説を基に編集部で作成。

図3 「情報I」の履修予定年次

■新学習指導要領で新設される「情報I」は、何年次に履修する予定ですか



セミナー参加校のうち、半数が1年次で履修、2割は未定

*ウェブセミナー「今から始める新教育課程『情報』の準備」第1回申し込み者のアンケート結果(回答者207人)より。

Q3 「情報I」は、どの年次で履修すべきか

A3 「情報I」の履修年次について、本セミナー申し込み者へのアンケートでは、現時点の予定として、1年次が半数を占め、2年次は16%、3年次は1%だった(図3)。新学習指導要領では、同一学年内での履修が推奨されているが、1・2年次若しくは2・3年次にまたがって履修を予定する学校も約10%

あった。「情報I」を1年次に履修する大きな利点は、他教科や「総合的な探究の時間」と連携させて学びを深めやすいことだ。半面、入試までに時間があいてしまったため、生徒が2年次以降も継続して学習を続けられる工夫が必要である。例えば、「情報I」以外の教科や「総合的な探究の時間」の授業を、積極的にコンピューター端末を活用し、「情報I」で学習した内容を踏まえてデザインすれば、1年次の学習を深められるだろう。

Q4 他教科との連携についてどう考えるか

A4 新課程における教科「情報」では、これまで以上に教科等横断的な学習活動が重視される。新学習指導要領には、特に数学科と公民科と連携を図るために配慮を行うことが明記されている。例えば、「情報I」の「コンピュータとプログラミング」の内容に含まれるモデル化とシミュレーションの学習内容は「数学A」の「場合の数と確率」と、また、「データの活用」については「数学I」の「データの分析」と関連がある。さらに、情報デザインやデー

タの活用を始め、「情報I」で学習する内容は「総合的な探究の時間」で進める調査研究活動と関連づけられるものが多い。時間数の限られた探究活動の質を高めるために、教科「情報」で理論を学び、「総合的な探究の時間」で実践を深めるといった連携の進め方も重要になる。学習の順序や関連性に留意したカリキュラム設計が求められることに加え、関連教科の教師と教科「情報」の履修内容を共有したり、教科間で授業進度を確認したりする必要があるだろう。

Q5 中高接続を考える上で、どこに注目すべきか

A5 20年度より、小学校では新学習指導要領下でのプログラミング教育がスタートした。一方、21年度に施行される中学校の新学習指導要領でも、現行課程に比べて情報教育の内容が増加・高度化している。

義務教育段階から情報活用能力の育成が期待される一方で、学校や自治体ごとにICT機器の整備状況や指導内容が異なり、児童・生徒によって学習進度や理解度、学習意欲などが異なることが予測される。今後の多様化が進むことが予測される。近隣の小学校でのプログラミング教育や中学校での技術・家庭科の学習進度・内容を確認し、各生徒がどのような情報活用能力を身につけてきたのかを把握した上で指導計画を作成する必要も、今後高まるだろう。

Q6 共通テストでの新設に向けての検討状況はどうか

A6 20年10月、大学入試センターより、25年度大学入学共通テストで「情報I」の新設が検討されていることが示された。PCやタブレット端末を用いたCBT形式の試験が適当としつつも、公平性の担保が難しいため、マークシート形式を前提に検討が進められている。今後は、「情報I」が入試科目となることを見据え、履修年次や授業内容を検討することが重要になる。文部科学省による「情報I」教員研修用教材(※1)のほか、大学入試センターが公表した試作問題(※2)なども活用して、早めに指導方針を検討したい。

21年夏には、大学入学共通テストでの「情報I」の導入に関して、まとまった情報が発信される見通しだ。

*1 文部科学省による「情報I」教員研修用教材 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1416756.htm

*2 大学入試センター「情報」試作問題(検討用イメージ) <https://www.ipsj.or.jp/education/9faeag0000012a50-att/sanko2.pdf>

第2回テーマ

先生方と一緒に考える「情報I」に向けた準備

日程 2021年3月20日(土・祝) 14:00-15:30
2021年3月24日(水) 16:00-17:30 ※3月20日の録画再放送

形式 Zoomによるオンラインライブ配信 **参加費** 無料

対象 教科「情報」の授業をご担当される先生
新課程に向けた教科「情報」の準備にかかわる先生

基調講演
(予定)

講師 愛知県立高蔵寺高校 田中 健先生

演題: 新教育課程「情報I」に向けて

~この機会に「パソコンの授業」から脱却してみませんか?~

- ◎ 現行2科目と「情報I」との比較・提言
- ◎ 「情報I」の学習内容を見据えた授業実践紹介

※セミナーの内容は予告なく変更する可能性があります。



私立高校教諭、愛知県立の他校教諭を経て、2020年度より高蔵寺高校の情報科専任教諭。進学校である同校では、進学後の学びにつながる情報の授業を模索中。数研出版株式会社から発行されている「社会と情報」「情報の科学」の指導書、補助教材の執筆・編集にも携わっている。

申し込みはこちらから

2021年3月20日(土・祝) 14:00-15:30 開催分 申し込み
https://zoom.us/webinar/register/WN_eXRL38ehRUa_tICtrJ1dVw
〈申し込み締め切り 3月15日(月)〉



2021年3月24日(水) 16:00-17:30 開催分(※3月20日の録画再放送) 申し込み
https://zoom.us/webinar/register/WN_0-d9pTswQE0OG5lq_T4pKg
〈申し込み締め切り 3月19日(金)〉



ウェブセミナー第1回の内容はハイスクールオンラインで2月19日より公開予定です

第1回テーマ 新課程「情報」の内容と課題整理

- ◎ 新教育課程における教科「情報」の内容整理
- ◎ 中高接続の視点で注意すべきこと
- ◎ 大学入学共通テスト「情報I」新設についての議論内容



アクセス https://bhso.benesse.ne.jp/hs_online/shinkatei/kyoka_joho.html

または

Benesse High School Online「トップページ」▶ 入試改革/新課程 ▶ 「特設コーナー」今から始める新教育課程「情報」の準備

2020年12月号へのご意見

「できるかもしれない」という気持ちを育む

指導要録の様式が改訂され、3観点での学習評価が求められることになる。そうした中、「できるかもしれない」といった次の学習に向かう姿勢の育成は重要だ。一人ひとりに適切に声をかけることで生徒の背中をどう押すか、指導の肝はそこに尽きる。教師間で情報を共有し、「こうしたら××になってしまう」ではなく、「こうしたら〇〇になれる」と、生徒に夢と希望と勇気を与えられる教師でありたいと、12月号の特集を読み、強く思った。教師の一言で、生徒は変われる。 兵庫県 匿名希望

評価に関する生徒の生の声が参考になる

3観点での学習評価が求められることになり、本校でもその対応への検討が始められた。その中で、12月号の特集で紹介された「高校生に聞いた『よい影響・マイナスの影響を与える教師からのアドバイス・声かけ』」は、生徒の生の声だったので、校内での検討に非常に参考になった。 神奈川県・川崎市立聾学校 藤原正利

海外の入試問題の評価方法を参考にしたい

学校には、生徒や保護者に教育理念とその実現のための評価のあり方を丁寧に伝えることが求められる。12月号の特集の座談会で、北海道大学の鈴木誠名誉教授が自身の経験として話されていた、海外の大学の入試問題を紹介し、そこで測ろうとしている力を説明する方法を取り入れたいと思う。 山口県 匿名希望

「学び方」を学んでほしいという思いが伝わる

12月号の「実践 アクティブ・ラーニング」で紹介された大阪府・私立追手門学院^{おうえん}学院大手前中・高校の福島哲也先生の記事は、生徒に「学び方」を学んでほしいという福島先生の思いがよく伝わってきた。「これからの社会では、何が必要なかを自分で考えて選択するので、その練習を授業でしている」「社会では、好き嫌いに関係なく、多様な他者と仕事することになる」など、実感を伴う言葉で生徒に説明している点が参考になった。滋賀県立草津東高校 堀 浩司

自己の体験を進路指導につなげていきたい

12月号の「これからの進路指導のための世の中トレンド解説」の「働き方改革」の記事を自分事として読んだ。教師の働き方も当然つながるところがあり、大変興味深かった。今後は、教師もジョブ型になるのだろう。自分が何の専門家なのか、得意分野は何か、いま一度見直し、自己分析をして、その体験を進路指導に生かしたい。 静岡県・私立沼津中央高校 後藤松太郎

他者との話し合いから教師の自走化が始まる

生徒の自走化を図る前に、5年先、10年先を見通して教育活動をする、教師の自走化も必要だ。そのために、全国の先生方とオンライン・オフラインで話し合い、自分を成長させていかなければならない。その点で、12月号の「若手教師・教育創造 MTG」での取り組みは、非常によかった。 愛媛県立松山北高校 大谷修一



VIEW21 編集部には配属される以前は、私は学校担当として秋田県に日々お邪魔しておりました。「改良！ 指導ツール ピフォーアフター」の取材のための久しぶりの往訪にあたり、「あゝ おまへはなにをして来たのだと……吹き来る風が私に云ふ」中原中也の「帰郷」が想起されました。が、取材日は、そんな私の銜（くちか）を吹き飛ばす記録の暴風雪。温かく迎えてくださった秋田県立能代松陽高校の先生方、本当にありがとうございました。さて、同コーナーの取材では、板書は必須。時には図表も交えて対話の内容を書き留める筆記音の伴奏が、その場での気づきに深みを与えます。『VIEW21』最後の1年の取材では、黒板は「画面共有」に、伴奏がキーボードの打鍵音に代わることもありましたが、対話の中で生まれる気づきを大事にする姿勢は一貫したつもりです。『VIEW next』でもその志を忘れることなく、編集に努めます。(河野)



電子ブックで閲覧可能

『VIEW21』
高校版は

『VIEW21』高校版の2020年4月号以降の号は、電子ブックでご覧いただけます。ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご確認ください。
HOME → 教育情報 → 高校向け → 情報誌最新号

VIEW21 最新号 検索

VIEWnext 高校版 創刊号 2021年4月号は
4月15日発刊(予定)

『VIEW next』高校版も年6回の発刊です

教師を育てた 言葉たち

No. 024

神奈川県立神奈川総合高校 杉山崇裕 先生

すぎやま・たかひろ

◎教職歴 16 年。同校に赴任して 1 年目。総括教諭。カリキュラム管理グループ。地理歴史・公民科。単位制の同校では、教務担当が生徒の履修相談に乗る。例年夏に行われる後期入学者(*)への履修説明会で、昨年はコロナ禍のため、動画を作成して配信。繰り返し見られると、新入生に好評だった。



教 職歴 8 年目、私は神奈川県教育委員会生涯学習課の勤務となりました。私も立案に加わったグループ学習を軌道に乗せる前に、前任校を去るのは心残りでした。しかし、乳幼児から高齢者までの多様な人たちの学びに関する同課での仕事を通じて、自分の視野が広がるのではないかと胸が膨らみました。

実際、仕事は多岐にわたり、例えば、家庭教育の推進を目的として、企業にノー残業デーの設定を働きかける業務では、各社に片っ端から電話をしました。電話口で断られても諦めずに協力を取りつけ、10 社以上訪問した月もありました。様々な業種の人と話し、家庭教育や社会教育に触れ、学びは学校にとどまらず、一生涯続いていくものだと改めて感じました。

一 方で、教師以外の職を経験し、仕事の進め方に迷いも生じていました。そうした時に出席したのが、東レ経営研究所元社長の佐々木常夫氏による「仕事のあり方」をテーマにした講演会です。そこで話された、国際会議で上司が行う講演の原稿を佐々木氏が作成した時のエピソードに、目からうろこが落ちました。その会議は 3 回目だったため、過去 2 回の講演のうち、情熱と格調の高さが感じられた 1 回目の講演を基に原稿を作成すると、上司からすぐ OK が出たそうです。「自分で一から考えるよりも、先達の知恵を借りれば、効率も質も高まる。その学びの積み重ねの先にイノベーションが生まれる」といった話でした。

当時、記念誌などに掲載する教育長の挨拶文の作成を担当していた私は、後ろめたさを感じながらも、前年度の冊子の挨拶文を参考にしていました。しか

し、佐々木氏の「プアなイノベーションより優れたイミテーションを」という言葉に、自身の仕事の方向性が見えた思いがしました。

そ の後、学校に戻り、初めて進路指導グループの総括教諭となった私は、全国の先進事例を研究して自校に合った形で取り入れようと考え、まずは同グループのみで行っていた出願指導検討会を見直しました。3 学年団と進路指導グループの計 10 人の教師で 3 年生を 30 人ずつ分担。担当者が調べた志望校候補を 10 人全員で検討し、その結果を基に、担任が生徒と面談して出願校を絞り込むようにしました。3 学年団の半数近くが若手教師だったため、負担を分散しつつ、検討会を通じて指導ノウハウを学び、自信を持って生徒を支援できるようにすることがねらいでした。

進路指導グループの先輩教師と話し合い、ほかにも 2 年次に第 1 志望宣言を行うなど、学校全体で希望進路の実現を支援する体制を整えていきました。すると、生徒が教師によく相談に来るようになりました。面談の環境を整えようと、職員室の前の廊下に机と椅子を並べたところ、学習についての質問も増えていきました。若手教師も、周囲に支えられながら自信を持って生徒と面談ができるようになり、次第に生徒からの相談が増え、信頼されるようになっていきました。組織で生徒を支える重要性を実感しました。

その後異動した現任校も若手教師が多く、指導の継承が課題です。先達の知恵を学ぶことから自分のやり方を生み出していき、周囲からイミテーションされる存在を目指したいと思います。

神奈川県立神奈川総合高校 全日制／普通科／共学／1 学年約 250 人／2020 年度入試合格実績（現役のみ）国公立大は、お茶の水女子大、東京外国語大、東京藝術大、横浜国立大などに 30 人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ 453 人が合格。

*同校では、海外帰国生特別募集として、10 月入学となる後期募集を実施している。

VIEW21 編集部からのお知らせ

教育情報誌『VIEW21』は、2021年4月、名称を変更いたします。

予測困難な時代だからこそ、今をしっかりと見つめ、未来を描く。

21世紀のその先も、

先生方の今に寄り添い続ける学校教育のパートナーとなることを目指します。

新名称

VIEWnext

〈ビューネクスト〉

VIEWnext 創刊記念セミナーのご案内

『VIEW21』の『VIEWnext』への名称変更に伴い、VIEWnext 創刊記念セミナーを開催いたします。
ご多用の時期とは存じますが、多くの先生方のご参加を心よりお待ちしております。

開催日時 2021年3月27日(土)
13時30分～15時40分

形式 オンライン (Zoom)

参加費 無料

主催 (株)ベネッセコーポレーション
VIEW21編集部

プログラム

◎特別講演 将棋棋士 羽生善治 九段
「予測困難な時代を生きる私たち人間に求められていること」

◎基調講演 國學院大學 田村学 教授
「コロナ禍の今こそ、『新学習指導要領』の要諦を改めて捉える」

◎分科会

高校領域 「新学習指導要領に基づく新教育課程の編成に必要な視点・考え方」
事例校による実践発表とベネッセ文教総研による解説

小・中学校領域 「ICT×新学習指導要領×個別最適化」
～GIGAスクール構想でどのような学びを実現するか～

◎特別プログラム

若手教師による、「私が考える 教育のnext」の発表

*プログラムの内容は、変更する可能性がございます。あらかじめご了承ください。

*本セミナーへのご参加には、スマートフォン・タブレット・パソコンのいずれかが必要です。

接続にかかる通信費用は、参加される方のご負担となります。

*お問い合わせは、下段の「お客様サービスセンター」までお願いいたします。

*本誌をお送りした封書に、本セミナーの詳しいご案内を同封しております。ぜひご覧ください。



参加申し込み受け付け中!

右の2次元コード、または
下記URLからお申し込みください。



申し込み締め切り

2021年3月24日(水)

<https://enquete.benesse.ne.jp/forms/o/we95866ed9/form.php>

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume6 2021年2月号
2021年2月15日発行 / 通巻第386号 発行人 山河健二 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
VIEW21編集部 〒163-0415 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング
©Benesse Corporation 2021

お客様
サービスセンター

【フリーダイヤル】0120-350455

受付時間 月～金 8:00～18:00 / 土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17